
その少女、 につき

rockless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その少女、
につき

【Zコード】

N7114U

【作者名】

rockless

【あらすじ】

さて
に入るのは何なのか・・・。あ然と考えよう（文字数は
の数とイコールではない可能性があります。そして作者も答えが
わかりません）

プロローグ1話（前書き）

プロローグは回想風で1人称（当時の主人公）3人称（語り手としての主人公、時間軸的に本編開始前夜くらい）が入り混じってます
読みにくいかもせんが、お付き合いください
内容は・・・そういうことに置いてください、という程度のもの

プロローグ1話

物心付いたときから、私の両親は仲が悪かった

家には人が私含めて3人いるとは思えないほど全く会話が無く、夫婦仲は完全に冷え切っていた

家族？なにそれ？ウチはただ1つ屋根の下で一緒に暮らしてるだけの他人・・・

小学校の運動会や参観日も両親が来たことは無かつた

中学に上がった頃から、両親が言い合いをするようになつた

その様子を見て私は、ああこれは離婚秒読みですね・・・つとテレビでちよくちよく聞く言葉を思つていた

人が言い合いをしてるところというのは傍から見ると、迷惑でしかなく、家にいたくなくなつた私は学校帰りに寄り道をするようになり・・・

そして、私はあの人に出会った・・・

中学1年の冬、12月のある日のこと、学校帰りに適当に歩いたあと、公園のベンチで時間を潰してしてると、いきなり男の子に写真を撮られた

いきなり撮られたことに対する文句を言つと、その子はシドロモドロになりながら言い訳をし始めた

なんでも、ずっと欲しかったデジカメがやつと手に入つて、早く1枚撮つてみたいと外に出たはいいが、日没間近のこの時間、特に被写体になりそうなものは無い、なら適当に撮ればいいのに、と言つたら最初の1枚はこだわりたかったとか・・・

謝りもしないし、あー言えばこうひ言つて、何こいつ・・・ムカ付くんですけど？

でも・・・こんな風に同じ年くらいの人と話すのは久しぶりな気がする・・・

両親の関係を見てて、もつすぐ離婚してどっちか引き取られて転校とかするんでしょうね・・・って思つてて、なら友達とか作る意味ないよね・・・なんて思つてずっと一人でいたから・・・

次の日に学校で下駄箱を開けたとき、1通の封筒が入っていた
友達いない、暗い、それに容姿が良いわけでもない・・・そんな私
にラブレター？ああこれは悪戯か、私もとうとういじめの的になっ
たんですね・・・なんて思いながら封を開ける

中に入っていたのはあの時に撮られた、私が写った写真・・・

暗くなりつつある公園で私が1人ポンとベンチに座つて写真・・・
・見た人が、何この人可哀想、と同情を誘う一枚だ。なるほど、こ
れをばら撒かれたくなれば何をされても親や教師に言うなよって
ことですね・・・私としては、こんなのはばら撒かれても正直どうで
もいいんですけど・・・

まあいいです、あちらさんはこれをネタにどんな要求をするんでし
ょうかね・・・封筒にメモは入つてないから写真の裏に書いてある
かな・・・つと写真の裏を確認すると・・・

『昨日は悪かった。写真はやる 1-2 土屋康太』

とだけ書かれていた

私は思わず、はあ？と首をかしげた。昨日の今日でなんで私のク
ラスと名前、そして下駄箱の位置を知っているんだろう・・・？

そして・・・

『悪かったと思うなら撮らないでください。こんな写真いりません

つと『眞の裏に書き足して、クラスと名前を頼りにその人の下駄箱を探して入れた

今にして思えば、なんあの時『眞を返してしまったんでしょう・・・

そのまま捨てていれば、あんなことこなはならなかつたのに・・・

プロローグ1話（後書き）

主人公設定はプロローグが終わって、1話を上げた次に入れます

プロローグ2話

それから数日間、私の下駄箱には毎朝1通の手紙が入っていた

差出人の名前は全て1年2組の土屋康太といつ男子からで・・・

内容は覚えていない・・・私はそれを適当に読んで、その場で裏に適当に返事を書いて相手の下駄箱に入れていたから・・・

返事が来たことが嬉しかったのか・・・いやあれば返事と言つてい
いのか・・・

正直鬱陶しかつたかつたけど、なぜか毎日ちやんと返していく・・・

そして2学期も終わり、冬休み・・・

部活をしてない私は学校に行くことも無く、今までに感じたことが
無い妙な寂しさを感じながら年末年始を過ごしていた

1月4日、そろそろ参拝客も減ったかな、と思い私は初詣に行く・・・

狙い通り、参拝客も疎らで、そんなに時間もとられずに初詣が済む、
このまま家に帰る気は起きてないので適当に町をブラブラと歩く・・・

そして最後に・・・何気なくあの公園のベンチに向かつた

冬の夕方、空は晴れてるわけでもなく、見回すと最近降り積もった雪が溶け残つてゐる・・・

公園には誰もいない・・・当たり前か。こんな寒いんだし、普通なら家から出たくないよね

ベンチに座り、はあ・・・と息を吐く・・・吐いた息が白くなつて・・・
・消えていく

あの日、この場所での人と初めて会つて、言葉を交わして・・・
ちょっと手紙のやり取りしただけなのに、なんでこんなに人の
ことを意識してるんでしょう・・・?

あれ? そういえばちょっと今まで見ていたドラマで、ヒロインが今
の私と似たような状況だったことがあつたような・・・それだと確
か、ヒロインはその気になつていて人のことが・・・ってことは私
はあの人のことを・・・いやいや、ないないありえないって・・・

はあ・・・帰らひ・・・

頭を振りながら立ち上がろうとしたとき、カシャッとデジカメのも
のと思われるシャッター音がした

私はその音が聞こえた瞬間、涙が出そうになつた

でもそれをグッと堪えて、文句を言おうと音のほうを向くが・・・
あの人の姿が視界に入った瞬間、私の抵抗をあっさり突破して、涙
が次々に溢れてきた

ついさっきありえないって思つたばっかりなのに・・・会えただけ
で泣いてしまうなんて・・・

急に泣き出した私を見て、あの人アタフタしながら私を気遣う
勝手に撮つて悪かったと謝つてきて、それでも涙が收まらない私を
見て、どこか痛いのか？とか・・・そんな慌てたあの人様子が段
々と面白くなつてきて、私は・・・

大丈夫・・・ただ、自分の気持ちに気付いただけだから・・・あ
たのことが、好きなんだってね

つと涙を流しながら笑つて、あの人告白した

プロローグ2話（後書き）

ペース早めですが、そうじやないといつまでたってもプロローグが
終わらない・・・

プロローグ3話

あなたのことが、好きなんだってね・・・

それを聞いたあの人はポカンとした表情になつて・・・徐々に顔が真つ赤になつていった・・・

拒絶されたらどうしようとか、思わなかつたわけじゃないけど・・・今なら拒絶されてもまだ大丈夫だと思った・・・また今までの、1人に戻るだけ・・・だから・・・

ねえ・・・私の恋人に、なつてくれないかな・・・?

私はしつかりとそう言いきつた

それから、どれだけ時間がたつたでしょうか・・・?10分?1時間?それともまだ1分くらい?

お互い次の言葉なり行動なりに移るきっかけを失い、立ち竦んでいる
いつの間にか日が完全に落ちて、気温が一段と下がり、私はくしゃみをする

ずっと外にいたから風邪を引いたかもしれない・・・返事は学校でも聞かせてと言つて、私はその場を去つた

2日後が始業式だからこじらせるわけにはいかない・・・家にいたくないから・・・

2日後・・・1月6日、3学期の始業式の日

私はいつもよりかなり早めに登校する・・・

なぜなら私とあの人の学校でのやりとりの方法は、下駄箱に手紙を入れ合う、昭和チックな方法しかないから

だから1分1秒でも早く学校に行って、答えが知りたい・・・

正直早く来すぎた・・・

学校に着き、下駄箱に行くと、ちょうど人が私の下駄箱に手紙を入れようとしているところだった

なんでしょう？自分の下駄箱に何かを入れてるとこりで鉢合わせて・・・すごい気まずい・・・

だからといって戻るわけにもいきないので、そのまま下駄箱、そし

てあの人に近づいていく

するとあの人が下駄箱に入れようとしていた手紙を私に渡してきた。
私がいつもその場で読んでいることを知っていたんですね……

封を開けて中を見ると……

『今度はちゃんと『眞を撮らせてください』』

つと書かれてあった

・・・えーっと・・・これはばどっちなの・・・?

そう聞くと、あの人は呆れるようにため息をついた・・・

・・・察しが悪くて『めんなさいね・・・はつきりと、はいかい
えで答えてくれないとわからないのよ・・・

と私は少し拗ねながら言つ・・・

そんな私をあの人は後ろから抱きしめてきて・・・

・・・好きじゃない相手にこんなことができるか・・・

つと耳元で囁かれた

いくら察しが悪い私でも流石にこれで答えはわかつた・・・けどな
んかカツコつけてるのが気に入らなかつたので、もう一回とぼけて
みる・・・

・・・つで？ イエスなの？ ノーなの？ ピッちなの？

嬉しい気持ちを声に出さないよう、低いテンションで聞いた

するとあの人、スッと私から離れた・・・

怒らせちゃったかな？ つと思い、謝りつとして振り向くと・・・

背を向けてた私に、何をしようとしていたのか知らないけど、あの人の顔が近づいてきていて・・・

まあいつか・・・変にからかっただし、お詫びの意味も込めて・・・

それが、私のファーストキスでした

プロローグ4話（前書き）

たつたこれだけしか書いてないが気付いたよ・・・

自分にシリアスは無理つて・・・

プロローグ4話

それからの数ヶ月は今まで生きてきた中で一番幸せな時間だったバレンタインやホワイトデーといった恋人関係のイベント・・・そして春になつて、暖かくなつてからは、手紙の言葉とお写真を撮るためにいろんな場所に行つたり・・・

春休みやゴールデンウイークには家にもお邪魔をせつめられた

でも、そんな幸せも半年足らずで終わつてしまつた・・・

中学2年の6月、両親が最後の一線を越えた

家の中を飛び交つお皿や小物の数々・・・

お互の口からば、離婚だの死ねだの・・・中学生から見ても低レベルな言葉・・・

これはいよいよ末期だなと思いつつ、私は家を出た

行き先は・・・あの人の家・・・

私の家のことは・・・始めに全部話しておいた。後から知つて隠してたとか言われたくなかつたし、両親が原因で別れるにしても早いうちなら諦めもつくし、私も傷付かないだろつて思つたから・・・

あの人家のに着き、呼び鈴を鳴らす・・・ここまで歩いてきてると
き、途中で雨が降り始めて・・・少し寒い

あの人のお母さんが玄関のドアを開けて、あらあら・・・っと少し
慌てながら、ずぶ濡れの私を家に入ってくれた

連絡もなしに、こんな格好でやつてきた私を、嫌な顔をせず、何も
聞かずに入ってくれる・・・凄くいい人

私の事情を聞いても、そう「大変ね」と一言だけ哀れみの言葉の言
つたとthoughtたら、でも女の子ならお嫁にいっちゃえば関係無いわよ
ね。このままうちの子と結婚しちゃいなさいな。なんて言って、あ
の人との交際を認めてくれた・・・

それを聞いたとき、私は母親の優しさに初めて触れた気がして・・・
気が付いたら泣いていたつけ・・・

家に入れてもらつて、このまだと風邪を引くからとお風呂を勧め
られ、お言葉に甘えて、お風呂に入る・・・上がると下着を含めた

着替えまで用意してくれていて・・・何であるのかな?つと思い尋ねてみたら・・・いつかこんなことがあるかもしないと、「ツソリ用意してたと言つた

さらにあの人のお父さんがもう遅いからと泊まつていいくよつに言つてきて・・・ホント・・・この家の人はみんな・・・涙が出るほど優しい・・・

- ・ そんな優しさに甘えていた私に天罰が下るのは当たり前のことで・・・

今夜を最後に私は・・・2度とあの人の前に立てなくなつてしまつた・・・

プロローグ4話（後書き）

うん、まあ・・・康太の両親の設定は・・・ARIAのグラシマ級に優しい人だと・・・

そういうことにして置いてください・・・

プロローグ5話（前書き）

うん・・・まあ・・・康太も最初からあの体质じゃなかつたと思つ
んだ・・・

そういうことにして置いてくださこ・・・

プロローグ5話

血塗れのあの人・・・

原因は私・・・

私は・・・あの人を殺しかけた・・・

あの人の両親の勧めで、泊まつていいくことになつた私

そういうえば、あの人家の家にいるのに、まだあの人には会つてない・・・

もしかして、私が来てる事、知らないのかな・・・？

なら・・・突然現れた私を見て、あの人はどうな反応をするのかな・・・

ビックリして・・・そのあとで・・・喜んでくれるでしょうか・・・

あの人部屋の前に立ち、コンコンッとドアをノックする

・・・反応が無い

その後、数回ノックをしてみるもやはり反応が無い

仕方なく、少しへドアを開けて中を見る

あの人達は家具で死角になつていて見えないけど、パソコンの音
とカチッカチッとマウスを動かす音が聞こえる

ああデジカメの写真でも整理してるのかな・・・あの人、集中する
と周りのことが一切入らなくなるみたいだから・・・

私は悪いかなと思いつつも勝手に部屋に入った・・・

もし、このとき部屋に入らずにいたら・・・

私は今でも・・・あの人隣にいたのかもしれない・・・

あの人部屋に入り、

・・・もう、いるなら返事してよ・・・

つと不機嫌そうに言つ。するとあの人がビックリして飛び上がり、カチカチカチと凄い速さでマウスを操作した

・・・どうしたの？ そんな慌てて・・・

つと聞くと・・・

・・・い、いや、なんでもない・・・

つとあの人気が首を横に振りながら答える。声が裏返ってるのになんでもないか・・・まあいつか、追求はしないであげよう

・・・な、なんで、ここに・・・？

相変わらず裏返った声でそう聞いてくる。それに私は、いつものあれ、と答える

・・・ああ、そつか・・・

それを聞いて、あの人気が悲しそうな顔をする。なんであなたが悲しむんだか・・・

・・・そ、それより、今何してたの？！

・・・うえ？！あ、いや、その・・・

話を変えようとするが、変え方を間違った・・・ついさっきそれは聞かないと決めたばかりなのに・・・もう一回、話題を変えるのも不自然すぎるるので仕方なく・・・

・・・あ、まさかエッチなものでも見てた？男の子だもんね～

つとからかうよひて聞いた

もぢるん100%冗談のつもりで・・・ただ、この暗くて重苦しい空気が変わればと思つて言つた言葉だった・・・

でも・・・

カアアアアとあの人か顔を赤くして、ハツと我に返つたように私から田を逸らした

・・・あ、あれ・・・？もしかして・・・図星・・・？

氣まずい空氣の中、なんと言えば・・・つと思いながらも、仕方なく確認する

・・・そんなことは・・・ない・・・

蚊の鳴くような声で否定するあの人・・・

・・・じゃあパソコンの画像フォルダ、見ていいよね？

・・・見てました。『めんなさい。だからそれだけは・・・

私がパソコンの前に立ち、マウスを持ってそう聞くと、あの人気が早口で謝つてきた。非難するつもりは無いんだけど・・・さっきの重苦しい空気がなくなつたし、いつか・・・

今思えば、このときの私は、初めて恋人の家に泊まる」とになって、思考がおかしくなつてたんだと思つ・・・

それで次の話題にでも移ればよかつたのに、調子に乗つた私は聞いてしまつた・・・

・・・もしかして・・・私のことでも・・・やつこつ田で見てたり・・・
・する?

プロローグ6話（前書き）

これ消されないよね？

プロローグ6話

・・・もしかして・・・私のことも・・・そういう目で見てたり・・・
・する?

椅子に座つたまま頭を下げるあの人には、私は恥じらいながらそつ
言つ・・・

それにあの人は頭を上げて、ブンブンっと首を振つて否定する

・・・本当に・・?

そんなんあの人たの態度が面白くて、さらに調子に乗つた私は、目線を
合わせるように、そしてキスする少し手前くらいまで顔を近づけて、
からかうような口調で言つ

ここでは自分の格好についてすっかり忘れていた・・・私は今、
あの人のお母さんが用意してくれたパジャマを来ていて、サイズが
私のピッタリのサイズより少し大きく、襟回りがゆつたりしている。
そして、椅子に座つたあの人たの顔に、立つている私が目線を合わそ
うとすると、当然前傾姿勢にならざるを得ないわけで・・・

結果・・・

あの人たの視線は、私の顔より少し下・・・パジャマの襟元から見え
る私の、寄せようが上げようがAの域を出ない私の胸の辺りに・・・

・・・はあ・

そしてあの人があの人がため息をついた・・・物凄いバカにされた気分・・・

・・・って、やつぱり、そういう田で見てるんじゃないっ!!

顔を離して腕で胸を隠すように押さえがらせつ

あの人は、いや、ちがつ!!と慌てて否定する

・・・しかもため息つて!!どうせ私は貧乳ですよーだつ!!

そう言つて、ブイツと入つてきたドアのほうを向き、私は部屋を出
よひとする

あの人は、「めんめん」と謝りながら椅子から立ち上がり、私を
引き止めようとする

ドアに手をかけたところで私の真後ろに来ていたあの人には、私は急
に振り返り、それに驚いてる隙を突いて、あの人をベッドに押し倒
し、その上に馬乗りになつた

・・・ねえ・・・胸つて、好きな人に揉んでもうひとつ大きくなるつ
て言つよね・・・試してみない?

たぶん、このときの私は調子に乗つて暴走もしてたけど・・・それ
を同じ以上に、はつきりとあの人とのつながり（絆的な意味）を感じた
かたんだと思う・・・告白の返事のときのあれ以来、私とあ
る人は手をつなぐくらいで、抱きついたり、キスしたりなんてこと
は一切していなかつた・・・

それを心のどこかで寂しいと感じていて、そんな寂しさが少しづつ

溜まつていって・・・この日、溢れてしまつた・・・

・・・どうせだし、最後までしちゃおつか・・・

翌朝、目覚めた私・・・

場所はあの人の部屋の、あの人のベッド・・・

隣にはもちろんあの人人がいて・・・

私とあの人は何も着ていなくて・・・

昨夜の自分のしたことを思い出して、うわあ・・・なんてバカなこととしたんだ・・・と軽い自己嫌悪になる・・・

あの人の両親もいたのに、何も考えずに・・・声とか聞こえてたんじゃ・・・どうしよう・・・

そして頭の中が不安でいっぱいになる・・・

でも嬉しさや幸福感も少しはあって・・・

・・・おっと・・・今日も学校はあるんだ・・・何も持たずにこっちに来たから一回家に帰らないと・・・

幸福感に浸るのもそこそこにベッドから出る・・・あの人はまだ寝

ているので、起こさないように静かにそーっと・・・そして脱ぎ捨ててあつた衣服を着て、私はあの人の部屋から出て行つた
あとの人の変化に気付くことなく・・・

プロローグ6話（後書き）

できればサラッと流してくれるトトアリがたいです

プロローグ7話

・・・ 昨夜のこと聞かせてくれる・・・?

あの人部屋を出て、もつすでに起きていたあの人のお母さんに、学校に行く準備をするために家に帰ることを伝えようとすると、いつも優しい表情ではなく、真剣な表情でそう言われた

ああ・・・やっぱり・・・バレないはずがなかつた・・・

私は聞かれるままに洗いざらい話した

当然、怒られた・・・でも怒る理由が、私が考えてたことと違つていた

私は、『した』といつこいつに怒られると思つていたが、それについてあの人のお母さんは、私も注意しなかつたから何も言わない・・・つと言つた

問題は『方法』だつた。昨日はいきなりしてしまつたので、避妊について一切考えてなかつた・・・あの人のお母さんは、私の身体のことを心配して怒つてくれていた・・・発育しきつてない身体で妊娠したら、と・・・

自分の両親にも、こんな真剣に怒られて心配されたことはないのに・

・・・『ごめんなさい』・・・心配かけて、『ごめんなさい』・・・

私は謝つた。涙や他色々で顔をグショグショにして泣きながら・・・

そんな私をあの人のお母さんが優しく抱きしめてくれて・・・

・・・泣かないの・・・娘が泣いてると、お母さん悲しいな・・・

いつもの優しい口調でそう言った。私は思わず、え?と顔を上げてあの人のお母さんの顔を見る・・・

・・・だつて、もしできたら、そういうことになるでしょ・・・?

あの人のお母さんが微笑みながらやうに言ひ。こやいや・・・できたらまずいんじや・・・

・・・なんてね 私としてはもうすうと、娘のように接してきたつもりだけどね・・・

さうにそう続けて、ウインクをしながら微笑む

ああ・・・私にも、いつの間にか、ちゃんと家族ができてたんだ・・・

でも・・・それを、自分で壊してしまっていたなんて・・・

泣き止んだ私に、帰る前に朝ご飯を食べていきなさいな、と言われてさらに、あの人を起こして来て、とお願いされた

うう・・・いつたいどんな顔して会えば・・・

恥ずかしさや気まずさを感じながらも、お母さんを待たせるのも悪いので、意を決してあの人部屋のドアを開けた・・・まだ寝てると思ったのでノックもせずに・・・

しかし予想は外れ、あの人起きていて、私と同じように脱ぎ捨てた服を着ようとしていた

そしてドアを開けた私の姿を見たとたん・・・

あの人大量の鼻血を噴いて・・・血塗れになつて倒れた・・・

プロローグ7話（後書き）

お願いします・・・サラッと流してください・・・

血塗れになつて、倒れたあの人・・・

私がパニックになつて悲鳴を上げ、それを聞いたお父さんとお母さんが慌てて駆けつけてきた

そして、血塗れのあの人を見て、すぐ救急車を呼び、病院へ・・・

かなりの出血をしていたあの人は、病院に着いてすぐ輸血を受けて状態が安定した・・・けど、まだ意識は戻らず、私は病院の廊下の椅子に座つて、自分を責めていた

私が・・・調子に乗つて暴走しなければ・・・

しばらくして、あの人意識が戻つたと病院の人によわれた

お母さんに促され、あの人いる病室に入ろうとして・・・

ドアを開けて、あの人と目が合つた瞬間、再びあの人鼻血を噴き、血塗れになつた・・・

看護士の人に病室から出るよつに言われ、私が病室から出る・・・

あの異常な鼻血の原因は・・・どう考へても私の行つたアレ・・・

時間がたてば・・・とお母さん言われて、今日のといひは自分の家に帰ることに・・・

家に帰ると、母親が私を一瞥して、あら、いなかつたの? つという表情をする・・・

無断で外泊して、学校にも行つてないのに・・・何か言うことは無いわけ? ホント、私のことはどうでもいいんだ・・・と改めて思うこんな家庭が崩壊しきつているのに、なぜ離婚しないのか・・・それは簡単、世間体が悪いから、である

離婚してバツがつくことによつて、自分にマイナスな要素がつくのがイヤだから、たつたそれだけの理由で嫌いな人と一緒に暮らして喧嘩をしている・・・外面ばかり気にしていて、どうしようもない人達・・・

まあ、その外面を気にする性格だから、私が小学校時代のときは最低限の衣食住を与えてくれていた・・・虐待だの育児放棄だのと言われるのはマイナスだから・・・小学校は制服が無く、同じ服をずっと着ていると育児放棄を疑われる可能性が、とか考へてたんだろ

う・・・

でも中学校に上ると衣食住の「うち」衣と食はお金で済ますようになつた。これで好きな服を買え、好きなもの食べろ・・・中学校は制服があるから、服を買い与える必要は無い、適当にお金を渡して自分で用意させる・・・理由は面倒だから、かな?

まあ両親の私の扱いについてはもう慣れたからいいからしていいでもいい・・・

私もそんな母親に何も言わずに通りすぎて、自分の部屋に行こうとしたとき、ああそつだ、つと何かを思い出したように母親の口が開く・・・私は、離婚するから、どうちにひいていくかは知らないけど、引っ越し準備、しきなさい・・・

どうやら本格的に、私の幸せな時間が終わり始めたようですね・・・

プロローグ9話

どうこうこと？ と聞くと、離婚して世間体が悪くなつて、そんな中で生活するなんて耐えたれない……だそつだ……

自分勝手もここまでくると呆れて何も言えない……まあ昨日の私も両親に負けず劣らず、自分勝手だつたけど……

なんでこんなところが……似てしまつたんでしょう……

財産分与や、慰謝料、養育費などの話がつき次第、さつさと離婚してこの町を去るから、どつちについていくか、早く決めなさいよ……

・だつてさ

期限としては短くて1週間、長くて1ヶ月くらいだそつだ……

翌日、また学校をサボつて、あの人のお見舞いに行く

しかし、状況は変わっておらず、あの人は私と田が合つなり、また鼻血を出す……

まるで、あの人身体が、私のことを拒絶しているかのよう……

お見舞いは無理と判断して病院から帰らつとすると、お母さんと鉢合わせする

どうだった？ と聞いてくるお母さんと、私は首を横に振つて答える・・・

そつ・・・・つとお母さんが悲しそつて返す

そして、私の様子から何かを感じ取つたお母さんが、家で何かあつたの？ と聞いてきた

私は正直に、両親の離婚が決まつたこと、あと1週間から1ヶ月くらいでこの町から引っ越さないといけないことを話した・・・

すると、お母さんが・・・

・・・ねえ？ あなたを引き取る？ とつてできないかしり・・・？

つと提案してきた。驚く私に、お母さんが話を続ける・・・どうやら私の事情を知つたときから、お父さんと話し合つて決めてたらしい・・・

でも、今のあの人状態じゃ・・・つと叫ぶと、一緒に暮らせば、身体が適応とかして、大丈夫になるかも・・・つと言つた

それは分の悪すぎる賭け・・・もしダメだったら・・・あの人には、普通の生活すらできない・・・

うまくいったとしても、適応するのにいつたいどれだけの時間が・・

・1ヶ月？ 1年？ 10年とか20年単位？ その間は結局普通に生活できない・・・

それに、あの世間体を何より気にする両親が、どうでもいいとはいえる自分の子供を養子に出すということを認めるか・・・たぶん、いや絶対認めないだろう・・・

そしてなにより・・・これ以上、私はこの優しい家族に迷惑をかけては・・・いけないんじゃないのか・・・

だから私には・・・

・・・ごめんなさい・・・その話は、受けられません・・・

断るしか選択肢が無かつた

それから数日後・・・あの人気が退院して、学校に復帰して・・・

でも私はあの人を避けて生活して・・・

ある日、学校あの人人が鼻血を出したという話が伝わってきた・・・理由は偶然の事故による女子のパンチラで・・・もちろん前はそんなことで鼻血を出したりはしなかつた・・・

これも恐らく・・・私のしたアレが原因・・・

もう、私はあの人と一緒にいていい資格は無い・・・

そう感じた私は、手紙を書いて、あの人の中駄箱に入れた

『さよなら』

そう一言だけ書いて・・・

それから3日後に両親の離婚の話し合が終わり、私は転校した

プロローグ10話

あの人気が暮らす町、私が暮らしていた町から、県を数個跨いだとある町・・・

そこが私が移り住んだ町、ちなみに父親についていくと決めて、この町で暮らすことになった

なぜ父親についていくと決めたか・・・理由は2つ

1つ目、たまたま父親の引越し先のほうが、その人のいる町から、より遠くに離れられたから・・・遠くなら会いたくなつて、どうしようもなくなつたとしても、会いに行くことはできないって諦めるから

2つ目、苗字を変えないで済むから・・・あの人気が覚えていいる、そのままの名前で生きていけるから

我ながら未練たらたらで、情けなくなるような理由・・・

転校先の学校では、ぎこちなくではあるが明るく振舞つた結果、馴染むことはできたし友達もできた・・・

でも父子家庭になつて家事をしなければならず、学校外で遊ぶことはなかつた

学校が終わつたら、下校途中に買い物をして、夕食を作る・・・あの人のお母さんに少し料理を教えてもらつてたのが役に立つてる。ただ、初めの頃は料理をするたびにあの人達のことを思い出して泣

いていた。今でも思い出している・・・泣かなくはなつたけど・・・

空いた時間には、ひたすら勉強した・・・

理由は、私はもう、恋愛も結婚もしないって決めたから・・・私が生涯で愛する人は、あの人だけ・・・それで十分・・・もし他の誰かを好きになつたとしても、あの人を傷つけた私が幸せになつていはずがない・・・だから1人で仕事にでも生きて・・・1人で暮らしていく・・・なんて思つてゐる

そういうえば、色々あつて忘れてたが、妊娠はしてなかつた

できてたとしても、産める状況じやないし・・・運がよかつたかな・・・

それはまあいいとして・・・父親が帰つてくる時間に合わせてお風呂の支度をして・・・父親は転職したわけではなく、異動願いを出して転勤によつてこの町を選んだみたい・・・

父親は、まるで人が変わつたように私のことを色々と気にかけてくれた。ご飯おいしかつたとか、家事を任せてしまつてスマンとか・・・本当は離婚する前ももつと気にかけてやりたかった、とか・・・

なぜそれができなかつたのか・・・それは母親に、子供を味方につけるのか?!つと言われたのが原因らしい

そんな感じで2年とちょっと・・・

家で暇さえあれば勉強していたおかげで、公立の偏差値のいい高校に合格することはできて・・・

それからも家で勉強は続けていたので成績も学年のトップになつた
り・・・

父親とも少しずつだけど、家族らしくなつて・・・

第2の地で、私は普通に暮らしていた・・・

でも、そんな普通の暮らしあも唐突に終わりを迎えた

プロローグ11話

高1の2月・・・父親が事故で死んだ・・・

車での帰宅中に他の車の事故に巻き込まれて・・・

事故の原因の車の運転手や、他にも数人、死んだらしい・・・

やつと、父親とも家族らしくなってきたと思ったのに・・・

私は・・・また1人になった・・・

父親の荷物を漁り、手当たり次第に親戚に連絡を取った

そして葬儀後の食事会で、親戚の人達と私の今後についての話なった

しかし誰も私を引き取ろうとは言わなかつた・・・

なぜなら、私の父親は親戚の中での評判がよくなかったらしい

父親は母親と、所謂できちやつた結婚だつたみたいで父親の両親、私の祖父と祖母の反対を押し切つて籍を入れたらしい・・・つでその後、祖父と祖母が死んだ際も葬式に来ず、さらに反対を押し切つたくせに離婚して・・・

母親に引き取らせるべきだと・・・親戚の人達は声を揃えて言つた

でも、母親は連絡先がわからない・・・連絡を取れたとしても今更私を引き取らうとは思わないだろう・・・

じゃあどうするんだ? と話がまとまらずにいると・・・

・・・いつまでも昔のことをグジグジグジグジと・・・話も全く前に進まないし・・・情けないつたらありやしないね・・・

今までずっと黙つてた、親戚の人達の中で1番見た目が年上の、背中にかかるくらいの長めの白い髪をした女性がイライラした声色で言い放つた

しかしだなあ・・・と言い返すとする親戚の中年くらいの男性

それを最後まで聞くことなく、その人は・・・

・・・あたしは忙しいんだ、もう帰らせてもらうよ・・・

そう言って席を立つ

・・・好き勝手言いやがつて!! そんなに忙しいならとっとと帰つちまえ!! ついでにこの子もつれて帰つてくれればこっちは万々歳なんだがなつ!!

別の親戚の男性が怒つてヤケクソ気味にそう怒鳴つた。お酒が入つていたようで、言つた後にその男性の妻らしき人に言つた内容について咎められてた

・・・ そうかい、じゃあそつせてもうつよ・・・

言われた女性のほうは心底どうでもいいよう、その親戚に向かつてそう言い、部屋から出て行こうとする

親戚の人達は、いつもはどんな理由で呼んだつて来やしないくせに・

・・とか、あんな歳まで仕事一筋で結婚もしなかつたんだ、来れるわけないだろ・・・と、本人に聞こえるように悪口を言つてはいる・

・

その人が部屋のドアを開け、こっちを振り向き・・・

・・・ 何ボケッとしてんだい・・・ さつさとついてきな・・・

私に向かつてそつ言つた・・・ 私は、え? とその人を見る

・・・ 聞こえなかつたのかい・・・ ついて来なつて言つたんだよ・・
・ つたぐ、これだからガキは嫌いだよ・・・

ポカンとなつている親戚一同を置いて、私は慌ててその人についていった

プロローグ12話（前書き）

プロローグ最終話です

プロローグ12話

食事会をしていたお店から、那人・・・藤堂カヲルさんの運転する車で私の家まで向かう

カヲルさんは祖父の妹で、私の大叔母に当たる人だそうです

・・・あ、あの・・・本当にいいんですか・・・?

私がそう聞くと・・・

・・・別にかまやしないさね、アンタくらいのガキの面倒なんぞ、仕事で嫌つて程みてるからね・・・

つと返してきた。詳しく聞くと、仕事が学校の校長だとか・・・

・・・だから、アンタもうちの学校に転入してもいいつよ・・・

そう続けるカヲルさんに、私は特に迷うことなく、はい、と了承する

今通つてる高校で成績トップになつてている私は、他の生徒から見て近寄り辛いみたいで、友達は1人もいない・・・だから別に転校を迷う理由はない

家に着くと、とりあえず3月の初めに卒業式があつて、それといくつかの仕事が済んで、春休みに入る少し前くらいに迎えに来るから、それまでに荷物の整理や処分をして引越しの準備、それと高校に転校の顔を伝えておくよつこ、と言われた

そして最後に、何かあつたらここに連絡してきなさい……つとカ
ヲルさんが名刺を渡してきた

名刺には・・・

文月学園 学園長 藤堂カラル

つと書いてあり、それを見た瞬間、私の頭は真っ白になつた・・・

なぜなら私は、この学校名に聞き覚えがあつた・・・

2年と少し前、私がまだ、あの人が住んでいる、あの町で暮らして
いたときに・・・

世界で唯一の技術を使つていて・・・独自の教育方針の基、上は大學
学レベルの問題を軽く解いてしまうレベル、そして下は本当に中学
課程を学んだのか?つと疑問になるレベルの、幅広いレベルの生徒
が通つている試験校があると・・・

私は、またあの町で暮らすことになつた・・・

あの人に、会わないように気をつけないと・・・でも大丈夫か・・・
私のことなんかもう忘れてるよね・・・

あの人も、あの人の家族も・・・

覚えてても・・・私のこと、恨んでるに決まってる・・・

それから、カヲルさんが迎えに来るまでの3週間とちょっと・・・

その間に私は、学校に事情を話し、転校に必要な成績関係の書類を作るために受けてなかつた学年末試験を受け、試験が済むと休学扱いで学校を休み、引越しの準備に明け暮れ、空いた時間は・・・もはや習慣や癖のようになつていて勉強をしていた・・・

3月の中頃、引越しの荷物も片付き、文月学園が春休みに入ったのある日、私はカヲルさんと一緒に学園に向かう

簡単な編入の審査を受けるためと、他色々の準備だそうだ・・・

編入の審査は、書類審査ですんなり合格、面接も予定していたが時間の無駄ということで省略、制服等の準備に移り・・・

最後に、この学園にある世界で唯一の技術、試験召喚システムで自分用の召喚獣の設定のために必要な、文月学園式の学年末試験とクラスの振り分け試験の実施

文月学園式とは、時間内なら問題を無限に解くことができ、点数の上限もないという試験方式

なぜ2回も試験を受けなければならないのか・・・それは、試験範囲やそれぞれの点数の用途の違い

学年末試験は、高校1年生で習う範囲の試験で、用途は進級の可否を決めたり、召喚獣の装備を決めるために行つ

クラスの振り分け試験は、小学1年から高校1年までの広い範囲から出題され、用途は名前の通り、2年生になったときの自分の所属するクラスを決めるために行つ

私にとっては進級については問題ないし、召喚獣の装備には興味ないので、学年末試験は振り分け試験で少しでも上のクラスに行くために、試験方法に慣れる練習の意味合いが強い

そして、私はそれぞの試験を2日間ずつの日程でこなしたり（他の生徒は学年末試験が4日間、振り分け試験が3日間の日程らしい）

他の生徒もやつたからという理由で召喚獣の操作訓練をしたり（装備の設定をする前だったので外見データを入れただけの装備が初期設定の召喚獣をあちこち動かすだけ）

そんな感じで、いろいろな準備をするため、春休みは学園に毎日のように通つて過ぎていつた

プロローグ12話（後書き）

学年末試験とクラス振り分け試験のことは、そうじやないと姫路さんについて説明が付かないと思います

召喚獣の装備がAクラスの生徒の召喚獣と並ぶような感じで、本人はFクラス・・・同じ試験で設定されるなら装備は貧弱なはず・・・それに同じなら姫路さんは学年末試験も0点で・・・いくら2学期までの成績がよくても学年末試験が0点なら進級できないんじゃないの？仮進級とか？

まあそんな感じでこのプロローグ・・・そういうことにして置いてください・・・

1話（前書き）

さて本編開始ですが・・・

2話から本気出す（文字数的な意味で）

私は今、お婆ちゃんが運転する車で、お婆ちゃんが勤めていて、私がこれから通りにになった学校・・・文月学園に向かっている

窓の外には約3年ぶりに見る町の景色・・・わ、私は以前、この町で暮らしていた・・・

そして、色々な事情でこの町を去って、また戻ってきた

「じゃあ、アタシは駐車場にこれ置いて、そのまま仕事に入るから、ここまでいいかい？」

校門のところで車を止めて、そこにいた先生らしき人とお婆ちゃんが挨拶を交わした後、私に向いて少しすまなそうに聞こへる

「いいえ、そんな・・・乗せてもらつただけで・・・えつと・・・今日も遅くなりそうですか？」

私はそれに恐縮気に返し、帰宅時間を尋ねる

「ああ・・・年度始めはやることがいっぱいあってね・・・新入生や新任の教師のこと、他にも予算に・・・」

お婆ちゃんがため息をつき、そう答える・・・お婆ちゃんはこの文

月学園の学園長をしています

さらに、この文月学園で、世界で唯一使われている、試験召喚システムの開発者でもあります

試験召喚システムとは・・・生徒や教師に1人1体、テストの点数により強さの決まる召喚獣を与える、科学とオカルトが混ざった特殊なシステム・・・でしょうか。私も詳しくはわかりません・・・

それは置いといて・・・

「ではタ「」飯は・・・」

「すまないね。しばらく一人で食べとくれ・・・」

続けて聞くと、さらに申し訳なさそうに答えてくる
昨日までは春休みで・・・遅くなつても一緒に食べてたんですけど。
・・まあ1人の食事は慣れていますから、今更寂しいとも感じません・・・

「アンタを引き取つとして、保護者らしこことは何もできてないね。
・・」

「気にしないでください・・・では、お仕事、がんばってください。
・・」

そう言って私はシートベルトを外し、カバンを持って車を降りる
私が車のドアを閉め、お婆ちゃんは車を発進させて学園の敷地に入つていった

「おはよう、藤堂」

さつきお婆ちゃんと挨拶を交わしていた、この学園の先生らしき人が私に挨拶をしてきた

私より身長が50センチぐらい大きくて、体格もガツシリと……
体育の先生でしょうか？

「おはよー」「やあこねす……えつと……」

「IJの学園で補習教師をしている、西村宗一とこう。まあ藤堂とはあまり関わることはないかもしかんが……よろしく頼む」

西村先生がそう言つて封筒を差し出してくれる……何の封筒だろ？
・・？

それと補習専任の教師って……勉強のレベルが高くて、ついていけずに補習が必要になる生徒が多いことかな？私には関わることはないってことは、私には補習の必要がないってこと……？

「ん？どうした？振り分け試験の結果を見ないのか？」

「あ、いえ……すいません……見ます……」

そんなことを考へていると、西村先生がそう言つて怪訝そうに私を見つきました

私は我に返つて封筒を受け取る

「しかし、転入してすぐこの成績とは……他の学校で成績の良かつた者ほど、テストのやり方の違いで、実力が出せなかつたりするんだが……」

西村先生の話を聞きながら封筒の封を開け、結果が記入された用紙

を取り出す

総合得点 5083点

所属 Aクラス(代表)

「おめでとう、藤堂・・・2学年の主席生徒だ」

試験結果に結果に田を点にしている私に、西村先生がそういう言いました

1話（後書き）

一応チートじゃないつもりです

ちゃんとこじれたな成績になつた勉強方法も、後々公開します

主人公設定

名前 藤堂 華織

なまえ とうじつ かおり

性格 物静かな感じ（昔はもう少し活発なほうだった）

趣味 なし（時間が無かつたため、強いて言えば勉強？）

特技 家事全般

好き 康太（愛してると言えるくらい）

嫌い 康太を苦しめる人（要するに自分）

身体情報

中学2年のときは140cmいかないくらい 胸は寄せて上げてもAの域を出ない

高校2年で141～20cmくらい 胸はB、寄せて上げてもCに届かない

両親が離婚するまでは身長が伸びが悪く（家庭内でのストレスが原因？）両親の離婚後は成長速度が少し戻ったが、勉強ばっかりで運動をしなかつたので、結局そんなに身長は伸びなかつた

髪型は、中2まで長かつたが（整髪代ケチつてた）、その後ぱつさり切つて（家事の邪魔になつたから）、現在再び伸ば始めている（またケチりだした）

人物概要

文月学園に2年生から転入してきた学年首位の女の子

康太の元カノで、康太とは最後までやつた関係、そして康太の鼻血体質の原因を作つた人。それを悔やんで別れたが、別れて3年近くたつても未練たらたら

普段は物静かだが、康太の前だと少し子供っぽくなつたり、感情的になつて思考が暴走したりする（ポジティブ、ネガティブ、どっち方向かはわからない）

両親が中2のときに離婚していく、父親についていつたが高1のときには事故で死亡、その後大叔母にあたる藤堂カヲルに引き取られる

カナヅチで運動が苦手

同年代との「ミコニケーション能力が低い（流行の話についていけない）

ケータイを持つていらない

成績

保健体育のみ400点を少し超えるくらいで、あとは500点以上

総合5000点以上の学年主席

召喚獣

武器

右手に装着する刺突用の爪状の武器
(リリカルなのはsttのドゥーエが使っているピアッシングネイル)

元ネタのほうは右手の親指と人差し指と中指の3本に装着しているが、こちらは右手の指全てに装着している。長さは元ネタのほうは伸縮自在だが、こちらは人間サイズに直すと40cmくらいで固定となっている

服装

黒い和服のような服で右腕を袖に通さず、右肩を出している格好(イメージはアニメの戦国乙女の毛利モトナリ、あれは左腕が出ているけど、それを右にして、肩や足等に着いている防具っぽいものと帽子を取つ払つた感じ。胸はサラシで隠している)

腕輪

康太と同じ、身体加速による高速移動

ただ康太のより性能に対する点数消費が少なく、燃費が良い

主人公設定（後書き）

以前活動報告に書いたキャラ案3つを混ぜた感じの今回の主人公
召喚獣は文章だけで表現しきれる自信が無いのでキャラ名指定しました

プロローグ書き終わってから設定を考えたのでプロローグで全く出てきてない設定とかもあります（特に容姿関係）

「お婆ちゃん……！」は、本当に勉強するための部屋なのですか。
・・？

西村先生に2年Aクラスの教室の位置を聞き、教えてもらつたとおりの場所に向かう
そして2・Aの表札が掛かっている教室を見つけて、戸を開けて中を見た瞬間、私は固まつた

まるでどこかのお屋敷のような内装・・・天井を見るとシャンデリア、床を見るとふかふかのカーペット、壁は一見普通に見えるけど、よく見ると所々に使われている木材の木目が美しくて・・・いかにもお金掛かってますという感じの、そんな部屋。応接室とかじやないですよね？にしては広すぎますけど・・・

設備に目を移すと、黒板の代わりなのでしうつか・・・大型の前に超が4つか5つくらい付きそうな大型のプラズマディスプレイ・・・型で言えばひいては1000？

それと壁を見ているときに気付いたドリンクバー・・・種類はジュースに、コーヒー、紅茶、日本茶などなど・・・もうすでに数え切れないくらい種類があるので、さらに・・・

『希望の品が無い場合、教員に申請すれば追加いたします』

注意書きの一縦にそつ書いてあつた・・・

最後に「これが本当に教室ならば、数から推測して生徒用と思われる

設備・・・

机はシステムデスクでエアコンと冷蔵庫が備え付けられている・・・
冷蔵庫には注意書きで、中身も学園が用意すると書いてあった

椅子はどこかの社長が座るようなリクライニング式で・・・まさか
マッサージ機能まであつたりは・・・つと思つたが、流石にそれは
無かつた

そして、ここが本当に教室なのかと疑問に思つてしまつ最大の要因、
机と同じ数だけ用意されているノートパソコン・・・実はここは職
員室でしたつてことは・・・ないですよね・・・
タッチマウスがあるのに無線マウスもついてて・・・まさかネット
に繋がつたりはしないよね・・・?

ガラツ

教室の設備を観察していると、誰かが教室に入つてくる
ちなみに私が教室に入つたとき、生徒は誰もいなかつた。先生方は
生徒より早く来ているから、学園長であるお婆ちゃんと一緒に登校
してきた私が教室に1番に来るのは、まあ当然のこととして・・・
・?

入つてきたのは黒く、手入れの行き届いた綺麗な長い髪をした女の
子。気品があつて・・・どこかいところのお嬢様なのだろうか・・・
・?

「あ、あの・・・席つて自由なんですか・・・?」

その人は、私をチラツと見て、適当な席に着いた・・・席は自由な
のかな・・・?

「・・・たぶん、1年のときもそうだったから・・・」

「そうですか・・・ありがと「う」わこます」

おずおずと、その人に聞いてみると、答えてくれた
私はお礼を言って、最前列の廊下側から2番目の机にカバンを降ろ
し、椅子に座る・・・

理由は、私は背が低いので、最前列じゃないと黒板・・・じゃない
てプラズマディスプレイが見えなくなりそうだから。あと、窓側だ
と陽が当たつて眠くなりそうだし、1番廊下側だと、戸の開け閉め
の音が・・・と思ったから、だから最前列の廊下側から2番目の位
置を選びました。流石に転校してきて、いきなり中央を選ぶ勇気は
無いです

「・・・転校生? 1年のとき見なかつたけど・・・」

席について、癖になつてゐる勉強をしようと、春休み中に支給され
た教科書、そして前の高校から使つてゐるノートをカバンから取り
出していると、さつきの女の子が話しかけてきた

「はい、前は県外の高校について、事情があつて、じつちに越してき
ました・・・あ、藤堂華織です。よろしくお願ひします」

「・・・霧島翔子、よろしく・・・」

ぎこちないながらも明るく自己紹介する・・・自分の「ミニアケー
ション能力の低さが恨めしい

霧島・・・あ、そういうえば昔この町に住んでたときに、豪邸の前を
通つたことがあつたつけ・・・門に霧島の表札があつて・・・そこ

の令嬢さんか・・・

「・・・前の学校でも、こんな早く来て自習してたの?」

机の上に出した勉強道具を見て、不思議そうな顔をして聞いてくる
まあ、普通はこんな早く来て自習する生徒はいないよね・・・

「はい、流石にここまで早くは無かつたんですけど、自習してました
ね・・・」

「・・・どうして?」

「うーん・・・そうですね・・・今となつては癖みたいなものです
が・・・最初は・・・」

「・・・最初は?」

「最初は・・・忘れるため、でした。色々な、ことを・・・忘れる
ために、やつてましたね」

あの人のこと、あの人のお家族のこと、他にはまた1人になつたこと
による寂しさ・・・とかね

こう言つてる時点で忘れられなかつたつてことですけどね・・・
・・・つて私は初対面の人に何話してんだろ・・・変な人だと思わ
れて、避けられたらどうしよう・・・?

3話（前書き）

バカテス9・5巻を書店で立ち読みしました・・・

おい康太、お前に兄妹がいたとは思わなんだぞ・・・

華織が泊まつた田のこと、どう説明すればいいんだよ・・・

兄2人は部活の大会で遠征に出てたとかでなんとかなりそうだけど、妹は無理だろ・・・

妹が康太の1つ下ならそれでもいいが、それなら妹は現在高1ということで・・・ならもしかして文月通つてんじやないの？ってことになる（学費の都合上、4人兄弟なら安い文月選ばざるを得ないのでは？ということ）。だったら学祭編で出てくるでしょ・・・といふことで妹は恐らく最低2つ下だと思う・・・なら康太が中2のとき妹は小6で・・・小6なら校外の習い事としてスポーツを（テニスだっけ？）することになつて・・・次の日学校なのに大会で遠征とかはしないだらうし・・・ああ、困ったなあ・・・友達の家に泊まりに行つてるとか、修学旅行でいなかつたとでもして置いてください・・・

つていうか、私と康太のツーカーで（「yの方も色々おかしなところが出てこないかな・・・まああっちの作品で康太の家族構成に関することは書いた記憶は無いんだけど・・・

「・・・」

霧島さんが黙つてしまつ・・・まずはいぢづ・・・なんとかしないと・・・

「な・・・・」

「・・・・な?」

「な、なぐんてね 勉強は覚えるためにするのこ、忘れるためこつて、意味わづかんないよね~」

く、苦しい・・・といふか、『まかし方が下手すぎる』の・・・お願いです・・・早く他のAクラスの人きて・・・

「・・・いや、なんとなくだけど・・・わかる気がする・・・」

え・・・?

「・・・私も、たまにそんな理由で勉強する」とがある・・・」

「霧島さんも・・・?」

「・・・うん」

私がキヨトーンとしながらも聞き返すと霧島さんが頷いた

「・・・これ・・・」

そして、生徒手帳を取り出し、それに挟んである写真を私に見せてくる

写真には小学生くらいの赤い髪の男の子が写っている

「これは・・・?」

「・・・私の好きな人の小学校のときの写真・・・同じ年で、今はこの学園に通つてる」

「えつと・・・彼氏、なのかな?」

「・・・いや・・・何回か告白したけど、全部断られた。その悲しさを忘れるために、机に向かつたりした・・・」

何回もとは・・・それはまた・・・一途なことで・・・
といふが、初対面の私が聞いていい話だつたのかな・・・?

「・・・あなたも、同じ・・・」

「え・・・?」

「・・・あなたも、私と同じ感じがする・・・」

霧島さんが私の手を見つめて言つ
「ううしょう・・・話してくれたんだから、私も話すべきかな・・・?」

「うん・・・私も・・・好きな・・・いや、愛してると書つていい
くらいの人がいた・・・」

「……いた？」

「うん……あ、その人は生きてる……と思つ。私が別れるまでは生きてた。それからは知らないけど……」

「……愛してたのに、別れたの？」

霧島さんが首をかしげて聞く

「私の自分勝手な行動で……傷つけて、その人の前に立てなくなつて、罪悪感から……逃げたんです。一方的に別れを告げて、引っ越しと転校をして……」

細かく語りのは気が引けるので、少しづかして教える

「……まだ、その人のことは……」

「うん、変わらず、そのときのまま……愛してる……だから、私は、恋愛はもちろん、結婚もする気は無い……仕事にでも生きて……1人で生きていく……だから、私は勉強をしているの……」

「……」

「……そう……」

そんな感じで話に一区切りついたあたりで、廊下から声が聞こえてきた……そろそろこの話題は終わりにしないと……

「「」「」めんなさ」……暗い話をしてしまつて……」

「・・・気にしなくていい・・・」

私は話を切り上げ、次の話題を探す・・・
えつと、何か明るい話題は・・・

「「・・・」」

何も話題が見つからない・・・あわわ、どうしよう・・・どうしよう・・・
うわあ・・・沈黙つてこんなに恐ろしいものなんだ・・・

「えつと・・・」

とつあえず・・・

「・・・?」

「がんばってくださいね・・・私の分も・・・その人と、幸せにな
つてください」

応援しておこう

その後、他の生徒が来始めて、霧島さんは自分の席に戻り、私は自
習を始めた

「みなさん進級おめでとうございます。私はこのクラスの担任の、

高橋洋子です。よろしくお願ひします

8時40分くらいに担任の高橋先生が来て、S H Rが始まった。高橋先生は、私の編入の書類審査をしたり、学年末試験とクラスの振り分け試験の試験監督と採点、召喚獣の操作訓練の指導をしてくれた先生です

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人用アコン、リクライニングシート、その他に不備のある人はいますか？」

不備というか、充実しすぎているというのが問題だと思います

さらに、教材や冷蔵庫の中身も学園が支給するの遠慮なく申請を・・・と高橋先生が続ける。あとで高校3年の教科書を申請してみようかな・・・ノートや筆記具ももらえたりするのかな・・・？

「では、自己紹介に移りましょう

不備の申し出が無かつたので、S H Rが進行する

「まず、始めにクラス代表の藤堂華織さん。前に出て自己紹介をお願いします」

高橋先生が続けて、私に前に来るよう言つ

その瞬間、教室内がザワつとして・・・

私が立ち上がり、教壇まで歩いていく・・・途中、あんな生徒いたか？とか、霧島翔子が負けたのか・・・など、驚いてる声が聞こえてくる

そうですね、去年度いなかつた生徒がいきなり学年主席・・・私

だつてみんなの立場なら驚く・・・それにしても私がいなかつたら
霧島さんが学年主席だったのですか・・・知らなかつたとはいえ、
霧島さんには不快な思いをさせたかもしませんね・・・

「えと・・・藤堂華織です・・・今年度から転入しました・・・そ、
その・・・よろしくお願ひします」

クラスメイトの視線が私に集まり、それに緊張しながらも、何とか
自己紹介をした

S H R から数時間後・・・現在、昼休憩・・・

私は家で作つてきたお弁当を食べて、することが無かつたので自習していた・・・

「・・・代表・・・代表・・・藤堂代表」

「え、あ、はい・・・すいません、なんですか?」

慣れない呼ばれ方に気付くのが遅れ、私は慌てて返事をしながら顔を上げ、声のほうを向く・・・そこには霧島さんがいて・・・声でわかつてましたけど・・・なんか気まずいです・・・

「・・・」

霧島さんがジッと私を見てきて・・・やつぱり怒りますよね・・・

「・・・」

次に、私が自習で使つているノートに視線を向けて・・・
そして・・・

「・・・読めない・・・」

そつ呴きました

「これですか?これは暗記で英単語のスペルを覚えるために、とこ

かく書いて書いて・・・を繰り返したものです

私の勉強方法は、とにかく時間をかけて暗記していくやり方・・・・・。まず、ノートに覚えたい語句を書き、それに重ねるよう丁寧に3回・・・・・と文字が読めなくなるまで上に書いていく、文字が読めなくなってる頃には、もうその語句は頭の中に・・・・といつ寸法正しいやり方はその語句を声に出しながら書くんだけど、私はもう慣れたから声に出さずに頭の中で反芻している

恐らくこれが文月学園式の試験方式と合ってたのでしょうかね・・・・・。50分間ノンストップで書き続けても全く疲れませんでしたし・・・・・。私の場合は1枚100点のテスト用紙を6・7枚くらい埋めました。それで保健体育以外は全部520点前後なので、正答率は8割ちょっと、保健体育は400点くらいなので6割くらい・・・・この試験方式の攻略法は、問い合わせに対する解答を解答欄に高速かつ精確に書くペン捌き、それを時間いっぱい維持できる集中力と持久力、でしょうか？学力は・・・普通の試験方式よりは重視されないと思います。だって、わからない問題がきても、解答欄を埋めておきさえすれば次の用紙がもらえますから・・・・

それはさておき・・・・

「・・・効率が悪くない？」

霧島さんが意外そうに言つ・・・・学年主席だから凄い勉強の仕方してるとか思つてたのかな・・・・？

「うーん・・・確かにそれは思います・・・でもこの方法は、時間さえあれば特に何も用意しなくていいから楽なんです」

体育の授業中に地面に書いたり……家だとチラシの裏とかでもで
きますし……参考書も問題集も要らないので、お金もあまり掛か
りませんし……

「……一日で終わらせるの？」

「暇さえあれば、ですね。家事の合間にひょっとした時間とか……

」

「……家事もしてるの？」

霧島さんが驚いた表情で聞いてくる

「うん……」

それに私は頷いて答える……理由は不幸自慢にしかならないので
言いません

「……こいつから？」

「えっと……本格的にするようになったのは中2に夏から……

「……本格的？」

「掃除は小3か小4くらいから自分の部屋だけやってたし、洗濯は
中学入つてから自分のは自分でして……料理も中1の1月か2月
くらいから少しづつ……そして中2からは掃除は家全体、洗濯と
炊事は家族の分も、この勉強もその頃から……」

まあ、家族の分といつても、お父さんの分が増えただけで、住んで

た家もそこまで広いところじゃなかつたから、慣れれば、思つたより大変ではなかつた

それに・・・何かをしていれば、その間はあの人のことと思ひ出さなくて済んだから・・・

「・・・負けても仕方ない、か・・・」

霧島さんが少し肩を落としてそつ吐き・・・

「えと・・・霧島さん・・・?」

「・・・翔子でいい。代表」

「あ、えと・・・翔子、さん・・・?」

「・・・何、代表?」

「あの、その代表といつのはできれば・・・

「・・・どうして?」

「馴染みが無さすぎて、自分のことだと気付けなくて・・・」

委員長とかならまだ気付けたかもしれませんがあんが・・・

「・・・わかつた。なら・・・」

「華織でいいですよ、翔子さん」

「・・・わかった。華織」

『〇点になつた生徒は補習―――つ―――』

『ぎやあああつ―――』

教室の外が、ガヤガヤとしています

なるほど・・・補習専任とはこいついう意味でしたか・・・

昼休憩が終わり、午後から授業・・・かと思つたら自習でした

理由は、FクラスがDクラスと試召戦争をするからだそうです・・・
試召戦争制度・・・正式名称、試験召喚獣戦争制度・・・試験召喚
システムによつて生徒に配布された召喚獣を用いたクラス間で行
う戦争のことで、戦争に勝つと負けたクラスと設備の取り替えを行
える権利を得ることができるとこらじこ・・・

この制度の主な目的、生徒の勉強に対するモチベーションの向上・

・
私としてはそれ以外にも、クラス単位の勝負とことで協調性、
上位クラスに勝つためには当然作戦が必要なつてくるので、作戦に
任されたりすることによつて個人の責任や義務に対する意識の向上
など・・・そういうところも狙いに入つてゐるのでは?と思つてゐ
る

にしても試召戦争制度でモチベーションが上がつても、他のクラス
の試召戦争で授業が無くなつてしまつたら、出ばなをくじかれた感

じでモチベーションが下がつてしまつよつた・・・

『ピンポンパンポーン』

ん？放送・・・？

『船越先生、船越先生』

生徒の声ですね・・・これも試合戦争の作戦の一部なのかな・・・？

『吉井明久が体育館裏で待つています』

『一・』

クラスメイト達がピクッと反応した・・・

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「一・」ここまでやるとはな・・・Fクラスの奴ら本気だな・・・

「ああ・・・これはひょっとしたらひょっとするかもしれんな」

放送を聴いたクラスメイトがそんな会話をしています・・・

どうやら、この吉井明久という生徒は捨て駒にされたようですね・・・可哀想に・・・

Fクラスの代表は、勝つために容赦なく味方を切り捨てれる人みたいですね・・・リーダーとしては判断力があつて頼もしいですけど、見方を変えると冷酷な人ですよね・・・

私も・・・このクラスを守るために、がんばらないといけませんね・

：

教室の外から、男の子の叫び声が響いてくる・・・それを聞きながら、私は再度集中し、自習を再開した

4話（後書き）

華織の勉強方法は自分が昔実際に高校で教えてもらった方法です

自分は使いませんでしたけどね

小5から続ける勉強方法があつたから必要なかつたし・・・

アニメ1期の1話で姫路さんが結構な枚数の用紙を埋めてた気がしますが、あれで400点合って、お前正答率悪すぎだろ・・・って思うんですが、どうでしょう？それともあの用紙1枚で10点くらいしか配点ないとか？

Aクラス戦の時の成績で総合4400点合って1枚100点の用紙なら最少45枚だけど、もしかしてあれは総合科目で受けてたのかな？

放課後・・・

外がまだガヤガヤとしているので、試召戦争は続いているのでしょうか
うね・・・

関係のない私は帰つてもいいんですが、邪魔になつたら嫌ですし、
静かになるのを待つてから出ましよう

それから30分くらい自習をして時間を潰し、外が静かになつたの
で教室を出る・・・

廊下には戦争に勝つて喜んでいる生徒、負けて落ち込んでいる生徒・
・・どっちがどっちのクラスかはわかりませんが、3時間ちょっと
で決着は付いたようですね・・・

Dクラスが勝つたなら、DとFの差は圧倒的だつたということ、F
クラスが勝つたなら、余程の策を使つたということかな・・・?

「・・・あの、それで・・・どうして試召戦争を・・・」

そんな生徒達をすり抜けて階段に向かっていると、そんな話し声が
耳に入つてくる

声のほうを向くと、桃色の髪の女子生徒と、赤い髪の男子生徒……朝、霧島さんに見せてもらった写真の子が成長したような感じの生徒と話していた

どうやら試召戦争を仕掛けた側のクラスの生徒みたいで、試召戦争を始めた理由について話している様子……私はそれにコッソリと聞き耳を立てる……

「……あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って……」

どうやら吉井という生徒……もしかして放送で出てきた吉井明久という人だろうか……が、この赤髪の男子生徒に試召戦争を始めようと持ちかけたらしい……なるほど……それで、あの放送か……言いだしつぺなりの責任の取り方といふことかな……

「……バカはバカなりに譲れないものがあつたってことだろ？俺の口から言えるのはこれが限界だと思うが、たぶん姫路の想像は間違つてないと思つぞ？」

男子生徒が女子生徒にそう言つと、女子生徒は少し顔を赤らめた……なるほど、吉井という生徒はこの女子生徒のために……つてことですか……いい話ですね……

「それと、お前も知つてるだろ？新しい学年主席……

ん……？

「あ、はい……凄いですよね……転校してきてすぐ学年主席つて……名前は確か……」「

「藤堂華織だそうだ・・・うちのクラスの藤堂が嫁だとか言って血祭りに上げられてたな・・・」

「そ、そうでしたね・・・特に土屋君なんか・・・」

「え・・・土屋・・・?まさかね・・・

「詳しいことは知らんが、なんか訳ありみたいだ。Aクラスとやるときは俺に代表を討たせろ・・・だそうだ」

間違いない・・・あの人だ・・・この学園にいたなんて・・・やつぱり、私のこと・・・怨んでるんだ・・・
Aクラスが負けてFクラスの設備に落ちれば、当然代表の私はクラス中から責められる・・・あの人理想としては、そのまま退学して欲しいって思ってるんだ・・・そうに決まってる・・・
でも・・・その理想は、叶えてあげれない・・・私は例えどんな責められても、ここを辞めることはない・・・お婆ちゃんが保護者である限りは・・・

次の日、Aクラスは昨日の試合戦争の話で持ちきりだった・・・

昨日私が話しているのを盗み聞きした、2人のうちの女子生徒のほう・・・名前は姫路瑞希というらしい。姫路瑞希は本当はAクラスの上位クラスの学力だとか・・・しかし振り分け試験で途中退室で0点になってしまいFクラスに振り分けられた、と・・・
勝ったFクラスは、Dクラスと設備交換をせずに、何か取引をした

らしい、と・・・

やつぱり狙いは、Aクラスなんだろうか・・・。あの人もそのつもりで、私を討たせろって言つたんだろうし・・・。

その日は私が転入して初めての授業でしたが、あまり集中することができませんでした・・・。

さうに次の日・・・

Fクラスは昨日、Bクラスに宣戦布告をして、今日の午後から戦争を開始する予定らしい

やつぱり、狙いはうちのクラスだらう・・・」の、Bクラスとの戦争に勝つたら・・・間違いなく、うちのクラスに攻め込んでくる・・・

私には勝てる自信がない・・・。あっちの代表のほうが間違いなく戦争に勝つために必要なものを持っている・・・。

それに私は・・・あの人前に立てない・・・

「あの・・・翔子さん・・・」

「・・・何、華織?」

「代表が戦争に参加しないってことはできるんでしょうか・・・？」

「・・・無理。試召戦争のルールには「ある・・・クラスの代表は試召戦争時、総大将となり、総大将の戦死により戦争の勝敗が決まる。代理は如何なる理由があつても認められない・・・」

つまり、私の代わりに翔子さんに代表になつてもらつて試召戦争をすることは不可能ということですか・・・というが、如何なる理由でも認めないって・・・長期戦になつたらどうするんでしょうか・・・？」

「でも、それだと代表は試召戦争が始まつてしまつたら、終結するまで学校を休むことができないですよね・・・体調崩したりしたらどうするんでしょう・・・？」

「・・・そのときは相手クラスに休戦を申し込む。もちろん相応の条件を出す必要があるけど・・・」

「そうですか・・・私も気をつけないと・・・あ、そういうえば私も、明後日の金曜日、昼から用があつて早退するので・・・」

「・・・用？」

「ええ・・・親戚の法事が・・・少し遠いので前日に入つて泊まる必要があつて・・・」

本当はお父さんの七七日^{四十九日}の法要なんんですけど・・・

明後日の金曜日の午後に出て夜にお父さんの実家（祖父と祖母の家。今は親戚の人々が暮らしている）着き、その次の日の土曜日に法要を行い、日曜日に帰つてくる。本当は火曜日が法要日なんですが、親

戚の方々も都合がつかないということで、繰り上がって土曜日になつた

宿泊は親戚の家ではなく、お婆ちゃんがホテルを取ってくれた。お婆ちゃんは仕事の都合で当日入りで、前日に入るのは私だけ、帰りは一緒に帰りますが・・・

しかし次の日、私は代表になつて最初のピンチを迎えることになつた・・・

朝、そんな叫び声と共に教室の戸が勢いよく開かれる。・・・

「えっと・・・誰?」

入ってきた人を見て、女子生徒・・・たぶん木下さんかな？が首をかしげる

「誰つて！さつき私達を豚扱いして豚小屋がお似合いつて言つたくせによくそんなことを！！」

入ってきた人は頭に血が上つていて、冷静さのかけらもない・・・

「え？ なんのこと？」

「ヒルとヒルはわかるかいのね？！いいわー！ヒクラスはAクラスに

宣戦布告するわーー！」

試召戦争編つて、5日以上連續で学校に来てるような気がするんだ
けど……

1日目、Dクラス戦

2日目、姫路さんのお弁当事件&Bクラスへの宣戦布告

3日目、Bクラス戦1日目

4日目、Bクラス戦2日目

5日目か6日目、A対Cの試召戦争

7日目、Aクラス宣戦布告

8日目、Aクラス戦

ねえ？土日は？

もしかしたらA対Cの試召戦争が7日目にあつたのかも知れないけど、それなら宣戦布告に行つたときに、Cクラスがもう設備ランクが落ちてるのは時間的に無理があるような・・・優秀な設備入れ替えスタッフがいて1時間以内で変更可能とかならわかるけど・・・

でも7日目にA対Cの試召戦争をしたのなら、何もない5・6日目を土日にしないと合わなくなつて・・・それだとAクラス戦終了後の明久と美波のやり取りで週末の約束が、あれ？前の週末に行かなかつたの？つてなつて・・・

ねえ？土日は？うちの週末どこいつたん？

まさか完全週休2日じゃないとか・・・ん？でもな・・・学校の始業式つて大体6日くらいで・・・最低1日目と2日目の間には休日は挟んでないから（ノミックに翌日と書いてある）2日目と3日目

の間に土日を挟んだのなら土曜は8日になつて・・・隔週週休2日
は第2土曜は休みでしょ・・・

週休1日は無いはず・・・勉強会で霧島家にお泊りが週末だつたし、
学校あつたなら学校から皆で直接霧島家入りするでしょ

教えて！偉い人！

「・・・優子、どうして？」と？

突然のCクラスから宣戦布告・・・

その原因と思われている木下さんに翔子さんが詰め寄っています

「ア、アタシだってわからないですよー。せっかくて、アタシはここにいたじゃないですか？！」

「そうですね・・・それに今はこれからどうするかを考えないと・・・宣戦布告された以上、上位クラスは確か・・・」

「・・・拒否できない」

上位クラスは下位クラスとの試合戦争にメリットがないため当然拒否したがる・・・なので上位クラスは下位クラスからの宣戦布告に拒否権がありません

加えて試合戦争は教員が大勢借り出される大仕事で、1日に何戦もできることではない・・・

となると・・・

「・・・Cクラスの使者は口にちを言わなかつた・・・その場合、今日はBクラスとFクラスとの戦争があるからできないから、その決着がついた次の日・・・もし今日、向こうの戦争の決着がついたら、明日開戦になつてしまつ・・・」

「つまつた、明日何があるんですか・・・？」

翔子さんが下すると明日開戦になるところと、木下さんが氣まず
そうに聞いてきます

「明日、私はお腹で早退する予定なんです。親戚の法事のために・・・」

「・・・だから、明日開戦した場合、午前中で決着をつけなければ
いけなくなる」

初めての試合戦争で、いきなり時間制限付き・・・難易度高すぎま
す・・・

「じゃあ、今から開戦日時を丹羅口にするように交渉を・・・」

「無理でしょ・・・あんな怒ってたし・・・」

木下さんがそう提案しますが、それを・・・たしか工藤さんでした
か・・・が難しいと判断します

「・・・同じ理由から途中休戦も難しいと想い」

困りました・・・もう実家に向かうための新幹線の予約もしてしま
つてますし・・・

私の勝手な事情のせいだ、難易度を跳ね上げてしまいました・・・

「とりあえず今は、このクラスを2時間半くらいで落とせる作戦を考
えながら、向こうの戦争が今日中に終わらないことを祈るだけです

ね・・・

そんな作戦、あるのかわかりませんが・・・

結局、作戦も浮かばず、放課後・・・

「最大戦力で一気に叩いたらどうですか?」

「それは・・・Fクラスだって、Dクラスの攻撃に約3時間耐えられましたし、Bクラスともこんなに善戦します。もし耐え切られたらとすると・・・」

木下さんの提案に私は難色を示す・・・
Fクラスの善戦はリーダーの作戦立案能力や統率力、1人1人の作戦遂行能力の高さからだと思いますけど、それがCクラスに無いといつ保証はない・・・確実性の高い作戦が必要だと思います・・・

「・・・向こうにいい条件を出して、途中休戦を承諾させる」

「それは最終手段にしましょう。Aクラス側から休戦を持ちかけたら、他のクラスに変に目を付けられる可能性があります」

「・・・どういふこと?」

翔子さんの案に私は、できればそれはしたくない、と理由付きで言うと、翔子さんが首を傾げます

「なぜ、Cクラスはうちの宣戦布告してきたか……たぶんですか、JさんはFクラスがうちの仕掛けるようこじたのでは、と思います」

「Fクラスが？まさか……」

私の言葉に木下さんがそう叫う

「FクラスはDクラス、Bクラスと戦争して……Bクラスに勝つたら、ほぼ間違いなくうちのクラスに攻め込むつもりだと思います。そしてうちのクラスに勝つために必要なのが、情報です……代表でありながらほぼデータのない、私の情報……」

「なるほどね……情報がないなら情報を出させればいい、か……」

私の考えに工藤さんが頷いて言います

「なので、下手に休戦を持ちかけると、Aクラスが大したことがないと思われてしまつて……FクラスだけではなくEクラスも仕掛けできたりとか……」

「Eクラスは毎年部活をがんばってる生徒が多くて、試験戦争には興味がないみたいだけど……確かに、勝てそうかもって思われたら仕掛けてくるかもしれないわね」

「私の考えに、木下さんが意見を言つ……」

「Aクラスは試験戦争に何もメリットがありませんので、できれば

それは避けたいんです・・・

「確かに勉強時間が減るのはね・・・」

さらに私の考えに同意してくれました
私個人が無能として見られるのは構いませんが、そのせいでこれ以上クラスに迷惑をかけるのは・・・

「 「 「 「 「

「うーん・・・」

翔子さんも木下さんも工藤さんも黙ってしまい、私も考え込みます

「すいません代表ちょっとといいですか？・・・代表？あの・・・」

「華織、呼ばれてる」

「え？あ、すいません・・・なんですか？えっと・・・」

「佐藤です。佐藤美穂・・・代表に用があると、Bクラスの代表が
来てます」

まだ呼ばれ慣れていない代表という呼び方で呼ばれ、私の反応が遅
れる・・・さらにその呼んだ生徒の名前も忘れてしまい、私は申し
訳ない気持ちで一杯になる・・・

そのとき、私の頭の中にふと一つの案が浮かびました

「あの佐藤さん、私はお手洗いに行つてるとでも言つて、いないこ

としてぐだわい。要件は木下さん聞いてくれませんか?」

「え、あ、はい・・・わかりました」

私は小声で佐藤さんと木下さんにそいつを願いします

「・・・何か浮かんだの?」

「ええ、少し、卑怯な方法かもしだせんが・・・」

「」の際、手は選んでられないよ。つで、どんな手なの?」

2人が私から離れて行くと、翔子さんがそう質問してきて、私があまり良い手ではないと云つと、上藤さんがどんな作戦か聞いてきます

「それはですね・・・」

そして翌日、金曜日・・・時刻は8時30分

昨日のBクラス代表の用件は、BクラスはAクラスとの試合戦争の準備をしている、という警告のよいうなものでした

Fクラスに勝つたことで勢いの乗つてAクラスにやつてきたのかと思いや、女装をしてそんなことを言つてきたと木下さんが言つたので、どうやら負けて命令されての行動らしいです

しかも、Fクラスはまた設備の交換を行わず、戦争もDクラスと同じように、和平交渉による終結ということになつていてる模様で・・・だから、敗戦クラスの3ヶ月間の宣戦布告禁止というルールが適用されない・・・

幸い言つべきか、先にCクラスから宣戦布告されていて、宣戦布告はされませんでしたけど・・・ん？あれ？Cクラスをうちに仕掛けさせたのもFクラスだと思つたんだけど・・・なのに、Bクラスにそんなことをせるなんて・・・いいや、今は目の前にことに集中しよつ・・・

「えっと・・・今日はCクラスとの試合戦争です・・・それで・・・私の勝手な都合ですが・・・今日私は午後から早退するので2時間半以内に戦争を終わらせなければいけないんです・・・」

教壇に立ち、緊張しながらもクラスメイトに事情を話す・・・クラスメイトは、マジかよ・・・とか、無理でしょ・・・とか呟いている

「納得いかないかもしれません……お願いします！私に協力してください！」

私はそう言って頭を下げた

『・・・』

教室が沈黙に包まれて・・・

「あの、藤堂代表」

「はい、なんですか・・・えーっと・・・」

「久保です」

「すいません、久保君。どうぞ」

1人の男子生徒が拳手し、私が反応しますが、まだ名前を覚え切れていないので詰まってしまい、その生徒が名乗り、私は謝つてから、意見を聞く

「それが代表の意向なら僕達は従います。しかし、いくら下位クラスでも2時間半というのは、無策でできることではありません。何か作戦はあるのですか？」

「ありがとうございます・・・はい、一応考えてあります。では、これからその作戦の説明をします」

私は作戦の説明を始めた

そして作戦の説明も終わり午前9時・・・

キーンゴーンカーンゴーン

「それでは男子の皆さんお願ひします」

ガラツ × 2

Aクラス教室の2箇所の出入口から男子が勢いよく出て行く・・・そして廊下いっぱいに広がつてバリケードを作る・・・1つ目の作戦です。これでCクラスの生徒の移動範囲はCクラス教室とその向かいにあるDクラスの教室だけになった。負けそうになったときに下手にあちこち逃げ回られると制限時間があるこちらが不利になってしまいますからね・・・最初に逃げ道を塞がせてもらいます

「では女子の皆さん行きましょう」

廊下の封鎖、そしてCクラスの生徒を全て隔離することができたことを確認し、女子全員でCクラス側の出入口から出て・・・

『Aクラス女子全員が、Cクラス生徒全員に数学勝負を申し込みます・・・サモン!』

Aクラス 女子生徒全員(20名) 数学 計6352

男子が作ってくれたバリケードの前に展開し、一斉に召喚獣を呼ぶ

「な・・・いきなり女子全員だと・・・？そんなわけがない・・・。代表は女子なんだろ？いきなり前線に出てくるわけがない・・・。」

「いや、ちょっとまで、試召戦争中、クラス代表の位置情報は公開されているはず・・・。その情報だと・・・。Aクラス教室付近の廊下だと？！」

「Cクラスの生徒達が少し混乱する・・・。」

「ならここで討ち取ればこっちの勝ちだ！サモン！」

『サモン』

混乱から立ち直りCクラスの生徒達が召喚獣を呼び出した

Cクラス 生徒（14人） 数学 計2088

そして戦闘が開始される

点数の高さと数の力でCクラス生徒を次々に戦死させていく・・・。そして徐々に後ろのバリケードと一緒に前進して、行動範囲を狭めていく

「くつ・・・。戦力が足りない・・・。援軍求む！-！」

圧倒的戦力の差にCクラスの生徒の1人が援軍を呼ぶ
お、これは好都合かな・・・。代表率いる本隊が出てくるなら早く片付くし・・・。」

「せめて代表がどれかわかれば・・・。」

別のCクラス生徒の1人がそう呟く・・・

そう、これが私が考えた作戦の2つ目、速く勝つにはやはり点数の高い生徒が積極的に前に出て行くことが必要になる。Aクラスで1番点が高いのは学年主席の私なので、私が前線に出る・・・

代表が前線に出たら危なくないか?つと思うかもしれないが大丈夫。
・・私は代表だけどまだAクラスの生徒の名前を覚え切れてない。
しかしそれは他のクラスの代表も同じではないか?つと思う、そんな中他のクラスの生徒である私のことなど覚えている余裕はない。
試験戦争中は公開されるクラス代表の位置情報も、同じ位置に複数の女子がいれば結局誰が代表なのかわからない・・・

つまり、Cクラスの生徒は、名前しかわからない私のことを、見つけることができないのです

そして1時間後・・・午前10時

Cクラスの生存している生徒を全員、Cクラス教室内に押し込むことに成功する

もうすでに戦力の75%以上を失っているCクラス、こちらも数学1本を無補給という無理矢理なところがあつたので、数人の戦死者を出しています・・・

しかし、じゅうにまだ全戦力の50%しか出していません・・・

（クラス教室の出入口を塞ぐのに数人の男子生徒を残し、それ以外の男子生徒も戦闘に参加してもらい、一気に残りの生徒を討つて）

いきます

「もーつーいつたいどれが代表の召喚獣なのよつーーー」

「どうか、なんで敵の総大将がわからないんですか？ そんなので、よく戦争を仕掛けようだなんて思いましたね・・・」

「これなら、バリケードを作るだけで、私が前に出る必要なかつたです・・・」

クラスを基準に考えてた私の労力を返して欲しい気分です・・・

「何よアンタ？ーまさか代表じやーーー」

「さあ？..どうでしょうねーーー」

「まあいいわー倒せばわかるんだからつーーーサモンつーーー」

「サモン」

召喚獣が出てきます・・・

私の召喚獣は着物姿で、右腕を袖に通さず、右の肩の辺りが大きく露出しています・・・胸はサラシみたいなもので隠していますが、着崩しすぎているような・・・

武器は右手に装着している5本の鋭い爪です

Aクラス 藤堂華織 数学 504

VS

Cクラス 小山友香 数学 151

そしてその頭上に教科と点数が表示される・・・名前は表示されないのでまだ私が代表だとはバレて・・・

「な?! その点数・・・アンタが代表ね?！」

バレました

まあこの作戦が使えるのは今回くらいですし、問題ないですね・・・

「当たりです。私がAクラス代表の藤堂華織です。では腕輪起動・・・」

私は召喚獣の腕輪を起動させる・・・腕輪とは単教科での得点が400点以上の召喚獣に特殊能力を与えるもの・・・そしてそれを周りに示すものです。特殊能力は召喚者ごとに違うようで、私の場合は・・・

ザクツ・・・

私の召喚獣が一瞬消え、次現れたときには自らの武器の爪を相手の召喚獣の胸に突き刺している状態・・・

そして相手の召喚獣が消え・・・

「戦争終結・・・勝者Aクラス」

戦争が終結しました・・・

えつと・・・今の人Cクラスの代表だつたんですね・・・知りま
せんでした・・・

8話（前書き）

姉テス以来の主人公以外の視点

ちなみに話の初めに指定が無い場合は主人公視点です

「えっと……皆さんお疲れ様でした。私の勝手な都合で無理のある作戦につき合わせてしまつて……戦死された方、本当に申し訳ありませんでした……」

○クラス戦が終結して十数分後……現在10時30分

戦死した生徒も補習室から戻ってきて、皆に向かって頭を下げ、慰労と謝罪の言葉を口にする……

今私にできることはそれしかないから……

「いや、でもや……2ランク下の○クラスとはいえ1時間たりよつとで勝つちゃうなんて……結構凄くない?」

「やうね……中々の早期決着だわ」

○藤さんと木下さんがそつそつ

「では私はもう早退しますね。今日はもう試験戦争もできないですし……問題ありませんよね?」

「え? でもまだ午前中の授業が……?」

「帰れるときに帰つておいつかと……時間直前になつて何か来られても困りますし……」

「はは……確かに……」

私の言葉に「藤さんが苦笑し納得する

「・・・戦後処理はどうする？・・・それと、一応何かあったときのために代表の代理は？」

「戦後処理・・・って何をすればいいんでしょうか？」

書類を書いたりするんでしようか・・・？

「・・・なら、アタシがやつておきます。アタシが原因で起こった戦争ですし・・・」

「すいません、木下さん・・・ではお願ひします。お土産、買ってきますね」

木下さんがそういひので、そのまま任せて私は荷物を持って教室を出た

side・坂本雄二

「チツ・・・まさか1時間ちょっとで終わられるとはな・・・」
「いや一筋縄じや行きそうになねえな・・・」

「あれ？代表が荷物持つて教室から出て行くよ？」

「帰るみたいですね・・・」

Aクラスの教室から出て行く学年主席を、俺は明久達と觀察する
あが俺達Fクラスの倒さなければならぬ最大の敵・・・本当な
ら翔子で、あの問題を使って楽に倒せる予定だつたんだがな・・・

「まあいい、行くぞ」

「え？ でも、代表がいなーんじゃ 宣戦布告は・・・」

「アホ、こういうときは代表の代理がいるだろうが、そいつに話を
つければいいだけのことだ」

代表だつて人間だからな、病氣にもなれば、学校を早退しないといけない事情の1つや2つくらい入るだろ・・・そういうときのルールは当然決まつてゐる・・・まあ、バカのお前は病氣にもならないし、年中暇なんだろうがな・・・

「なんだろう・・・凄いバカにされた気が・・・」

「いつものことだろ？気にすんな」

奇声を上げて飛び掛つてくる明久を無視して、俺はAクラス教室の戸を開け・・・

「Fクラス代表の坂本だ。俺達Fクラスは、Aクラスに試召戦争を申し込む」

開口一番、そう言い放つ

side・木下優子

「じゃあ、やつをとやる」とやつひきこしますか……」クラスは設備のランクダウンド二二ですか?」

「……うん、それでいいと思つ

代表が早退し、アタシはクラス戦の戦後処理について、クラスの意見を聞く

それに霧島さんが返ってきて、他のクラスメイトも異論はないようだし終了、と……

ふ……これでアタシの愚弟が起こした問題も解決ね……

さて、あのバカにはどんなお仕置きをしようかしら?アタシだけじゃなく、Aクラスまで巻き込んで……顎でも外してしゃべれないようにしちゃおうかしら?

「Fクラス代表の坂本だ。俺達Fクラスは、Aクラスに試合戦争を申し込む」

間違つて首折っちゃうかも……

「ついては勝負の方法について交渉したい」

「交渉?」

坂本雄一の言葉に木下優子が訝しげに返す

「ああ・・・」ちらりとしては一騎打ちの3本勝負といつ方法を提案する

「一騎打ちの3本勝負・・・?」

「そうだ」

「何が狙い?」

「それはもちろん、Fクラスの勝利だ」

木下優子の疑問の言葉に坂本雄一は当たり前のように答える

（俺が翔子に勝つて1勝、ムツツリーーーが向こうの代表に勝つて2勝、もじどちらかが負けても予備として姫路が久保辺りと戦つて勝てばうちのクラスの勝ち・・・我ながらいい作戦だ・・・）

（3本勝負・・・ならあつちは2回勝てるカードをもつてゐてこよね・・・姫路さんと・・・誰かしら?とりあえず・・・）

「却下よ。面倒な試合戦争を手軽に終わらせる」とが出来るのはあ

りがたいけどね、だからと言つてわざわざリスクを冒す必要もないの・・・

(却下ね。それで相手の反応を見る)

「賢明だな。といひで、Cクラスの連中との試合戦争はどうだった？」

(I)までは予想通りだな・・・

「1時間で済んだわ。威勢だけで呆氣ないものよ」

(アンタ等が仕向けたくせによく言つわ・・・)

「流石はAクラスか・・・といひで、Bクラスとやつあつははあるか?」

「Bクラスつて・・・前來ていたあの・・・」

坂本雄一の言葉に木下優子が顔を青くなる

(ゲヒH・・・思ひ出しちやつた・・・)

「ああ、あれが代表をやつてるクラスだ。幸い宣戦布告はまだのようだが、さじどりなる」とやつ

(フツ・・・女装が効いてやがるな・・・これに関しては明久に感謝しねえとな。さじどりするかな・・・?)

「来たら来たで戦うだけよ。Aクラスに試合戦争の拒否権はないん

だし・・・

「さうか・・・ならロクラスとも戦うんだな？」

（まだ拒否するとまな・・・でもこれなりじつだ？）

「問題ないわ・・・」待つて優子・・・「・・・霧島さん？」

「・・・華織はきっとそれを望まない・・・」

坂本雄一の言葉を木下優子が突っぱねようとするが、途中で霧島翔子が止めた

（確かに昨日、さう言つてたわね・・・）

（ナイス翔子・・・しかし、華織、か・・・ずいぶん仲良くなつた
ようで・・・）

「うーん・・・なら、3本勝負じゃなくて、5本勝負でどう？それ
で3回勝つたクラスの勝ち、つてこうのにしましょう」

（これなら最悪2回勝たれてもまだ大丈夫だし・・・）

「そうだな・・・いいだろ？ その条件で・・・」

（まあ姫路が勝てばいいだけだし問題ないな・・・）

「その代わり勝負の内容はいつまで決めをせてもいいんだ？それくら
いのハンデはあってもいいだろ？」

(これでさりに勝利は確実なものに・・・)

「え? うーん・・・」

(そつちから挑んじてハンデつてふざけてるのかしら? Aクラスの生徒だって苦手科目はあるのよ? そんなの受けるわけ・・・)

「・・・受けてもいい」

「霧島さん? ・・・」

木下優子の予想に反して、霧島翔子が坂本雄一の提案を受け、木下優子は驚く・・・
もちろん霧島翔子もただでそれ受けるつもりはなかった・・・
「・・・その代わり、条件が2つある」

s i d e · ·

「・・・その代わり、条件が2つある」

「条件が2つだと？」

「・・・そう」

霧島翔子の言葉に坂本雄一が訝しげに反応する・・・先ほど木下優子のように・・・

「・・・まず1つ目、対戦前に華織に謝つて・・・2つ目、負けた方は何でも1つ言つ」と聞く・・・

「2つ目はいいが1つ目はどうしたことだ？俺達はそつちの代表に何かした覚えはないぞ？」

霧島翔子の出した条件に、坂本雄一は理由を尋ねる

「よくもまあそんなことを言えるわね・・・」クラスとの戦争、Fクラスの差し金でしょ？アタシ達が知らないとでも思ったの？」

「・・・華織は今日、法事があつて午後から早退することになつてた・・・なのに昨日、宣戦布告されて・・・1日中悩んで・・・今日もクラスの人を作戦に協力してくれるようになつて頭を下げてまで頼んで・・・終わつたらまた頭を下げて・・・」

「転校してきて数日しかたつてない、クラスメイトの顔と名前も覚えきれないない、右も左もわからないでいきなり代表になつて……そんな中で、だよ？・・・ボクは代表じゃないから代表の責任とかつてわからないけど、転校生の気持ちはわかる・・・ボクも1年の終わりに転校してきたから・・・転校してすぐつて凄い不安なんだよ・・・最初の印象次第でこれからが大きく変わるから・・・」

それを、木下優子、霧島翔子、さらに工藤愛子が説明する。その説明に、Fクラスの生徒だけでなく、Aクラスの生徒も気まずそうな顔をする。

「・・・そもそも華織は・・・代表が何をするのかも知らなかつた・・・」

「じゃあ今朝のあの行動は・・・代表としてではなく、一生徒としてだつたと・・・？」

Aクラスの生徒達を代表するように久保利光が聞いた

「恐らく藤堂さんにとって代表は・・・日直程度の認識じゃないかな・・・少なくともクラスメイトに命令できる権力を持つてるとは思つていないよ・・・」

『なつ・・・』

工藤愛子の言葉に、Aクラスの生徒が驚き、声を漏らす・・・

「・・・雄一・・・華織に迷惑をかけないで・・・もしこれ以上華織に迷惑をかけるなら・・・私は雄一を軽蔑する・・・そして・・・」

「

霧島翔子は真っ直ぐ坂本雄一を見て……

「……華織の友達として、私は雄一を一度とそんなことができないよう調教する」

はっきりと決意のこもった声で言こもった

「……」

坂本雄一が気迫に押されて黙り込む……

『……』

いつもなら、ツッコミの一つでも入れている他のFクラスの生徒も黙り込んだ……

「わかった……条件を呑むつ……」

そして、坂本雄一は静かに口を開き、条件を受け入れる」と云えた

「あ、やっぱり勝負内容は二つ、つまに決めさせてくれないかしら？」

気勢がそがれたFクラスの生徒達に、木下優子はすかさず自分達が有利になるように条件を変える

(空氣読めとか思われるかもしないけど……このまま決定権を5つ全て持つてかれたら、藤堂さんに顔を合わせらんないわ……)

「・・・妥当なところか。交渉成立だな。開戦はいつにする?」

それを坂本雄一は受け入れて、これ以上条件が悪くならないよう交渉を終了させ、次の交渉内容に移った

「・・・とりあえず火曜日の午前10時で・・・華織の予定次第では変更の可能性あり、といつことにしておいて・・・」

（・・・今日向かって前泊する必要があるといつことは帰りは日曜日の夕方以降になる可能性もある・・・なら月曜日は外して1日余裕を持つたほうがいい・・・）

「わかった・・・」

霧島翔子は藤堂華織の負担を考え、開戦日時を翌登校日の月曜日ではなく火曜日の午前にし、さらに変更可能といつ条件も盛り込む

坂本雄一は異議が無いのか、異議を唱える気が無いのか、それを了承する

Fクラスの生徒達がAクラスの教室から出て行き・・・

「でもよかつたのかな・・・?宣戦布告は仕方ないとして、試合方法や命令権のこと・・・勝手に決めちゃって・・・」

工藤愛子が不安そうに囁つ

「……大丈夫、このFクラスとの戦争……雄一がどんな手を使つても……私が全て潰してみせる……そして私達が必ず勝つ……」

「霧島さん、向こうの代表とは……」

それに霧島翔子がはつきりと勝つと言い切り、そんないつもとは少し違う霧島翔子の様子に木下優子が坂本雄一との関係を聞いた

「……小学校のときからの幼馴染……そして、私の好きな人……」

その疑問に霧島翔子は特に恥ずかしげもなくそう答える

「……でも、だからこそ、手を抜くつもりはない……私は華織のために絶対に負けない……この想いが上手くいくようについて応援してくれた華織のために……」

「そうですか……アタシも、もし試合に出れたら、何が何でも勝ちに行こうと思います」

（恐らくこれに勝てば試合戦争は3ヶ月間無い……あの子の肩の荷を降ろしてあげるためにアタシができるることはそれくらい……だから……）

（理想は藤堂さんまで回さずにストレートで勝つことだね……だから……そのためにボクができることは……）

（誰が出るかはまだ決まってない、でも私が試合メンバーに選出さ

れるかはわからない・・・けど・・・あの子の為に何か・・・だから・・・

(学年3位に甘んじていいのではダメだな・・・僕ももっと上を目指さないと・・・だから・・・)

((((もし出れたなら必ず勝つ))))

成績上位者達が決意を新たにFクラス戦への闘志を燃やし・・・

((((上位の10人並みの圧倒的な点数を自分達も取れるようになれば・・・宣戦布告してくるクラスなんて無くなるはず・・・もつとがんばろ!・・・))))

そして他のAクラスの生徒達の気持ちは一つに・・・

お父さんの七七日法要も終わり、月曜日から三日間お休みを取る。四半世間も帰ってきて、月曜日・・・

今日もお婆ちゃんの車で一緒に学園まで来たので、教室に1番乗り・・・かと思つたんですが・・・

「あ、お世話をうけた二番目、藤堂さん」

『おせむー藤原さん』

『おおやがいじわこす、藤堂さん』

教室の戸を開け、中に入るとすでに半分近くの生徒がいて、自習をしていた。そして、1人の生徒が私に気付き、挨拶をしてきて、他の生徒も私に挨拶をしてきた・・・

「あ・・・お、おせむりをこめた・・・」

私はその光景に戸惑いながらも挨拶を返す・・・皆さんいつたいどうしたんでしょう・・・？

「えと・・・金曜日は色々すいませんでした・・・これ、向こうで売つていたお土産のお菓子です・・・1人1つずつしかありませんが・・・どうぞ・・・」

『そんなの気にしないでいいよ・・・ありがとう、藤堂さん。頂くね』

『ありがとうございます、藤堂さん……頂きます』

私が金曜日のこと謝って、ホテルの売店で買ったお土産を出す。
・なんか物で、まかしてる気がして悪い気がする……

それにも、皆さんは私は私のことを代表って呼ばないです。
・なんでもしみつ……?

「……華織、おはよっ……」

「おはようございます、翔子さん」

そのとおり、翔子さんが教室に入ってきて、挨拶を交わす

「皆さん、今日またいつも早いですね……? なにかあつたん
ですか……?」

『ー。(ピタッ)』

私の言葉にクラスメイトの動きが止まった……この空気が凍つた
感じ……これが地雷という奴ですか……迂闊でした……

「……金曜日、華織が帰つてすぐ、Eクラスが宣戦布告してきた。
・」

「やつですか……」

今日あたりにくると思つたんですが、金曜日に来るとは……

「・・・それで、Fクラスは試合方法を指定してきた」

「試合方法、ですか？」

「・・・Fクラスが提案してきたのは一騎打ちの3回勝負・・・それを優子が交渉して、5回勝負になつた・・・勝負方法の決定権はこちらが2回、Fクラスが3回・・・」

なるほど、クラスの総合力で勝てないと踏んで、個人個人での勝負に賭けたということですか・・・向こうの提案は3回勝負なら2回は勝てるつもりでいる・・・いや、5回勝負を了承したということは3回全て勝つ算段だつたということでしょう・・・1人は、姫路瑞希さんかな? あの2人は・・・1人はわかりませんがもう1人はたぶんあの人で、私に当てるつもりだろう・・・あの人の前に私は立てないから・・・ん? ちょっと待つて・・・

「あの・・・それってつまり、代表が出なくてもいいってことですか・・・?」

「・・・参加メンバーについては何も言われていない・・・」

なら、私が出なくてもいいってこと・・・
私無しで、何とか勝つてもいいましょう・・・

最低の代表ですね・・・私・・・

そして8時15分、いつもより早くクラス全員が登校してきて揃つたので、試召戦争の話をします

「えっと・・・皆さんはもう知っていると思いますが、明日の午前10時より、Fクラスとの試召戦争が行われます・・・」

「・・・華織、日にちの変更ができるよ」といふといたけど、それで確定と伝えていい?」

「はい・・・問題ないです。ありがとうございます、翔子さん」

翔子さんの確認に私は返事をしてお礼を言います

「試合メンバーは当日、相手の出方を見ながらその都度決めようと思います・・・総合得点で上位5位くらいまでの人が、何かの教科で学年上位3位以内にある人、お手数ですがこの後、教科と得点、そして名前をお願いします」

私が試合メンバーの選考基準を発表する

たつた3人負けてしまっただけでクラス全体が負けてしまっ・・・慎重に選ばないと・・・

「その他、召喚獣操作に自信がある人やここ一番の勝負強さがある人、などなど・・・これは自薦他薦を問いません、自薦の場合は希望教科、他薦の場合その人の名前をお願いします・・・他薦は匿名でもいいですが、本人に確認をとるので早めにお願いします。締め切りは明日9時とします」

もちろん点数のみに拘るつもりも無い・・・勝負は時の運とも言いますしね・・・

「それでは、なにか質問や意見、要望等はありますか？」

「はい」

「はい久保君、どうぞ・・・」

久保君が挙手したので、私は当てて、意見を聞く

「補給試験を受けたいので、申請をお願いします」

「あ、私もお願いします」

「ボクもお願い」

他にも数人補給試験を受けたいと言つてきたので、誰が何の教科を受けるのかを聞いてメモを取つておいた。久保君が現代社会で、佐藤さんが物理、工藤さんは保健体育、他の方はCクラス戦で消費した数学、と・・・

そうして話を終えて解散し、私が補給試験の申請を職員室に行つて済ませてみると、ノートの1ページがちぎつて置いてあり、それに先ほど私が指定した人が名前と教科と点数が書いてあつた、恐らく私の手間を省くためでしょう・・・ありがとうございます

その後、自薦他薦のほうは無く、皆やつぱり出たくないですよね・・・
・つと翔子さんにこぼしたところ、あまり手札が多すぎると私が選ぶのに苦労するから遠慮しているだけ・・・つと言われた

皆の気遣いに感謝しながら、私はこいつらの手札を確認する・・・

（）

総合2位 霧島翔子 4498点

教科別順位 保健体育以外学年2位

備考 保健体育は学年4位、日本史が保健体育を除いた他教科に比べて10点くらい低い

総合3位 久保利光 3997点（補給試験中のため参考数値）

教科別順位 現代社会、日本史、世界史の学年3位

総合4位 木下優子 3851点

教科別順位 現代国語、古典、英語の学年3位

総合5位 佐藤美穂 3804点（補給試験中のため参考数値）

教科別順位 物理、化学、数学の学年3位

保健体育学年2位 工藤愛子 446点（補給試験中のため参考数値）

（）

（注）順位や点数は振り分け試験時のもの

（）

うーん・・・困りました・・・先ほど言つた条件が被りすぎて当てはまつた人が5人しかいません・・・ちなみに私は・・・

藤堂華織 総合5083点

教科別順位 保健体育以外学年1位 保健体育学年3位

となっています・・・

まだ補給試験の結果待ちなので、教科別順位のほうは変わつてくる可能性がありますが・・・

学年3位の大体の目安は390点以上・・・宣戦布告された金曜日から土日もずっと勉強したら届くかもしませんが、現在3位の方も抜かれまいと勉強してるわけで・・・唯一保健体育3位の私は土日は法要で勉強できてませんが保健体育は受験に使いませんからね・・・それに学年3位といつても私の保健体育の点数は400点以上ですし・・・

ん? そういうえば、保健体育の1位つて誰なんでしょう・・・? このクラスにはいないようですが・・・
447点以上つて、体育の先生とか目指してるとか目指してる人かな・・・?

10話（後書き）

Aクラスの上位ランカーの成績は勝手に決めました

翌日、火曜日の午前10時
場所は私達Aクラスの教室

「では、Aクラス、Fクラスとも両陣営、準備はいいですか？」

戦争の立ち会い人は、私達Aクラス担任であり、学年主任でもある
高橋先生

学年主任の先生は教員の中で唯一総合科目も含めた全ての教科を承
認し、召喚フィールドを開拓することができます

その高橋先生がAクラス、Fクラスに確認をとります

「……はい……問題ありません……」

「……お前の見た目以外はな……なぜ顔を隠している?」

それに私が返事をして、Fクラスの代表……初日に桃色の髪の女
子生徒と話していた男子生徒……が私にツツ「コミを入れました

私は今、タオルを顔と頭に巻いて隠しています……理由は、あの
人の視界の中に、私が入っているから……

私だとわからなければ、鼻血は出ないのでは?と思って……顔だけ
では不安だったので、頭にも巻いて髪型もわからなくしました

「え? さつきまで普通に顔出してたよね……?」

「え? さつきまで普通に顔出してたよね……?」

あ、工藤さん……バラさないで……

「……したところとして置いてください……」

「あ、ああ……まあいいが……」

私の言葉にFクラスの代表は不審そうな表情をしながらも、了承してくれた

「……雄一、約束」

「わかつてゐ……あの……その、だな……」

翔子さんがFクラスの代表に何かを催促し、Fクラスの代表が気まずそうに私の話し始め……

「すまなかつた」

そう謝罪の言葉を口にして、私に頭を下げました

「え……あの……何のことでしょうか……?」

何も知らない私は当然戸惑つ……

「CクラスをAクラスに仕掛けさせたのは俺達Fクラス……いや、俺がやつたことだ」

やつぱりそうでしたか……

「言い訳をするよつだが、Bクラス戦の初日が終わつてすぐ、Cクラスが俺達に仕掛けてきそうな空気になつてたんだ……だから矛先を変えるために秀吉を使ってAクラスに……」

なるほど……そういう経緯だつたんですか……私の情報を出させるためじゃなかつたんで……

「ついでに代表のお前のデータが手に入れば、ヒ……

あ、やっぱりそれは思つてたんですね……

「はあ……事情はわかりました。いいでしょ……本当は私だけではなくクラスメイト皆に謝つて欲しいですけど……試合前ですし……」

この人も代表で、自分のクラスの生徒達に対する体面というものがあるでしょ……しね

「すまんな、助かる」

「そう思うなら手心を加えてほしいですね」

「ふつ……それとこれとは話が別だ」

そんなやり取りをし、私とFクラスの代表がそれぞれの陣営に戻ります

「それでは、1人目の方、前に……」

高橋先生が試合の進行をします

「え？ 木下さん……？ なんで向こうは……それになんで男装を……？」

「わしは男じゃ……」

なぜか男子の制服を着た木下さんがトクラスがり出できて、私は疑問を口にすると、木下さんが怒って変な言葉使いで声を上げた

「藤堂さん、あれは双子の弟の秀吉です、アタシは向こうもや」

「くつ？ あ……すいません木下さん」

真横から声をかけられ少し驚きながら横を見ると、ちゃんと女子の制服を着ている木下さんがいました……双子だつたんですね……よく似ていて、同じ格好したら見分けがつきませんね……トクラスの代表を怒らせたのはこの人ですね……

「藤堂さん、アタシが出てもいいかしら？ 必ず勝ちますので……」

「え……あ、は……お、お願ひします……」

木下さんが氣迫のこもった声でそう呟つてきて、それに押された私は何も考えずに承諾してしまつ……

「わい、秀吉……ちよつといつぱりよいか……」

「うふ？ わしを廊下に連れ出していくよんじや姉上？」

木下さんが木下君をつれて廊下に出ていきます

『姉上、勝負は・・・どうしてわしの腕を掴む?』

『随分と好き勝手してくれたわね！！覚悟しなさいよ！！』

『なつ？！それはもう雄一が謝罪をしたじゃね？！』

『ア・ン・タ・は、してないでしょーーー。アタシにもーー藤堂さんにもーー』

いつたい何が行われているのでしょうか・・・?

「秀吉は急用で歸つたわ。藤堂さん、秀吉にせ後口かやんと謝罪をさせますので……」

「あ、は、はい・・・わかりました・・・」

木下さんは怒らせないようこしめよう。・・・

「さて・・・誰か別の人を出してくれないかしら?」

「いや・・・こいつの不戦敗でいい」

木下さんがFクラスの代表にそう聞くと、Fクラスの代表は誰を出しても無駄と判断したようです
ですよね・・・そんな赤い何かをベッタリと付けた顔で言われてた
ら・・・

Aクラス 木下優子 WIN

VS

Fクラス 木下秀吉 DEAD

高橋先生がパソコンを操作し、プラズマディスプレイに結果が表示されました

あの・・・その[冗談は、今の私にはきついのですが・・・

「では、次の方どうぞ」

高橋先生が次の対戦に移ろうとします

さて向こうは誰が・・・姫路瑞希さんなら久保君か翔子さんを、それ以外なら教科の決定権を使用して工藤さんの保健体育か佐藤さんの理数系という手で・・・

「よし。頼んだぞ、明久」

「え？！僕？！」

Fクラスから出てきた（出させられた？）のは明久と呼ばれる男子生徒・・・確かに試召戦争の言いだしついで放送で犠牲になった生徒でしたね・・・

「あの生徒は何が得意なのか・・・うーん・・・」

「吉井君は観察処分者で、少しくらいの点数差ならをひっくり返せてしまつくりじ召喚獣の操作が得意です」

私が次の人を決めかねていると、久保君が相手の生徒の情報をくれました

観察処分者が何かは知りませんが、なるほど、召喚獣の操作技術ですか・・・なら・・・

「教科の決定権を使って、工藤さんの保健体育で・・・」

単教科で400点を超えていて腕輪の使える工藤さんなら、そういうひっくり返されたことはないでしょう

しかし・・・

「ゴメン藤堂さん・・・向こうのクラスに保健体育の学年1位がいるから、ボクはまだ・・・」

工藤さんはそう言って難色を示します

まさか保健体育の学年1位がFクラスにいるとは思いませんでした・・・

「やつなんですか・・・?」

「うん・・・名前は知らないけど、あだ名がムツツリーって書いてね・・・保健体育が総合得点の8割を占めているらしいんだ」

そんな生徒がいるんですね・・・ちゃんと情報を集めておけばよかつたですね・・・

「私が出ます

「佐藤さん? でも相手は・・・」

「大丈夫です。どれだけ操作が上手くても、私は勝ちます」

確かに選択肢は佐藤さんしかありませんが・・・私もそこまで操作に自信があるわけではないですしお

「Aクラス、対戦者は前へ」

「わかりました、お願ひします佐藤さん。教科の指定権も使ってください」

迷っている私に高橋先生から催促の言葉がかかり、私は覚悟を決めて彼女を送り出します

「はい、ありがとうございます・・・行きます」

佐藤さんが前に出ていき・・・

「対戦科目の選択権を使います。科目は物理でお願いします」

「わかりました。科目物理で召喚フィールドを承認

佐藤さんの言葉を受けて、高橋先生が物理で召喚フィールドを展開する

「え？え？嘘？ホント？ムリムリムリだって！雄一、やつぱ僕じや勝てないよ！」

相手の生徒がそれに焦りだし、代表に交代をお願いしている

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

代表がそう言葉をかけます

「ふう・・・やれやれ、僕に本気を出せつひとつ？」

「ああ。もう隠さなくともいいだろ？この場にいる全員で、お前

の本気を見せてやれ

それを聞いて、対戦者の生徒が演技っぽい調子で返し、さうに代表が鼓舞せます

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」

「いや、そんな話は聞いたことないが」

「こつものジョークだろ？」

Fクラスの陣営からそんな声が聞こえます・・・あれ？もしかしてそこまで気にしなくてもよかつたのかな・・・？

「吉井君、でしたか？あなた、まさか・・・」

佐藤さんが警戒するように問いかける

「あれ、気付いた？」名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない

「え・・・？」これはまずいのでは・・・

「それじゃ、あなたは・・・」

「せつや、君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕・・・」

そして相手の生徒は、大きく息を吸い込んで・・・

「・・・左利きなんだ」

『・・・』

教室中がシーンとなります

「利き手の違いでどれほど点数に差が出るのかわかりませんが・・・私も本気を出します。サモン」

「あ、はい・・・サモン」

佐藤さんが冷たく返して召喚獣を呼び、相手の生徒はイマイチ受けが悪かったな・・・という表情で同じく召喚獣を呼びます

Aクラス 佐藤美穂 物理 402

VS

Fクラス 吉井明久 物理 62

返して・・・私が対戦者を選ぶのに悩んだ時間を、佐藤さんが負けるかもって心配した時間、労力を・・・

佐藤さんは腕輪を使わず無傷で相手の召喚獣を倒しました

「勝者Aクラス」

「「Jのバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうがー」

「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

相手の生徒がFクラスの女子生徒に怒られながら殴られています
フィードバック？ 痛んでる？ どういうこと？

「翔子さん、あの人はなんで召喚獣のダメージを自分も受けているのですか？」

「・・・観察処分者は、召喚獣で雑用を行わせる罰を受けている者の肩書き、罰だから召喚獣の疲労や感覚を召喚者にフィードバックするようになつている」

だから雑用をさせられた分、召喚獣の操作は他の人より上手くて、でも罰だから召喚者もダメージを受けるのですか・・・
あまりこういるのは好きではないですね・・・罰でやらせる雑用ならば自分の体を使ってやらせるべきだと思います・・・それなら体力や筋力も鍛えられます・・・頭がダメなら体を使え、という言葉もあります・・・

「よし皆、勝負はここからだ！」

「ちょっと待つた雄一！ お前、僕を全然信頼してなかつただろ！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

「向こうの代表は何がやりたいんでしょう？」

「では、3人目の方どうぞ」

「・・・（スック）・・・教科選択権の使用、保健体育」

高橋先生の進行の言葉に、とうとうあの人・・・土屋康太が立ち上がり教科を保健体育に指定した

・・・なぜか鼻声で・・・まさか、私が顔を隠した効果はなかつたつてことでしょうが・・・

「とうとう出たね、保健体育学年1位・・・」

それを見て工藤さんがそう洩らす・・・

まさか彼だつたなんて・・・でもどうしてそんな成績に・・・

「藤堂さん、ここはボクが出るね。点数では敵わないかもしけないけど、負けないようがんばってみる・・・」

工藤さんがそう言つて前に出でいく

「保健体育の学年首位・・・その寡黙な性格から付いたあだ名がムツツリーー・・・寡黙なる性識者か・・・でもね、ボクだつて保健体育が得意なんだよ・・・キミと違つて、実技でね・・・」

最後のほうを色っぽい口調にして工藤さんがそう言つ・・・相手の集中を乱す策ですか・・・

その言葉に、Fクラスの面々は沸く・・・保健体育の実技つてどう考へても球技や陸上競技とかのスポーツでしょ・・・

「そつちのキミ、吉井君だつけ？ 勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげよっか？ もちろん、実技でね」

工藤さんが先ほど佐藤さんに負けた生徒を指名して続けます
周りも巻き込んで場の流れを自分に持っていく、と・・・中々手が
込んできますね

「フツ、望むところ・・・」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な
んていらないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

工藤さんの策に引っかかりそうだったのが2人の女子生徒に無理矢
理引き戻されました

「・・・・氣は済んだか・・・工藤愛子・・・」

「え？」

あの人は工藤さんの策に特に動じる様子を見せず・・・

「・・・悪いが俺の相手はお前じゃない・・・代表・・・いや、華
織を出せ」

私に視線を向け、対戦者に私を指名してきました

「……悪いが俺の相手はお前じゃない……代表……いや、華織を出せ」

「藤堂さんを？」

あの人と言葉に藤堂さんが疑問の声を上げます

「藤堂さん……あの生徒と知り合いなんですか？」

木下さんが私に質問してきます
まあそう思いますよね……

「いいえ、初対面です……木下さん、対戦者の指定はルールになかつたですよね？私より藤堂さんのほうが保健体育の成績はいいので拒否するよりは言つてください」

「あ、はい……」

昔殺しかけた恋人です。なんて言えるわけないので、私は嘘をついて木下さんに拒否するようにお願ひします

「却下よ……対戦者の指定はルール違反よ……」

木下さんが却下と頭を上げる……木下さんの声はよく通りますね……

「いや、1回戦の教科指定が有耶無耶で終わつたから、その分の指

定権を今回、対戦者に対して使わせてくれ。それなら文句ないだろ
?」

しかし、向こうの代表は教科指定権をもう一回使ってまで私を出そ
うとして……

「うつ・・・そう言われると・・・」

「別にAクラスの中でも下位の奴を指定するわけじゃないんだ・・・
構わないだろ? それとも・・・」

木下さんは痛いところを突かれたといつ表情をし、さらに向こうの
代表は畳み掛けてきます

「学年主席なのに・・・勝てる自信がないのか?」

挑発するような言葉・・・
ええ、ありませんよ・・・そもそも私はあの人と同じ場所にいてい
い人間ではないんです

「・・・華織・・・まさか・・・」

翔子さんが私の様子に何か気付いたような声を出します

「ダメ・・・なんです・・・あの人傍に・・・私は立つては・・・
いけないんです・・・」

私はそう声を洩らし、無意識に後ずさりしてしまつ

だけど・・・

ガシツ

「・・・華織、逃げちゃダメ・・・まだ、好きなんでしょう・・・?
忘れなかつたんでしょ・・・?だったら・・・」

翔子さんに腕を掴まれて私を説得してくれる

「ダメなんですよ・・・私が近づくと、あの人は・・・康太は死んじ
やう・・・」

私は涙声で叫ぶように言つ

「私は康太を殺しかけた・・・本当なら私はここに・・・康太の近くにいていい人間じゃないの!..」

「ちょっと? ムツツリーー君? ..」

パシーン

私が取り乱して昔の罪を告白してしまう、すると康太が私に近づいてきて平手打ちをしてきた

あはは・・・そうだよね・・・そうするよね・・・

私がいい感じに壊れたから、康太がここできつちりと決別の言葉の1つでも言えば、私は明日から後ろ指を差される日々が始まつて・・・

「・・・誰がお前・・・華織に殺されかけたって?」

「は・・・？」

康太の言葉に私はボカンとなる

・・・華織が近づくと誰か死ぬって?」

「康太がだよ！！私があの時調子に乗つて暴走したせいで、康太は私を見ただけで鼻血を出すようになつて・・・今だつて鼻声で・・・鼻に詰め物して無理矢理止めてるんでしょ？！知つてる？それって鼻血の正しい止め方じやないんだよ？！詰め物を取るときに結局傷が開いてまた出血するから・・・」

他にも上を向いて鼻血が垂れないようこしたときのよつて喉に逆流したりも・・・

・・・俺はこれをお前のせいにした覚えはない・・・見縊るな」

「でも……どう考えたって……それに康太がどう思おうと……私が傍にいると……康太はいつか死ぬの……私のせいだ……」

そしてそのとき絶対に思うはず・・・私なんかに会わなければよ
かつた、と・・・

「・・・それで死ぬなら本望だ」

いや、康太がよくても私が・・・

えへちよつと木下さん？一何勝手に決めちやつてるんですか・・・？

「ちよつと待つてください！工藤さんのほうが保健体育の点数はいいので変更は無し・・・」

「うう・・・お腹痛い・・・これは試合ができちやないなあ・・・」

「

工藤さん？！そんな棒読みで、しかも先生に見えないよつて舌を出してウインクまで・・・絶対仮病ですよね？！」

『I君は藤堂さんにがんばつても、うしおか・・・』

『だな・・・工藤が体調を崩したなら任せても勝てそつこないしな・・・』

ちよつと・・・クラスメイトの皆さん・・・？

「・・・大丈夫、華織が負けても、誰も責めない・・・それに私が絶対、雄一に勝つ・・・だからAクラスは負けない」

翔子さん・・・

「もちろん僕も、姫路さんが相手でも、負けるつもりはありません」

「戦つてください、藤堂さん」

久保君・・・佐藤さん・・・

「最終決定権は代表である藤堂さんになります……では30秒以内に決定してください。時間オーバーはAクラスの不戦敗とします。・・30・・・29・・・28・・・」

高橋先生？！

「ちょっと待ってください、先生！……なんで時間制限があるんですか？！」

「あなた達のやり取りで時間が押しに押していますので・・・20・・19・・・18・・・」

た、確かに・・・

「17・・・16・・15・・14・・13・・12・11・10・9・8・7」

「つて先生？！せめて時計見て30秒計つてくださいよ！カウントが早くなつてますよ？！」

あ～もう！～

「わかりました、出ます～出させていただきます！」

『（ニヤニヤ）』

「うう・・・Aクラスの皆さんが妙に優しげな視線を向けてきます

「では両クラス対戦者は開始位置についてください」

「はい」

『気まづい』ので早く開始位置につきましょーう・・・

私は康太の横をすり抜けていこうとします
そのとき・・・

パチン

私が頭と顔に巻いていたタオルを留めていたピンを外されました

「・・・はつきり言うとこれは無意味だ・・・俺はお前を顔や髪型
だけで判別していたわけじゃない・・・もちろんそれは今も同じだ・
・・」

ああ・・・やつぱりそうでしたか・・・

「・・・髪切ったのか・・・」

タオルが落ち、私の姿を見た康太が声を洩らします

「うん・・・家事の邪魔になるし、洗うのも時間が掛かるから・・・

「

「・・・そつか・・・にしても・・・」

「・・・ん・・・?」

「・・・昔のまま・・・だな・・・色々と・・・小さくて・・・」

康太が私の頭から足に目線を動かした後、胸を見て呟くように言います

「……どうせ縦も横も2・3センチ程度しか変わつてませんよ……
そういう康太だってスケベなとこ、変わつてないじゃない……」

諦めてたけど……改めて言われるときついですね……

「なんか……藤堂さんが子供っぽく見えるね……」

「ええ……普段と全然違うわね……あがが素なのかしら……
?」

「それにして向いつの陣営は何をしてくるのでしょうか?」

「罪状を読み上げたまえ」

「ハツ、被告、土屋康太(以下この者を甲とする)は……」

工藤さん達の会話や、Fクラス陣営の裁判のよつた行為は……気にして仕方ないですね……

あーあ……今までの私のイメージは崩れて……これからはどうお子ちゃまとか言われちゃうのかな……

でも、私は実はもう大人、なんですよ?

中2のときこ、その……してますので……

1-3話（後書き）

最後のよつなじことを考えてる時点で充分お子様です・・・なんてね
以前活動報告で書いた主人公がウザいって記事は、この話を書いて
て思いました

たぶん原因はキャラを思ったとおりに動かせない＆行動を上手く描
[写]できないこと

要は自分の腕の無さ・・・反省します

「それでは3回戦、教科は保健体育です。召喚してください」

「「サモン」」

私と康太が召喚獣を呼び出します

Aクラス 藤堂華織 保健体育 401

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 572

- ・え・・・?こんな点差あるの?でも腕輪で接近して隙を作れれば・・・

私の召喚獣と、小太刀を2本持った忍者姿の康太の召喚獣がジリジリと睨みあつて、飛び出すタイミングを計っている・・・と思いまや

「・・・サービスだ。腕輪の能力を見せてやる」

「は?」

「・・・加速」

そう言うと康太の召喚獣の腕輪が発動して召喚獣の姿が消えました

「・・・加速終了」

「え?え?」

康太がそう言うと康太の召喚獣が私の召喚獣の背後に出てきました

「・・・高速移動・・・これが俺の召喚獣の腕輪の能力だ」

「なんで私と同じなの？1人1人違うんじゃなかつたんですか・・・？ねえ・・・お婆ちゃん・・・」

「そんな余裕、見せていいのかな・・・？」

「・・・？」

「腕輪起動」

今度は私の召喚獣が姿を消しました

「・・・！」

康太の召喚獣が回避行動をとり、回避前にいた場所の床に私の召喚獣が爪を突き立てる姿・・・

「・・・同じ能力だと・・・？」

「1人1人違うって聞いてたけど、不思議なこともあるんだね・・・」

「

そしてまた私の召喚獣の姿が消えます

「・・・面白い・・・加速」

それを追いかけるように康太の召喚獣の姿も消えました

ま、まざい・・・自分のもそうだけど、康太の召喚獣の動きも田で追えないから・・・どこを狙って、どう動かせばいいか全くわからぬい・・・

「・・・華織」

そんな時ふと康太が私を呼ぶ・・・

私は適当に逃げ回るように動かしながら康太のほうを向くと・・・

「田で追えてるの・・・?」

「・・・俺を舐めるな」

康太の目線が何かを追うように動いていました・・・ありえない・

・
でも康太の目線の先には私の召喚獣か康太の召喚獣がいる（と思つ）

こうなつたら康太の目線は康太の召喚獣を指していると思つてやる
しかない・・・

私はこのクラスの代表として、負けるわけにはいかないから・・・

私は召喚フィールドの範囲ギリギリまで後退して、康太の目線と召喚獣が動いているスペースを同時に見えるように、視野を広くする
といふか情けをかけられますよね？

「やうやつていつもいつも・・・子供扱いして!」

「・・・ 実際小さいしな・・・」

「「つづれこー」」

そんなやり取りをしながら、康太の召喚獣がいると思われる場所に
爪を突き刺すように突撃をしていく
しかし、回避されて、速度が落ちた姿しか見えない・・・

「なんか藤堂さん・・・ ああ?」

「ええ・・・ 勝負をしてるってのに・・・ ねえ?」

「・・・ 楽しそう・・・ ?」

アーアー聞こえない聞こえない・・・ 聞こえませんつたら聞こえま
せんよ

十数分後・・・

Aクラス 藤堂華織 保健体育 123

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 114

「はあ・・・ はあ・・・ いつまで・・・ 逃げてるの・・・ ?」

私は息を切らせながらそう問い合わせる・・・ いや、召喚獣操作だつ

て疲れるんだよ？ホント・・・私が体力無いわけじゃないって・・・

「・・・俺の気が済むまで」

私が追つかけて、康太が逃げる・・・私が攻撃しても、康太は回避だけで一切反撃をしてこない

私は一撃も攻撃が当たることができず、点数消費は腕輪の能力による消費のみ

なぜか私のほうが康太の召喚獣の腕輪より点数消費が少ない

「どうするの？」のままだと先に〇点になるのは康太だよ？」

「・・・そうだな・・・じゃあそろそろクライマックスといいくが・・・」

康太がそう言いつと移動を止めて腕輪を停止することなく姿を現します
私もここで攻撃するのは不粋と思い、少し距離をとつて同じように止まつて姿を現しました

またジリジリと睨み合いつ・・・うん、大体やりたいことはわかつた
ような気がする

「タイミングは？」

「・・・5秒後」

まあ仕方ないから従つてあげよつ・・・

・

・・・

「「一」」

ほぼ同時に2体の召喚獣が姿を消しました

2体とも真っ直ぐ突き進んで・・・

2体の召喚獣が、それぞれの武器を相手の召喚獣に突き刺そうとして・・・

ザクッ

勝負の分かれ目は、それぞれの召喚獣の武器の長さ・・・

私の召喚獣の武器の爪は、召喚獣を人間のサイズにしたとして、大体40センチくらいといったところ

それに対して、康太の召喚獣の武器は小太刀・・・小太刀とは大体刃長60センチ前後の刀をいう

その差は20センチ・・・持ち方の違いはあっても、その差は埋められるほどではなく・・・

ボンッ・・・

「あ・・・」

康太の召喚獣の武器は私の召喚獣に突き刺さり、私の召喚獣の武器

は康太の召喚獣の衣服を少し切つて、身体に少し届いたくらいで止まり、消えてしまいました・・・

「勝者Fクラス」

高橋先生の勝者を告げる声・・・

負けて・・・しまいました・・・私は・・・代表なのに・・・

「すいません・・・負けてしまいました・・・」

私は肩を落としFクラスの陣営の戻つて頭に謝ります

「大丈夫だつて・・・まだ1敗だしね」

「わつですよ、」のあと久保君が霧島さんが勝てばいいんですから

「藤さんと木下さんがそんな私を励ましてきます

「これで2対1ですね。では次の対戦に・・・対戦者は前へ」

高橋先生が次の試合に移ろいつとします

「あ、は、はいつ。私ですつー。」

やつぱり勝つためには出してきますよね・・・姫路瑞希さん・・・

久保君の話だと、自分とほぼ同じくらいの成績だとか・・・

「藤堂さん。」(1)は僕に・・・

「はい、お願いします。久保君」

こちらは久保君に出てもらいます。先ほど翔子さんは違う人と戦うと言つてましたし・・・

事実上の学年3位争いです

14話（後書き）

自分の召喚獣は高速移動の状態でも

いつ動かして、どこに行く、そこからこんな感じで動かして・・・

と操作をするので田で追えなくても、どこにいるかはわかります

Aクラス対Fクラス、試召戦争

勝負方法、一騎打ち5本勝負

現在、Aクラス2勝、Fクラス1勝

4回戦、久保君対姫路さん

事実上の学年3位争い・・・

「4回戦、科目選択権はどちらが使用しますか?」

高橋先生が声をかけます

「藤堂さん、残り1つだけ、いいかな?」

「はい、構いません」

学力が互角なら、勝率を上げるためにも教科は得意なもので戦つて
欲しいです

「ちよっと待つた! 何を勝手に・・・」

向ひつの陣営が騒ぎます

「待て明久、こつちは次の試合で使わないといけないんだ。ここは
仕方ない・・・姫路に賭けよう」

それを向こうの代表がそう言って静めます・・・まだ何か策がある
ようですね

第5戦で向こうの代表が、翔子さんに誰を当てて、何で戦うのか・・・
・不安はありますけど、ここで勝つたらそれも関係ないです

「じゃあ、僕の得意な現代社会で・・・」

「?」

久保君の言葉に姫路さんは顔を顰めます

「・・・」と思つたけど、折角だし総合科目でお願いします

いや、そのまま得意科目で戦つてくださいよ・・・

「僕にも現学年3位のプライドがあるからね」

うーん・・・そつと言われると・・・

「「サモン」」

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409

VS

Aクラス 久保利光 総合科目 4035

あ、あの・・・負けてますよ、久保君・・・

「ま、マジか?」

「いつの間にこんな実力を？！」

「IJの点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・。」

姫路さんの点数を見て両陣営から驚きの声が上がりります

「ぐつ・ぐつ・姫路さん、どうやってそんなに強くなつたんだ？」

「・・・私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命なみんなのいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

「ああ・・・」Jの人は、私と正反対の人だ・・・

好きな人から逃げて、忘れるために勉強していた私・・・

対してこの人は、好きな人のために、支えになるように勉強を・・・

私はいつか、この人に負けるでしょうね・・・

「好きだから頑張れる、か・・・それでこの点差・・・だが！これは召喚獣勝負、僕にも負けたくない理由がある・・・簡単に負けるつもりは・・・無い！」

久保君は、そう言って召喚獣に武器を構えさせ、姫路さんの召喚獣に突進させていきます。姫路さんは私よりは（色々と）大きいですが小柄で、荒事に向いているというような印象は見受けられません。

確かに強引に攻めれば隙を見せるかもしません……

でも……

「はつー！」

姫路さんの召喚獣が武器の大剣で、久保君の召喚獣を縦に真つ一つにしました……やはり試召戦争を2戦も経験しますから、これくらいでは隙を見せないようですが……それに久保君は男子ですからこのクラス戦のときに最後のほうしか召喚獣を動かしていません。操作技術も姫路さんのほうが上でしきつ

つとまあ、そんなことはいいとして……

「勝者Fクラス」

あわわ……これで2対2です……どうしようか迷いつ……もし翔子さんが負けたら私達の負けです……

「私が負けなかつたら……ああ……もうお終いです……」の教室とも今日で最後なんだ……

「もうつーつかりしなさい！」霧島さんが勝つてくれますって……

「でも……でも……向こうの代表は何か策があるみたいですし……」

「……大丈夫、何があつても私は負けない」

「うう……翔子さん……」

「最終戦、対戦者は前へ」

「・・・はい」

高橋先生の進行に霧島さんが前に出でてきます
向こうからは・・・

「俺の出番だな」

代表が出てきました
うーん・・・やつぱりあの写真の子とそっくりです・・・本人な
かな・・・？

「では選択権の残っているFクラス、教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限
ありだ！」

高橋先生の問い合わせに向こうの代表はそつ答えました

「召喚獣勝負じゃなくてもいいんですか？！しかもテスト範囲の限
定だなんて・・・」

「試召戦争とはテストの点を用いた勝負なら方法は問われない。召
喚獣勝負でもペーパーテストでも、だ・・・もちろんその内容もな
」

私の質問に向こうの代表が聞かれるのがわかつてたように答えます
やられましたね・・・にしても上限の設定とは・・・

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確實じやないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

私達、高校生なら満点で当たり前……」うちのバスを狙うといふことですか……

しかも日本史というピンポイントで……確かに霧島さんは日本史の得点が保健体育を除いた他の教科に比べて少し低いです……それがそのときだけの偶然だつたらいいんですが……

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待つていてください」

高橋先生はそう言って教室から出て行きました
そして一旦翔子さんが私達のところに戻ってきます

「あの、翔子さん……向こうの選択に何か心当たりは……？」

「……私と雄一の、昔のちょっとしたこと……それだけ」

「そうですか……」

やつぱりあの人があの人が写真の人なんですね……

「それでは用意ができましたので、対戦者は視聴覚室へ」

「……行つてくる」

「あ、はい・・・がんばってください」

高橋先生の言葉に翔子さんは教室を出て行きました

『では、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

テストが行われる視聴覚室の様子がAクラスの超大型プラズマディスプレイに映し出されます

他の面々はそれを見ながら待機しています

『不正行為などは即失格になります。いいですね?』

『・・・はい』

『わかつてゐるや』

『では、始めてください』

そして試験が始まりました・・・
ディスプレイに問題が映し出されていきます

『いぬねねねねねねーーー』

突然Fクラスの陣営がまるで勝利を確信したように騒ぎ出す

「あ、ああ・・・向こうの策に翔子さんが嵌つたんですね・・・」

Aクラス代表の藤堂華織はその様子を見て悲しそうに咳く

(無けでしょ)(んですね。。)

「あ、ちよつと?—藤堂さん?—どう行くの?—」

「いえ・・・負けるみたいですので・・・せめて最後に自分の机の掃除をと・・・」

そして田口田口と柴を出し、先ほどまで頭に巻いていたタオルを持って水道に向かおうとする

「まだ決まつたわけじゃないでしょ？！」

「Fクラスの設備つてどんなんなんでしょうね・・・まあ机と椅子があれば勉強はできますけどね・・・あはは・・・」

「ダメだわ・・・聞こえてないわね」

木下優子の言葉も右から左に抜け、藤堂華織は行つてしまつた

「・・・Fクラスは常識外れのバカなのよ？」

そんな木下優子の言葉は彼女に届くことはなく・・・

s i d e · 華織

たつた7日間ですか・・・この机を使ったのは・・・ダメな代表ですね・・・私は・・・

私が出てから、Aクラスは運に見放されたように負けて・・・

「・・・そこが華織の席か？」

「康太・・・?うん・・・そうだよ。今日でお終いだけどね・・・」

自分の席を濡らしたタオルで拭いていると康太が話しかけてきました
7日間しか使ってないし、Aクラスは毎日用務員の方が掃除していく
れているけど・・・最後くらい・・・

「・・・最前列の廊下側から2番目、か・・・なるほど・・・」

「どうしたの？」

康太がなにやら可笑しさをこらえるようにしています

「・・・俺も、Fクラスの教室で全く同じ位置取りだ

「はい?」

それってたまたまじゃ・・・?

「・・・教室に入つて、席をどこにあらかじめ選ぶとき・・・なぜか、そこにしたいと思つた・・・」

「何が言いたいの?」

「・・・まだ華織がこの学園にいるかもわからなかつたのに、だ・・・運命、感じないか?」

「はいはい、やりますね・・・」

そうこういつた言葉を鼻声で言われてもな・・・

「藤堂さんー試合の結果が出ますよーー」

木下さんが私を呼びます

「・・・あとでな・・・楽しみにしてる」

康太がそう言つてFクラスの陣営に戻つていきました・・・楽しみにしてる?何を?

「ホラ藤堂さんー早く早くー」

「あ、はい、今行きます・・・」

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 100点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

「よかつた～～～」

「だから言つたでしょ。まだ決まつたわけじゃないって」

結果に安心した私は思わずへたりこみ、木下さんが声をかけてきました

「Fクラスは常識外れのバカクラスなんだから」

確かに小学生レベルで53点は無いですけど、常識外れは言つさぎ
じや・・・

・・・無いですね

『3対2でAクラスの勝利です』

ディスプレイに映った高橋先生が試召戦争の終結を宣言します

『……雄一、私の勝ち』

『……殺せ』

『いい覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！』

あれ？あの生徒、さつきまでこの教室にいなかつたっけ？他の生徒も……ここから視聴覚室まで数秒で移動したの？

『吉井君、落ち着いて下さい！』

姫路さんまで……体力無さそうに見えて、実は結構あるんですね。・・あとその止めかたは……胸が、ですね？当たつてると思つんですが……

『何が絶対間違える、だ！霧島さん100点じゃないか？！だいたい、雄一の53点ってなんだよ？！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと……』

『翔子の100点は予想外だが、俺の点数は……いかにも俺の全
力だ』

どうやら必ず間違えたと思っていた問題があつたようです

ですがそれなら、あなたは100点を取らないと意味無いのでは…
・?

『このアホがあーつ!』

『アキ、落ち着きなさいーあんただつたら30点も取れないでしょ
うが!』

もう一人の女子生徒が宥めに入っています
いや流石に30点は…

『それについては否定しない!』

取れないの?!

『くつ!2人とも何故止めるんだーこのバカには喉笛を引き裂くと
いう体罰が必要なのに!』

『それって体罰じゃなくて処刑です!』

そりゃ止めるでしょう…ここ学校ですよ?

いや、学校外だつたらいいといつ意味では絶対にないんですけど…
『…といふで、約束』

ん…?

『約束つて何のことですか?対戦前にも言つてしましましたけど…?』

「ああ、それはですね、Aクラスがこの対戦方法を承諾する代わり

に、霧島さんがFクラスに2つ条件を出したんですね

「条件、ですか・・・?」

私は『ディスプレイを見ながら木下さんに聞くと、恥ずかしげに答えました

「一つ、対戦前にこのクラスのこと『藤堂さん』に謝ること、そして二つ・・・」

あああれはそういうことだつたんですね・・・

「・・・負けたクラスは勝つたクラスの『』とを一つ聞くこと

『・・・雄一、私と付き合つて』

木下さんが2つ目の条件を言つと同時に、翔子さんがFクラスの代表に告白しました

「・・・勝つたクラスが負けたクラスに、ですよね?」

「そのはずだつたと思うんですが・・・霧島さんは個人個人のつもりだつたみたいですね」

私の確認の言葉に、木下さんはあれ~?つといった表情で返します

『やつぱつな。お前、まだ諦めてなかつたのか?』

『・・・私は諦めない。ずっと、雄一の事が好き』

がんばって・・・翔子さん・・・

『その話は何度も断つただろ?他の男と付き合ひは無いのか?』

『・・・私には、雄一しかいない。他の人なんて興味ない』

『拒否権は?』

『・・・ない。約束だから。今からデートに行く』

『ぐあつ!放せ!やつぱ!』の約束はなかつたこと・・・』

『ガシツズルズルズル・・・』

翔子さんとFクラスの代表がカメラの範囲から出て行きました・・・まあ、多少強引ですけど・・・放つておけば向こうも翔子さんを好きになるんじゃないかな・・・?男ってそういうものでしょ?ホラよく、自分を好きになってくれた人を好きになるって・・・言いません?

「では私ももう帰りますね。お疲れ様でした」

土日にできなかつた家事を少しずつ消化しないと・・・

「お疲れ様、また明日ね。藤堂さん」

頭の中に何か引っかかつてますが、気にしないで帰りましょう・・・

「 . . . 」

引っかかつてたものがわかつたような気がします . . .

下駄箱で私のところを開けると、1通の手紙が . . .

それにはこう 1文 . . .

『勝者からの命令を囁つから屋上に来い』

数分後 . . .

ガチャ

私は屋上に出る扉を開けて、外に出ます
といふかなんで開いてるのでしきつ . . . ? 屋上つて普通閉鎖され
てません?

「 . . . 遅い」

「代表は色々やる」とあるんですねーだ

康太の文句に私は嫌味で返す . . . にしても相変わらず康太は鼻声
だね . . .

「それで？命令は何？」

「……その前に確認だ。色々とな……」

「確認？」

「……まず最初に、これの意味を教える」

そう言って私に見せてくるのは……手紙？

「なにそれ？」

「……お前が最後に俺の下駄箱に入れたもの」

「ああ……あれか……まだ持つてたの？わざわざ持てねばいいの……」

「……」に書かれてる。『たよなら』とは転校することに対する

ことか？それとも……

「全部、だよ……転校することも、恋人関係の終わりも……」

なに？そんなことずっと考へてたの？

「わづか……なら俺がお前……華織にする勝者から命令は……

・

「その前にあれはそつちの代表と翔子さんとの約束でしょ？私達には当てはまらないでしょ？」

「それで？命令は何？」

とりあえず言い訳をして抵抗をしてみます

私もさつきそのこと知ったんだし・・・無効にしてほしいんです・・・

・

「・・・関係ないな・・・華織・・・」

「なに?」

「・・・またお前の写真を撮らせてくれ・・・」

「一」

その言葉は・・・つまり・・・

「また恋人関係に戻るうつてこと?」

「・・・察しがよくなつたな・・・」

「そりや、半年でも康太の彼女だつたからね」

その言葉は素直に嬉しい・・・けど・・・

「『めんなさい・・・やつぱりその体質を作つた本人が傍にいていいつて思えないの・・・』

「・・・俺は別に構わないと言つたはずだ・・・」

「康太がよくてもね・・・私が認めたくない・・・康太を不幸にしてる存在が、康太の傍にいることを・・・それに康太が危険になれ

ば、康太の家族が心配するし・・・

「・・・」

康太が黙り込んだ・・・やつぱり家族に心配をされてるって自覚はあるんだ・・・

「だから・・・恋人には、戻れない・・・」

「・・・わかった」

康太が了承した・・・わかつてたけど・・・やつぱりキツイね・・・自分勝手だと思つけど、もつと食い下がつて欲しかった・・・

「じゃあ・・・帰るね・・・」

私は校舎内に入ろうと、出てきた扉へと戻り、扉を開けようとする

・・・これで・・・完全に終わつたね・・・

思いつきり泣きたい衝動に駆られます、それをグッと抑えつける

・・そもそも私が悪いんですから・・・泣いていいはずが無い・・・

「・・・待て」

え・・・?

私が振り返ると康太が近づいてきていて・・・

そして・・・

「？！」

強引に唇を奪われました・・・康太の唇から血の味が・・・やつぱり鼻血出てるんだ・・・

つて、ちよつと？―わざ納得したんじやないの？！

「・・・悪いが俺には華織以外の女は考えられない」

「あのねえ・・・」

「・・・要はこの体質が治ればいいんだり？じやあそれまで待つてろ・・・それが勝者からの命令だ」

もつつ！何でこの人はこつも我慢なんでしょう・・・

まあいいでしょう・・・待つてあげますよーずつと・・・ずつとつつつとね！―

うん・・・まあなんだ・・・この作品のテーマって復縁なんだ・・・
だからありえないとかは無にしてくれ・・・

4月も半ばのとある休日・・・

「う、～～ん・・・」

「あ・・・38 つてところかね・・・新しい環境に慣れるので疲れてるところを風邪にやられたようだね」

私は熱を出して寝込んでいます

今、お婆ちゃんが私のおでこに手を当てて大まかに熱を測つていました

昔は、家族に看病してもらえないから、体調には結構氣を使ってたんですけど・・・

こっちに来てから編入準備とか4日間連続試験とか、編入後は代表になつたとか、試合戦争とか、康太のこととか・・・あれ?編入後は最初の以外、康太関係じやない?試合戦争とかFクラスに仕向かられたCクラスとFクラスとだし・・・Fクラスは康太のいるクラスだし・・・

「アタシも仕事があるし・・・とりあえず学園の保健室で寝かしつければいいかね・・・」(じやあれだからね・・・)

「あれってなんですか・・・?」

「アンタがゆつくり休まないってことだよ。家事に勉強に・・・確かに助かるがね、そんな調子でされてもこっちは不安なんだよ」

そんなこんなで仕方なく学園のベッドで療養する」とになりました。
・

学園の保健室

「じゃあ夕方まで看にこれないので、お願ひするよ」

「はい、わかりました」

お婆ちゃんは養護の先生が話す声が聞こえる・・・

「じゅあゆつくつ休むんだよ」

「はい・・・」

そしてお婆ちゃんは私に一言顔をかけて保健室から出て行きました

ああ・・・なんかこんな風に誰かに心配されるのも、凄い久しぶり
な気がある・・・

お父ちゃんと暮らしていたときは、ちゃんと体調管理できたから風邪
とか引かなかつたし・・・怪我に関しては暮らし始めてすぐの頃に
家事で筋肉痛とかしてたけど・・・怪我じゃなかつたね

それより前は、病気にならうが怪我をしようが病院には連れてって

はぐれますが、心配はしてくれませんでしたし・・・しかもそれも小学生まで、中学からは1人で病院も行かされましたし・・・

医者や看護士が話好きだつたり親切な人だつたりすると、絶対1人で来たことを気にして、親御さんは?っと聞いてきて・・・それが気まずくて、体調管理をきつちりするようになつたり、とにかく大人しくして怪我をしないように気をつけたり・・・

たぶん、最後に心配されたのは、あの夜の1件があつて、次の日の康太の母さんから・・・

あまり人に心配されるのは慣れてないので、さっさと治してしまおう

私は頭の中を空っぽにし、目を瞑つて眠りにつくのを待つた

side:康太

休日、俺は暇つぶしに、学園内に仕掛けたある盗聴器の音声を聞く。・・部活で来ている生徒のあれやこれや・・・とにかく情報を集めておく。俺がいるFクラスはAクラスに負けたから今は試合戦争ができないが、いい情報が入れば、雄二辺りが買つてくれるからな・・

『じゃあゆつくり休むんだよ』

『はい・・・』

保健室に仕掛けたある盗聴器から、この学園に住むといわれる、学園長といつ名の妖怪ババアと・・・あの1件以来、もう3年近くも罪悪感を背負わせてしまつてゐる女、華織の声が・・・

華織がいなかつたこの3年・・・俺は1口だつて華織のことを考えなかつた日はない・・・

ホントは戻つてきたことを知つて、すぐに会いに行きたかつた・・・だが、会つたところで華織は間違ひなく逃げる・・・だから、俺は雄一に代表を討つ役目をさせろと言つて・・・でもまさかあんなに苦しんでいたとは思わなかつた・・・

あのことは・・・あんな方法に頼らないと華織の寂しさを消すことができなかつた俺が悪いはずなのに・・・この体質も、その罰だと思つた・・・

さてそんなことより今の華織の声・・・もしかして調子が悪いのか・・?

妖怪ババアとの関係も気になるし・・・

現地にて本人の体調を看ながらの聞き取り調査が必要、だな・・・

「うへへん・・・

よく寝た、よくな気がします・・・今何時でしよう・・・あれ?この部屋時計無いですね・・・ならいいや・・・お婆ちゃんが迎えにくるまで寝てよつ・・・

ガラツ

ん?誰か入ってきた・・・?養護の先生か、部活で怪我したり体調を崩した人かな・・・?まあ今の私には関係ないです・・・

さでもう一眠り・・・

「・・・ちょうど先生もいないし、運がいいな

なんで康太が来るのさ?

s.i.d.e.・

「・・・ちょうど先生もいないし、運がいいな

(鼻に詰め物もしたし、これでゆっくり華織の寝顔が・・・おつとそう思つただけで鼻血が・・・)

土屋康太はそう呟くと、鼻の頭の少し上辺りをつまむよつて押された

そして病人が横になつて休んで経過を見るためのベッドが並んでいる保健室の奥の部屋に入る

(え？ ちょっと？ なんでひっかくるわけ？！)

その行動に藤堂華織は寝たふりをしながら焦る

(・・・いた)

今日は休日なので保健室のベッドの利用は、ほぼ無いと言つていい。なので藤堂華織はドアから1番近いベッドで寝ていた。よつてすぐに土屋康太に見つかってしまい・・・

(うわあ？！ どうしよう？！ 今起きた風に迎えればいいの？ それとも寝てやり過ぎ？ どうちがいいの？！)

藤堂華織の焦りはさらに加速する

目当ての人を見つけた土屋康太は当然その人に近づいていき・・・

(ん・・・？ これ寝たふりじゃね？ 下手くそだな・・・)

藤堂華織の寝たふりに気付いた。そんなことも知らずに彼女は・・・

(あわわ、どうじょう・・・)

ただただ焦つていた・・・

(ちょっとからかつてみるか・・・)

ふと土屋康太の悪戯心に火がつく

ふこよ・・・

土屋康太が藤堂華織の頬を指で突いた

(チャンス、これで起きれば・・・)

「・・・ぐつすり寝てるな・・・これは簡単には起きないだろ?な・・・」

(道が断たれた?!)

(寝てるんだから俺の言葉なんて無視して今日覚めた風を装えばいいものを・・・なら・・・)

「・・・キスしても、起きないだろ?な・・・」

(ちょっと?ー「ララー?」というか本気なの?ー)

土屋康太が顔を藤堂華織の顔に寄せていく・・・彼女が薄く目を開けて見たものは・・・

(わわわ・・・本当にする気なんだ・・・)

段々と近づいてくる土屋康太の顔、そして唇だった・・・

わわっ・・・本当にする気なんだ・・・

私が薄く目を開けて見ると、康太の顔が近づいていて・・・でも私は寝ているんだから抵抗できないし・・・起きればいいって？

ここで起きるのは不自然すぎるでしょう・・・

ああ・・・あと数センチ・・・

ガラツ

「・・・おっと・・・先生が戻ってきたな・・・」

保健室の戸が開く音がして康太の顔が離れていき・・・あ～ビックリした・・・

でも少し残念な気も・・・つていやいや、何を考えてるんでしょう
か私は・・・これじゃキスしたかつたって思つてたみたいじゃない
ですか・・・風邪がうつったらいけませんし、ダメですよね・・・
風邪引いてなくても私と康太は今は恋人関係じゃないんですからダメですけど・・・

康太は1番奥のベッドに隠れたみたいですね・・・

ガチャ

「藤堂さんの様子は、と・・・」

養護の先生が私の様子を見に近づいてきます

もつ起きるならここしかないね・・・先生が戻つたら、また起きるチャンスはないだうし・・・

「うへへん・・・」

「あら、起こしちゃったかしら?」「めんなさいね」

「い、いえ・・・えつと・・・今何時くらいですか?」

起こしたことを謝つてくる先生に申し訳なさを感じつつ、すぐ違う話を振ります

「午後2時くらいね。お皿はまだしまじょうか・・・?」

「すいません。食欲が・・・」

「ごめんなさい嘘です・・・でもあまりここに長居されると、康太の存在がバレそうで・・・」

「そう?でも夜は何かお腹に入れるのよ?」

「はい・・・」

「私はまたちょっと保健室を離れるから、何かあつたらこれを押してね」

養護の先生がナースコールっぽいボタンを渡します・・・なんであるの?ここ保健室だよね?職員室に繋がってるのかな?・・・?

「・・・聞こえてる？」

「あ、はい、大丈夫です・・・」

「朝のときより少し顔が赤い気がするけど・・・熱が上がったのかしら？ちゃんと布団かけて暖かくして休んでてくださいね」

それは間違いなく康太のせいです・・・身体自体は寝てたから少し楽になりました

「わかりました」

バタン

私が返事をして養護の先生が出て行きました

ガラツ

保健室からも出たようですね・・・

「はあ～・・・」

「クスクス・・・」

私がホツと一息つくと、康太の笑い声が奥のベッドから聞こえてきました

「康太・・・笑いすぎ」

「・・・なぜバレた

「頭大丈夫?」

「・・・その言葉はそのまま華織に返す・・・お前寝たふり下手す
ぎ・・・プツ」

噴出す康太・・・凄いムカつく・・・つて

「はあっ?一気付いてたの?一じゃああれば・・・」

「・・・あまりにも下手だから、ちよつとからかいたくなつて」

「じゃあキスも・・・」

「・・・からかいついでにできたらへういか・・・」

殴つていいかな・・・?

「それで?何の用なのかな?というかなんで私がここで寝てる」と
を知つてたのかな?」

「・・・学校中にこれがあるからな・・・」

「さつまつて見せるのは小さな機械・・・

「なにそれ?」

「・・・盗聴器」

犯罪じゃない・・・

「お婆ちゃんに言つておかないと・・・」

「・・・それだ。俺の用件」

それってどれや?」

「・・・学園長と華織の、関係」

「関係つて・・・保護者と被保護者だけ?大叔母と姪孫でもあるけど・・・」

最初はカヲルさんつて呼んでたけど、婆さんでも婆ちゃんでも好きに呼びなつて言われたから、お婆ちゃんつて私は呼ぶよくなりました

「・・・まさかあの妖怪ババアと華織がな・・・」

「妖怪ババア?」

人のお婆ちゃんをずいぶん酷いあだ名で呼ぶんだね・・・

「・・・ピッタリだろ?」

「じゃあ私は妖怪の義娘なんだね・・・なら康太とも付き合えないな・・・」

「ちよつとあだ名付けた奴処刑してくる」

私がからかうと康太がやつぱり部屋から出て行った

「ほこせー、やつこひねふざけはーいから・・・つでー他に聞きた
い」とは?」

「・・・とりあえず、この町から出てた聞の」と

「やつだね・・・」

そしてやつと康太にこの町を離れていた聞のと話す・・・

向こうでの暮らし・・・お父さんと2人で普通に暮らししてたとか、
家事もしてたから料理が上手くなつたとか、暇なときばずっと勉強
してたからこんな成績になつたとか・・・

そして、いりちに戻つてくんことなつた・・・お父さんの死、と
か・・・その後お婆ちゃんに引き取られるまでのこと・・・とりあ
えず、全部話した・・・昔も康太には隠し事しなかつたしね

「・・・こんな感じかな・・・」

「・・・やつか・・・」

「だから、今の私には家族といえるのはお婆ちゃんだけ・・・」

「・・・」

そこで黙つちやうんだ・・・違つだろ、俺だつて家族じゃないのか・
・・?つとか言って欲しかつたんだけどな・・・つて我が慢すぎる
よね・・・

やつぱり康太にとつて私は、恋人にしたい人であつて、家族にしたい人じやないのかな・・・?

「ゴメン康太・・・ちょっと起きてるの辛くなつてきたから、寝るね・・・」

「・・・ああ、悪い。じゃあ俺はそろそろ帰るか・・・」

私は康太に背を向けるように横を向き、顔を布団に入れてそう言い、康太がそう返してきます

康太の歩く音が聞こえて・・・ドアを開けて出ていくと思つたら・・・

「・・・寝るんならちゃんと布団をかけろよ」

チユ

「ひやつ?」

そつ言つて布団から出でていた首の後ろにキスされました・・・この変態め・・・

「・・・じゃあな、ゆつくり休めよ」

康太が来てなかつたら、もつとゆつくりできつたよ・・・

「・・・そついえば」

ん・・・?

「・・・・父さんと母さんに華織のこと教えたら嬉しそうにしてたな・・・それで、娘なんだからいつでも帰ってきてなさい、だつてさ・・・」

「

康太の両親は、やつぱり優しいな・・・逃げた」とを怒つてると思つたけど・・・

「・・・まあ俺はまだ家族だとは思つてないがな・・・だつて」

康太が付け足すようにそつ言つて・・・

「・・・家族だと結婚できないからな。家族なんて結婚してからなればいいし・・・」

あつけらかんとそつ言つました

「はああああ?・!なにそれ?・!プロポーズなの?・!なんでこんなとこで言つわけ?・!」

私はガバッと起き上がりつて康太に文句を言います

もつと場所とか雰囲気とか考えてよ!

「・・・いや、もつじつせ確定事項だし、場所なんてじつでもいいかと・・・」

「よくないよ!だいたい確定もしてないよ!康太のその体質が・・・うつ?・!」

クラツ・・・

急に起き上がったからか、私の身体がふらつく・・・

ギュツ・・・

「・・・大丈夫か？」

それを康太に両肩を掴まれて支えられました

「う、うん・・・大丈夫、ちょっとふらついただけ・・・」

そう言つて見上げると康太の顔があつて・・・

「・・・」

しばらく見詰め合つて・・・

「ダメだからね？」

「・・・何も言つてない」

・ こんな状況で、変態の康太がすることといったら一つでしょうに・・・

「風邪がうつるからさつとと帰れ・・・」

いつまでたつても肩から手を離さない康太に照れ隠しに命令形で言つ

「・・・知らないのか？バカは・・・」

ちよつと顔近づけてこないで！それと自分のこととをバカつて・・・

「・・・風邪を引かないんだぜ」

そしてまた強引に唇を奪われました・・・また血の味が・・・

なんなの？付き合つてた頃より積極的じゃない？

風邪うつつかや えばいいんだ・・・

そしたら康太の両親に会いに行けるしね・・・

ムツツリーーがもはやタダの変態（笑）

いや、変態といつ名の紳士か・・・

5月・・・「ゴールデンウィークも終わり、新入生にとつては最初の行事、学園祭・・・あ、私にとつてもでしたね・・・しかし、体育祭を春にする学校はよく聞きますが、学園祭を春にするつてあまり聞かないような・・・

とにかく今日から、生徒は学園祭の準備期間に入ります・・・一部の先生方は4月の終わり頃からやつてますけど・・・お婆ちゃんは試験召喚システムに関する新技術を発表するとかで4月の初め頃からがんばっていたみたいですね・・・

「えっと・・・それではAクラスの学園祭の出し物を決めたいのですが・・・何か案はありますか？」

代表の私の進行で話し合いを始めますが・・・

『・・・』

沈黙・・・で、ですよね・・・

Aクラスの生徒達は勉強中心の学生生活で、学園祭もそこまでやる気になりませんよね・・・勉強時間潰れてしましますし・・・

まともな意見も出さずに数時間後・・・午後の授業時間

「えっと・・・試験召喚システムに関する適切な展示で済ませたらダメ、かしら？」

「それは1年の生徒がするみたいですし・・・」

「木下さんの案に私はそれはけよっと・・・と意見する
飲食系？」

「じゃあ・・・お化け屋敷とかのアトラクション系か、喫茶店とか

「工藤さんに意見に私は同意しつつも・・・」

「でもAクラスって、他のクラスからは勉強ばっかりでつまらない、
とこう印象を持たれていますので、普通にやつてもお客様は来ませ
んし・・・」

「そう不安を口にする

「じゃあどうするんですか？大掛かりにやるとしても、私達はそん
な経験は無いですよ？」

「ですよね・・・勉強をがんばったからこそ、Aクラスに入れたわけ
で・・・そんな皆さんにウェイター やウェイトレスのアルバイト経
験を求めたりするのは・・・私もありませんし・・・
つとものとき・・・」

「・・・メイド喫茶」

『は・・・?』

翔子さんがそう言い、教室中がポカンとします

「メイド喫茶・・・ですか?理由を聞いてもいいですか?」

それはまた凄い案を出してきましたね、翔子さん・・・

「・・・連休中に雄一が私の家に来て、そのときに雄一が私の家に勤めているメイドに田がいて・・・浮氣したからお仕置きした」

メイドじゃなくて私を見て欲しいの、ところが」とですね
うーん・・・たぶんですが、それはメイドがいることに驚いていた
だけじゃないですか?

つていうか翔子さんの家にはメイドがいるんですね・・・やっぱり
あの豪邸の令嬢さんでほぼ確定でしょうかね・・・

「メイド喫茶・・・確かにそれなら今までのAクラスのイメージを
壊すことができますが・・・衣装の用意が・・・」

「それは大丈夫じゃないかな?だってAクラスだし・・・」

「藤さんまさか学園に用意してもらひ気じゃ・・・?
教材じゃないですし、用意はしてくれないでしょう・・・

「・・・学園に用意してもらえないでも私の家にそれなりの数がも
つある」

いつたい翔子さんの家には何人メイドがいるのでしょうか?・・・?

「あの、ちょっとよろしくでしょうか、藤堂さん？」

「はい、久保君、どうぞ」

おっと・・・勝手に話を進めてはいけなかつたですね・・・

「メイド喫茶なら男子は裏方中心になるのじょうか？」

あれ？もうメイド喫茶は確定なのですか？

「そうですね・・・そななるかもせんね。でも教室の設備を使えば、裏方の仕事は少ないかもせんね」

飲み物はドリンクバーで、食べ物は冷蔵庫の中身として申請すれば色々仕入れられますし・・・

「・・・執事服も少ないけど用意できる」

「あ、そなんですか・・・えつと、メイド喫茶でだいぶ話が進んでしまつていますが・・・反対の人は遠慮なく言つてくださいね」

一応反対意見も聞いておかないと・・・

「これって、女子のメイド姿がただで見れて役得じゃないか？」

「ああ・・・反対する理由は無いな・・・」

男子生徒に反対意見はない模様・・・女子生徒の視線が冷たくなつてつてますけど・・・

「まあ、楽しそうだし……いいかな」

「たまにはパートとしないとね。勉強ばっかりじゃつまんないもんね」

女子も反対はいない模様……よかつた

「では△クラスの出し物はメイド喫茶で決定でいいですか？」

『はーい』

私の確認に皆さんが了承の意を表します
にしてもメイド喫茶ですか……メイドの作法とかきちんとしない
とコスプレ喫茶になっちゃいますよね……

「とりあえず、衣装は申請してみますが、用意してもらえたとしても人数分は難しいかもしません。なので足りない分は翔子さんに
お願ひしてもいいですか？」

「……わかった。今度もつて来る」

「あと、メイドの作法に関して誰か指導ができる人とか……」

「あ、それならアタシが……」

「木下さん詳しいんですか？」

意外ですね……

「あ、えっと・・・おおお弟が演劇部だからっー！」

なるほど、そういうことですか・・・確かに期待の新人とか・・・でもそれならそんな焦ることも無いのに・・・

「では何をするかは決まりましたし、今日の残りは自習にして、明日からはメニューを考えたり、役割分担に入つていきましょ」

自習時間が減ると学園祭のやる気にも影響が出ますからね

数日後・・・

役割分担も決まり、メニューもだいたいこんな感じに、と決定していき、今日はホールに出る生徒が衣装合わせや作法の練習をしようと・・・

『2年Aクラスの藤堂華織さん、学園長室まで来てください。繰り返します・・・』

私に呼び出しの放送が掛かりました・・・

学園長室・・・

コンコン

「藤堂です」

「入りな」

ガチャ

お婆ちゃんとの関係は秘密にしてるつもりはないのですが、一応学園内では学園長と生徒ということで、話し方には気をつけています

「ネで編入したとか、学園長の権力使ってAクラスに入ったとか、変な噂を流されかねないですしね

まあ・・・

「失礼します」

「すまないね呼び出して、華織も代表として忙しかったと思うが、ちょっと問題が発生してね・・・」

お婆ちゃんは全く気にしてないけどね

「問題ですか・・・」

「ああ・・・つでそれのフォローのためにちょっと協力して欲しいんだよ」

「わかりました・・・それで私は何をすればいいんでしょうか?」

「2日目に召喚大会の決勝があつてね・・・そのあとこれのデモンストレーションを行うんだが・・・」

そう言ってお婆ちゃんが出したのが、召喚大会で優勝賞品として出される予定の白金の腕輪・・・

「実はこれには欠陥があつてね・・・点数がある水準を越えると暴走するんだ・・・」

「暴走、ですか・・・」

危ない話ですね・・・

「それが最近判明して、修理の日途が立つてない・・・」

「では賞品から除外すれば・・・」

「そういうわけにもいかないんだよ・・・スポンサーとかに見ても
らわないと開発援助がなくなってしまうからね」

大人の事情つてやつですね・・・

「はあ～どこかに召喚大会で優勝できて、それでいてバカな生徒は
いないもんかね・・・」

「私は間違いなく使えないですよね・・・」

一応学年主席ですし・・・

「ああそりだね・・・華織が使つたら間違いなく暴走するね・・・
だから華織にはもしものとき用に、別の技術のデモンストレーションをして欲しいのさ」

「別の技術ですか?」

「そう・・・名付けて、動物型召喚獣つてところかね」

動物型つて今も人型じゃないですか・・・人も動物ですよ?」

「人以外の動物の形をした召喚獣ですか・・・何の動物をモデルに
するんですか?」

「こういのはインパクトが大事だからね。スポンサー受けのよさそういう狼辺りでこうと考へているさね」

「でも人間以外だと操作が難しそうですよね・・・」

身体の構造が違うと動作のイメージが浮かびにくいですし・・・

「だからこれから学園祭での公開まで、華織に練習をして欲しいんだよ。放課後に1・2時間くらい構わないかい?」

「はい、大丈夫だと思います」

ちょっと準備を急げば間に合いますね

「あと、もう1人くらい協力者を見繕つておいてくれないかい、召喚大会はペアだから『モンストレーション』のときに優勝したペアと対戦するかもしれないし、ダメなときは華織とその生徒で対戦してもらうからね・・・もちろん口が堅い生徒で頼むよ」

うーん・・・誰かこういのに強い人で、秘密を守ってくれる人・・・いるかな・・・?

「失礼しました」

「よろしく頼むよ」

ガチャ・・・バタン

お婆ちゃんとの話も終わり、学園長室から出てAクラスの教室に戻る・・・

誰かパートナーを探さないと・・・

学園長室は1階で、教室は3階なので、階段を上がっていると・・・

「・・・ちょ？！華織？！（ブシャアアアア）」

「え？ わつ？！康太？！つてちょっと？！」

康太が上から降りてきていて、私を見て鼻血を出して倒れました
やつぱり詰め物が無いと噴出しちゃうんだ・・・

私はポケットからティッシュを出して康太の鼻に無理矢理詰めた・・・
・処置としては正しくないんだけど、止まる前に外して正しい処置
をすれば大丈夫かな・・・

「・・・スマン」

「いいよ・・・つていうか悪いのは私だからね・・・保健室行こう
か」

「・・・ああ」

保健室・・・

「では先生、あとお願ひしますね」

康太を保健室に連れてきて、養護の先生に処置をお願いし、私は保健室を出ようとすると・・・私がいたら鼻血は止まらないから・・・

「その格好で戻るの?」

養護の先生は引きつった表情で私にそつと聞きました

「仕方ないですよ、制服の代えありませんし、体育も学祭準備期間で無いから体操着も持ってきてませんし・・・髪に付いたのは教室に帰つてからお絞りでも使って落とそつかと・・・」

私の格好・・・康太の鼻血が制服や髪に付いた状態
まあ上で鼻血を噴いたから下にいた私に掛かるのは仕方がないこと
で・・・

「流石にそれは養護教諭として許可はできないわね・・・他の生徒
が気分を悪くするわ」

「でも・・・」

「あなた確かAクラスよね?制服は申請すれば支給されるし、クリーニングもしてもらえるわ。とりあえず全部クリーニングに出します。髪はそれでいいけど教室じゃなく、ここで落としていきなさい」

制服が支給されるって・・・確かに学生に必要なものだからわかりますが、Aクラスだからっていうのがまた・・・凄い優遇・・・

「でも私のサイズってあらかじめ用意されてるものなんでしょうか・・?」

高校生で身長140前半の私は想定の範囲外じゃないですか?

「ちょっと制服の予備を見てきます。その間にあなたは髪の血を落としておきなさい

「はい・・・

養護の先生が保健室から出て行きました

そして残された私と康太・・・

なんか凄い気まずいんですけど・・・

私は養護の先生が用意してくれていたタオルを濡らして髪に付いた血を落とす

康太は康太で自分で鼻血の処置をしていて・・・

「 」

お互い一言も話さない・・・気まずい・・・

やつぱり康太の鼻血体质をつくった私が康太と一緒にいるのは・・・

でも保健室から出たら養護の先生に怒られそつだし・・・

「・・・」の程度はいつものことだ。気にするな

「いつも」とつて・・・

康太は処置が終わったのか私に気を使って話しかけてきます

「・・・それより、さっきの放送。なんかあつたか?」

「え? うーん・・・」

康太が話題を変えてきます・・・

あのことは康太に話していいのだろうか・・・?

「康太つてさ・・・口堅い?」

「・・・?・・・ああ・・・色々頼まれ」ともされるからな

うーん・・・康太を巻き込んでいいのかな・・・?

「頼まれごと?どうせ違法スレスレなことなんでしょう?」

この前に盗聴みたいに・・・ってあればスレスレじゃなくて思いつきり違法か・・・私がお婆ちゃんに言つたら間違いなく終わりだもんね・・・言わないけど

「・・・(シラー)」

康太が目を逸らしました

はあ・・・夫が犯罪者つて勘弁して欲しいんだけどな・・・

「・・・それより、何か困つてるのか

あ、逃げた・・・

口堅いみたいだし、康太に頼んでみよつかな・・・Aクラスの皆は勉強したいだらうから頼めないし・・・

「あのね・・・今日から学園祭まで、毎日放課後に1・2時間くらい時間をくれない?」

「・・・別にいいが・・・なにをすればいい?」

「それは放課後になればわかるよ・・・」

私の口から説明するよりお婆ちゃんの口からのほうがいいと思うし、私には言つてもいいけど、康太に聞かれたらまずい内容もあるかもしないし・・・

「・・・まあいいか・・・とりあえず」

康太が立ち上がりつて私に近づいてきて・・・

「何?」

「・・・俺への頼み」とには報酬が必要なんだ

随分いやらしい人になつたね・・・2つの意味で

「報酬? お金とかあんまり無いんだけど・・・」

「・・・そつか、なら・・・」

康太が私の左腕を掴んで・・・

「は・・・つ?！」

またキスされた・・・ホント殴るか股間蹴り上げてやりたい・・・でも、康太の口から血の味がしてそんな気は失せてしまう・・・

「・・・前払い」

「あつそ・・・なら受けてくれるってことでいいんだね?」

「・・・元より断る気なんかない・・・華織の頼みだからな」

「いはいそうですか・・・康太は私がいなかつた3年で何があつたのかな・・・？」

「彼女だつたときより私を大事にしてくれてるような気がする・・・」

ガラッ

「藤堂さん」めんなさいね、ワンサイズ上のしかなかつたわ・・・つて、あなた達は何してるの？」

保健室の戸が開いて養護の先生が戻つてきました・・・
私達の今の状況は・・・キスはしてないけど、ほぼ抱きつかれてる
ような感じで・・・

「えつと・・・髪に付いた血を落とすのを手伝つてくれるみたいな
んですが悪いので断つて・・・タオルの奪い合いを・・・」

「・・・（口ク）」

「私と康太が離れながら言い訳をします

「ホントに？」

「ホントですっ！」

「養護の先生がジト目で見てきます

「まあいいわ・・・それより早く落としちゃこなさい。あとひよつ

とで午後の授業時間も終わるわ

「はい」

そして髪をきれいにして、先生が持つてきてくれたワンサイズ上の制服に着替えて・・・

「うーん・・・やっぱ袖が長いな・・・」

手のひらがほぼ袖から出ない・・・

「・・・プツ」

康太・・・そんな隠してるつもりだらうけど、肩揺れてて笑ってるのバレバレ・・・

「今日明日くらいの辛抱よ。さ、早く教室に戻りなさい」

私と康太が保健室から追い出されました

「つとこつことで、この人を協力者に・・・」

お婆ちゃんに康太を紹介する・・・協力者として、ね・・・

「ふーん・・・アンタ、クラスと名前は?」

お婆ちゃんが康太を観察するように見て、名前を聞きました

「・・・土屋康太、2年Fクラス」

「華織、こいつにはどじこまで話したんだい?」

「まだほんど何も・・・どじこまで話していいかわからなかつたので・・・」

「そつかい、なら簡単に・・・召喚大会の決勝後にある新技術お披露の手伝いをして欲しい。やるかい?」

「うわ・・・凄いざつくり・・・

「・・・華織の頼みだからやる」

「アンタ・・・うちのどじんな関係だい?」

「・・・婚約しげフツ」

康太がふざけて答えようとし、私がお腹を肘で殴つて止めます
もう一我慢してたのにそんなこと言つから手が出ちやつたじゃない・

「昔の彼氏ですか」

「やうかい・・・まあいこさね・・・面識あつてここに連れてくるならそれなりに信用できるってことさね・・・」

私が訂正して言つて、お婆ちゃんはちょっとニヤけながら言いました
え？いいの？そりゃ確かに信用はしてるけど・・・

「じゃあ明日から練習できるように設定してから授業終わったら
ここに来な・・・くれぐれも内密に頼むよ」

それからまた数日・・・学園祭の準備もかなり進み・・・
そんなある日・・・

放課後・・・今日も動物型召喚獣の練習をしています
白い毛並みのなかなかリアルな狼の召喚獣で、種類で言えばホツキ
ヨクオオカミを基にしたのでしょう

最初は操作に結構混乱したけど、今は慣れてきてだいぶ自由に動か
せるようになつてきました

「ねえ？康太のクラスって学祭何やるの？」

「・・・中華喫茶」

「ふーん・・・」

操作の練習をしながら康太と話してする・・・操作だけでいっぱい
いっぱいになるようだと対戦なんてできませんからね・・・

「今日さ・・・康太達野球してたよね？」

「・・・人違い」

「Fクラスの人結構いたのに？」

「・・・クラス違い」

この時期に野球して西村先生に怒られたるクラスなんて康太のところだけでしょう・・・

ｐｒｒ・・・ｐｒｒ、ｐ！

「はい、もしもし・・・ああわかつた、今から戻る」

練習を見ていたお婆ちゃんに呼び出しの電話が・・・ちなみにこのときは空き教室です

私達のしていることはセミソリューションの高いシークレットなので、窓も戸も閉め切り、カーテンも閉めてやります・・・

暑い・・・空き教室だからエアコンの性能が△クラスより格段に悪くて・・・大事じゃないけどもう一回、暑い・・・

「すまないね、ちょっと出でるよ・・・教頭が用があるわ」だ・・・
・召喚フィールドはそのままにしてくからJのまま練習しついでくれ

れ

「はい」

「・・・(ノクン)」

やつれて、お婆ちゃんが部屋から出で行きました

ん? じゃあ誰がフィールドを維持するのかって? 召喚フィールドは最初から機械制御で展開していますよ

機械制御とは、教師の代わりに機械に召喚フィールドを承認させて

展開させる方法。これを小型化し、腕輪型にしたものが、白金の腕輪の代理召喚型です。ちなみにもう一つ、同時召喚型といって召喚獣を2体同時に召喚できるタイプもあり、それも召喚大会の賞品として出されています

そして5月の半ばなのに、エアコンが追いつかないくらい部屋を空氣を暖めている原因もある・・・

この装置、発熱が半端無いんです・・・持ち運びに不便になるから水冷式にできないらしく、扇風機でがんばって冷やしますが・・・白金の腕輪のほうは、この問題も解決できるみたいですね・・・

それでもなぜこれを使わないといけないのか・・・それは動物型召喚獣の設定がこれに入つてそうで・・・だから今のところこの装置に召喚フィールドを展開させないと動物型召喚獣は召喚できない・・・本番までには腕輪型にして通常の召喚フィールドで人型と切り替え可能で呼べるようにするらしいです

それは置いといて・・・この暑い教室内、窓も開けれず・・・なら当然薄着になるしかなくて・・・私と康太はブレザーを脱いで練習をしています・・・これでもまだ暑いけど・・・

「・・・(ジー)」

「何、康太?」

2人きりになり、康太が私に視線を向けてきて・・・

「・・・透けてる」

「は・・・何が？」

「・・・ブリ」

「なつ？！変態つ！」

私は腕で胸の辺りを隠す

「・・・昔は着ける必要が無いくらいだったのにな・・・」

「殴るよっ！」これでも少しほは成長したんだから・・・

「・・・俺のおかげで？」

「うう・・・」

それを言われると何も言えない・・・といふが私が気にしてゐるのわかつてそれを言ひつか・・・

「・・・スマン」

「いいよ・・・私が悪かったんだし・・・」

康太も流石に悪いと思つたのか謝つてきました

「もついいや、好きなだけ見ればいいよ・・・よく考えたら恥ずかしくなかつたし、だつて康太には全部見せたんだからね」

そつ言つて召喚獣のほうを向く

はあ・・・私はバカだね・・・昔の傷を擦り返して・・・

暗い気持ちになりながらも私は召喚獣の操作練習に集中しようとしつゝ、しかしその集中も2秒後に吹き飛んだ・・・

「・・・そんなに悩むな。あれは拒否しなかつた俺も悪いんだ」

康太が後ろから抱きしめてきた・・・なんでこんなに優しいのさ? 今だつて鼻血出しつゝ苦しんでるくせに・・・

私の目の前では康太の召喚獣が私の召喚獣に寄り添つていて・・・なんか番みたいで・・・

そんな感じで数分・・・流石に恥ずかしくなつたので離れて、操作の練習を再開しました

しかし・・・

「・・・」

沈黙・・・はあ・・・気まずいぞ・・・

そのとおり・・・

ガラツ

「はあ・・・面倒なことになつてきましたね・・・」

お婆ちゃんが戻つてきていきなりそう言いました

「華織に土屋、今やつたる」とは誰にも言つてないだりつね?」

「はこ、誰にも」

「・・・(ノクン)」

「チツ・・・・じゅあどりから洩れたんだりつね・・・」

お嬢ちゃんは凄くイライラしてゐる様子で・・・

「情報が洩れてるんですか?」

「ああ・・・・みたいだね。しかも教頭の竹原に・・・腕輪の」とも、華織達のやつてゐたのも・・・

なるほど、やつたの用件はその」とですか・・・

「一応惚けたが・・・あの男。余計なものを召喚大会の賞品に入れてきやがった」

「余計なもの?」

「近々フレオープンする如月グランドパークのフレオープン用のフレニアムチケットだよ」

はあ・・・・遊園地のフレニアムチケットですか・・・

「確かに学園の行事で遊園地のチケットは変ですか・・・」

「まあそれもあるんだけどね・・・そりに厄介な契約で入手した日

く付きでね・・・それを使って来園したカップルを強制的に結婚までプロデュースして宣伝に使つらしげ・・・

あー・・・それは確かに嫌ですね・・・

「・・・欲しい（キラキラ）」

「うううのに入手されたら溜まつたもんじゃないですかね・・・

「・・・俺も召喚大会に参加する」

「残念だがこの話を聞いて即締め切らせてもひつたよ・・・ひょうど切りのいい人数にもなつたんですね」

それを聞いて康太が床を叩きながら泣く真似をします・・・ウザイ

「そういえば、竹原と話してると同じFクラスの坂本と吉井がやつてきてね・・・教室の補修工事なんて頼んできやがったから、召喚大会の優勝を条件にしてやつたよ・・・これで腕輪は大丈夫かもしれないね」

お婆ちゃんが一やりと笑いながら言います・・・ホント学園長らしくない学園長だよね、お婆ちゃんって・・・

「それじゃ、今日まじの辺で終わらしちよつかね・・・召喚フィールド消去」

お婆ちゃんの声に反応して装置が召喚フィールドを消しました・・・

音声応答の前に発熱問題を何とかしてよ・・・

便利な常用车両の問題なくなりましたよ・・・
やつらが楽だつた・・・

学園祭当日・・・

「うわー」の衣装本格的ですね・・・

「霧島さんが用意したのは実際に使用しているものだからわかるけど、学園が用意したものもね・・・」

学園や翔子さんが用意してくれたメイド服の衣装を見て、女子生徒達が感想を言います

「では早めに着替えて、衣装に慣れておきましょうか」

「やうだね」

木下さんと藤さんのやりとりを聞き、皆が衣装を持って教室内に仕切りを使って作った更衣室に向かいだします

「・・・華織?」

「は、はいっなんですか?翔子さん」

「・・・どうしたの?」

少しボーッとしてしまった私に翔子さんが気付き顔をかけてきます

「いえ、なんでもないですよ」

ホントは心配事があるんですけど……

「……やつ」

それは……今朝の話……

私と康太は学園長室で、お婆ちゃんと打ち合せをしていました

「……とにかくだから、上手くいけば……」

「……（シジ）」

お婆ちゃんの話を遮り、康太が静かにするよつにジロスチャーをしてきます

「……盗聴される」

「なんだつて？」

そしていきなりやつに「……康太は懐から何か機械を取り出して……

「なんでアンタがそんなものを持つてんだい？」

「……企業秘密」

機械をかざしながら部屋中を歩き回っています

あれは、盗聴器を探し出す機械で、持ってる理由は、自分も使つて
るから、かな？

「気付いた理由は？」

「・・・なんとなくそんな電波が出てる気がした」

自分が使つてるからそういう電波に敏感になつたんだね・・・

『ペーぺーぺーぺー...』

「・・・」とか

部屋の隅で機械が反応して、康太がその辺りにあるものを退かして
を探します

「・・・あつた」

康太がそう言つと手には小さな機械が・・・

「なるほど、道理で情報が洩れてるわけさね・・・」

それから康太がもう少し部屋の中を探して、盗聴器はこれ一つだと
いうことがわかり・・・

「といつ」とは、華織やアンタのクラスの連中も危ないかも知れな
いね・・・まあ向こうも教師だから生徒を傷つける真似はしないと
思うがね・・・一応気をつけるんだよ」

「はい」

「・・・（口クン）」

なんてことがあって・・・うーん、困りましたね・・・下手するとAクラスにも迷惑が掛かってしまいます・・・

「藤堂さんすいません、ちょっと霧島さんと抜けます」

「あ、はい、召喚大会ですね。がんばってくださいね」

「・・・ありがとう。行つてくる」

「はい、いってらっしゃい・・・」

私は翔子さんと木下さんを教室の入り口まで見送ります・・・

翔子さん・・・私にはお礼なんて言われる資格は無いんですよ・・・だつて私は、勝つてほしいって思つてないから・・・

なぜなら、この2人が優勝したら、学園に大きなダメージがくるから・・・

結局クラスメイトより、学園のこと・・・相変わらず私は最低の代表ですね・・・いえ、代表以前に人として最低、ですね・・・

そんな私でも少しでもクラスのために・・・

「お帰りなさいませ、ご主人様」

今はがんばって接客をこなしましょう・・・

「それではそろそろシフトの入れ替わりをしていきましょう。手の空いた人から交代していってください」

『はい』

ある程度時間がたつたので、裏方の人にはう指示を出し、ホールに出ている生徒にも順次交代をしていくように言っています

「あれ？ 藤堂さんは交代しないの？」

「はい、私ははずっと出でていますよ。代表ですかうね」

クラスメイトの1人に聞かれ、私はそう返します
迷惑をかけるかもしぬないクラスへのせめてものお詫びです・・・
もう一つ狙いがありますけど・・・

「休憩無しで大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、ときどき裏方に回つたりもしますからね」

「でもせつかくの学園祭なんだし藤堂さんも楽しまないと……」

正直、それどうりじゃなくて楽しむ余裕は無いんですよ……

「明日は少し抜けたりしますから大丈夫ですよ」

「わづですか」

その生徒は納得したよつて休憩に入つてこきました

「では、また少し抜けますね」

「……行つてくる」

「はい……」

2回戦に向かう翔子さん達を見送り、まだお脣前なのでお客が少ないので、入り口付近でお客が来るのを待つています……すると

「ここのかな……女人人がいっぱいだから……お姉ちゃんがいるかも……」

少し不安そうにしながら小学生くらいの女の子が入つてきました……

・迷子かな？

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「え・・・？」

私の出迎えの挨拶に女の子はポカンとしました

「お嬢様？どうかされましたか？」

「・・・」

女の子はなんと云うか・・・どうしていいかわからない様子、なの
かな？

「どうしたの？藤堂さん？」

おかしな様子に気付いた工藤さんが近づいて尋ねてきました

「あ、工藤さん・・・」の子なんですが・・・って、あ！」

私が困って工藤さんに助けをもらおうとするも、その女の子は工藤
さんの下に走りよつて・・・

「葉月もあの服着たいです。お姉ちゃん！」

そう言い放ちました

「工藤さんの妹さんですか？」

「こいつはあまり似てないような・・・

「うう？！」「いや違うナビ・・・」

「藤さんは違うと聞こます……なら年上の女人との意味でのお姉ちゃんかな？」

「あのひつやこの姉ちゃんが着てるなり葉月も着たいです」

グサツ……

私の心に何かが刺さる音がした……仮がします

「藤堂さん?…」

「うう……いこよこみこみ……びつせ私はチビですよ……でもあなたよつは大きいじやないですか……」

私は床にのの字を書きながら少しだけ言い返します
まさか小学生に言われるとは……きつこですね……

「でも葉月が中学生になる頃には追い抜いてると思います」

グサツ……

「あはは……葉月ちゃん?…もう泣にしないと、あのお姉ちゃんが泣いちゃうよ?」

「泣きませんよ?…」

子供じゃないんですからね

つとそんな感じで入り口付近でやつてこると……

「流石△クラスの教室はきれいだな。邪魔するぜ」

「真ん中辺りの席で頼むぜ」

坊主頭とモヒカン頭のガラの悪い男子生徒が入ってきました

なんか面倒」との予感です・・・

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！」

「そうだな。さっき言った2・Fの中華喫茶は酷かつたからな！」

「テーブルは腐った箱だつたし、虫もわいていたもんな！」

坊主頭とモヒカン頭の2人組の男子生徒がわざとらしく、周りに聞こえるように大声で話をしています・・・内容は、康太達のクラスの出し物の悪口

それを私はため息をつきながら見て、他のお客に頭を下げています

仕方が無い・・・私達Aクラスは荒事に向いてないし、追い出そうとたり下手に注意して喧嘩沙汰になるわけにもいかない・・・先生達は召喚大会の立会いでほとんどが借り出されていて・・・せめてもの希望は補習教師の西村先生が校内を巡回しているんですが・・・

「おつと、そろそろ時間だな、行くぞ」

この2人組、回数を分けてちょくちょく来て、西村先生と上手く鉢合わせしないようにしています・・・よくここまで西村先生の巡回時間がわかりますね・・・もしかして教頭先生と繋がつてたり・・・いや、まさか教師が生徒を利用するなんて・・・あれ? 私や康太、あと召喚大会で優勝しろと言われた2人もお婆ちゃんにある意味利用されてるような・・・まあ私は引き取つてくれた恩があるから構いませんが・・・

にしても・・・向こうは利用の仕方が悪いですね・・・まさか生徒にこんな下らないことをさせるとは・・・

「ホント何なんだろ・・・あれ

「あの2人組のせいで他のお客が全然ゆづくりできなーいわ

「・・・迷惑」

出て行く2人組を見ながら翔子さん達が小声で愚痴をこぼします

「(僕)めんなさい・・・私が注意して追い出すことができれば・・・」

「あれは無理でしょ・・・上級生みたいだし、ああいうのは放つておくしかないよ・・・」

「やうね・・・幸い悪口の内容はFクラスの出し物だけだし、アタシ達が何かするとこいつらまで被害がきそだしね・・・」

私の謝罪の言葉に一藤さんと木下さんがそう返してきます

「さて、もうすぐお昼時ですし、お客さんが続々来るでしょう・・・がんばって席を埋めましょ(う)・・・やうすれば入店を断れますし

「ええ」

「やうだね」

「2・Aのメイド喫茶、どうですか～？」

パシャ・・・

「あ、写真撮影は」遠慮くだ・・・なんだ康太か・・・」

教室の入り口付近で呼び込みをしてるとカメラの音がして、振り向くと康太がいました

「・・・扱い酷いな」

「そりゃ今までの行いがね・・・」

無理矢理キスしてきたり・・・抱きついてきたり・・・

「・・・他に人がいる中でそんなのができるか」

「え? あー そうなの?」

そういうえば・・・確かに今までそういうことをしてきたのは2人っきりのときだけだったね・・・

「つで? 入つてくよね? 撮つたんだもんね? 撮り逃げなんて許さないよ?」

「・・・中間報酬で」

なにそれ?

「・・・明日学校サボつてもいいんだが?」

「ぐつ・・・はあ・・・私だけなら撮つていいよ・・・」

「私弱いなあ・・・」

「・・・仕入れができないがまあいいか」

「パシヤ・・・パシヤ・・・パシヤ・・・」

康太が私を色々な角度で撮り始めました

「明久、こにはやめよ!」

「雄一、ここまで来て何いつてるのさー早く中に入るよー。」

「頼む・・・ここだけは・・・Aクラスだけは勘弁してくれ!-!」

「ん・・・なんか聞き覚えがあるような声が・・・

「そつか、ここつて坂本が大好きな霧島さんがいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ!」

「さうこ聞こ覚えのある声・・・

「雄一、これは敵情視察なんだ・・・メイド喫茶だからといって決して趣味じゃないんだから・・・」

そう言つていた生徒が、
私と私を撮つてゐる康太を見つけてます・・・

「マジシニー＝・・・？」

「…今忙しい、そして人違ひ」

康太、誤魔化せてないから・・・

あらわのせいかしめん

む・・・その声は・・・

卷之三

「わ、わの小説じゃなくて葉廻りであります。」

でも小学生でしょ॥・・・

三葉月 人のことをやさしくいふのが、やいにまぜん！」

むう・・・だ」てお姉ちゃん・・・」

「わが二たわね！」

100

じつやうじの生徒の妹さんみたいですね・・・

「『』みんなさい藤堂さん、うちの葉月が・・・」

「いえ、こいんですよ・・・ちひりやこのは事実ですし・・・」

「諦めではダメよ、まだ希望はあるわ・・・」

あなたには言われたくないですよ・・・どう見ても身長150センチ超えてるじゃないですか・・・

「いえ、もう流石にこれ以上は伸びないと思いますよ?」

「伸びない?」

「身長じゃないんですか?」

「え? あ、そうー・身長よ身長ー・まだ希望はあるわよ

いや、どうがんばってももう150センチ台は無理でしょ! あと1センチ伸びればいいほうじゃないですか?

「美波は胸のことを言つたんだよね? でも諦めも肝心だよ美波 美波の胸はもう肩が外れるよつに痛いいいいいいいいい

あの・・・入り口付近で暴力沙汰はやめてほしーのですが・・・それと・・・

「胸のことですか・・・これでも普通にBはあります・・・」

「アンタはやつぱ敵よ!-!」

えー・・・あなたのすぐ近くにもつと凄い人がいるじゃないですか・・・私よつちよつと身長が高いくらいだけど、胸はFくらいこいつて

「 そ う な 」

「 ねえ？姫路さん・・・あなたのまつがよつぱんじで・・・」

「 そ う ね 」

「 はい？？」

ガラツ

「・・・お帰りなさいませ、お嬢様」

「わあ・・・綺麗」

2・Fの生徒達が教室の戸を開け、翔子さんがお出迎えをし、姫路さんが声を洩らしました

結局康太には撮るだけ撮つて、当番だから、と逃げられてしまいました
まあここにいても鼻血が止まらないからゆつくりできないだらつといいか・・・

「・・・お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様」

お客が女子生徒だけではないと氣付いて、言ひ直す翔子さん・・・

「・・・チツ」

それを見て、舌打ちをして翔子さんを見ないよつて顔を逸らしてい
る彼氏さん

「・・・お帰りなさいませ、今夜は帰らせません、ダーリン」

彼氏には特別に、顔を赤くしてアドリブを入れて出迎えの挨拶をし
ています・・・

「霧島さん……大胆です」

「ウチも見習わないと……」

「あのお姉さん、寝ないで遊ぶのかな？」

「えっと、私はどんな反応したらいいの？」

「では席への」」案内、よろしくお願ひしますね」

私は引き続入り口で呼び込みをします

『全然よろしくねえぞ？！』

「……」

『しょ、翔子！』レホントにウチの実印だぞー・ビ・ツやつて手に入れ
たんだ？！』

はあ・・・折角静かだったのに・・・また他のお客に頭を下げない
といけませんね・・・

私は教室内に戻つて、ホールのメンバーに入ろうとする・・・が

「おう、邪魔するぜ、2人だ。中央付近の席で頼むぜ」

はあ・・・さらに面倒な人達が来ました・・・この人達、これで何回田でしょうか？

「お帰りなさいませ、ご主人様」

しかしそまだ席は埋まりきっているわけではない・・・だから入店を断れない・・・

「申し訳ありませんが中央付近は空いていないようです。ご希望に添えませんがよろしいでしょうか？」

「チツ・・・なんだよAクラスの癖に使えねえな・・・」

一応中央付近からお客様を入れていったからもしかしたら・・・

「まあいいや、入らしてもらうわ」

ダメか・・・

「・・・それでは席へご案内いたします」

ならFクラスの人達に何とかしてもらおう・・・

私は中央から外れ、Fクラスの人達に近めの席に2人組を案内します・・・近すぎるところだと思われるので、声が聞こえて、場所が向こうにバレる程度・・・

だけど・・・

「それにしても、」の喫茶店はいつも来ても綺麗でいいな！」

「そりだな。さつきいった2・Fの中華喫茶は酷かつたからな！」

「テーブルが腐った箱だつたし、虫も湧いてたもんな！」

中央付近に座れなかつたからか、さつきよりも大声で話し始める2人組・・・これならどこの席に案内しても位置はわかるんじやないかといづくらい・・・しかも話してることとはさつきと同じ・・・

私はその様子に困つた顔をしつつ・・・

・・・なんとかしなさいよ・・・

という念をこめてFクラスの人達に視線を送ります

翔子さんの彼氏がその視線に気付いたのか、翔子さんを呼んで何か話しています・・・そして翔子さんがメイド服を脱いで・・・それを女子生徒に止められて・・・なにやつてんですか？その後、彼氏さんがまた何か言って翔子さんが更衣室に向かつていきました

そんなことをしてゐ間も・・・

「あの店、出してる食い物もやばいんじやいいけどな？」

「言えてるな。食中毒でも起こなきやいいけどなー！」

「2・Fには気を付けろつてことだよなー！」

2人組は大声で悪口を言い続けています

・・・早く何とかしてよ・・・

つと念をこめて再度Fクラスの人達に視線を送ると、今度は男子生徒があっち向いてホイを・・・何遊んでんの？あ、田潰し・・・痛そう・・・

そして田潰しを受けた生徒が翔子さんの持つてきた予備のメイド服を持って店から出て行きました・・・ああ・・・なんかまた騒ぎの予感・・・

数分後・・・

たぶんさつきの生徒（・・・だよね？）がメイド服を着て、カツラを被り、メイクまでして戻つてきました・・・いやまさかここまで変わるとは・・・とても男子には・・・見えないね

ホールに出ていた女子達が、それを見てヒソヒソと話しています・・・

「とにかく汚い教室だつたよな」

「ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな」

そんなことも露知らず、2人組は相変わらず大声で悪口を言っています。そしてその生徒は2人組に近づき・・・

「お客様」

少し高めの声で話しかけました

あの・・・メイド喫茶ですから、男性のお客には「主人様」と言わないと・・・バレますよ?

「なんだ?・・・へえ、こんな子もいたんだな

「結構可愛いな

バレてない・・・?しかも好評?

「お客様、足下を掃除しますので、少々よろしくでしょうか?」

「掃除?..わざとさせてくれよ?」

普通お客様のいる席つてお客様を退かしてまで掃除はしませんよ?男相手に鼻の下伸ばして思考止まつてますね・・・

「ありがとウザります。それでは・・・」

あの、何を・・・

「ん?なんで俺の腰に抱きつくんだ?まさか俺に惚れて?..」
「くたばれええつ!」

「いじめあつ!」

坊主頭の生徒がプロレス技のよつなものを極められました

ああ・・・とうとう暴力沙汰が起こってしまいました・・・やはり当事者同士で解決させるのは無理がありましたね・・・

「や、キサマは、Fクラスの吉井……おやか女装趣味が……」

「！」の人が、今私の胸を觸りました！』

な、なんこことを……痴漢沙汰まで……他のお客の迷惑を考え
て……

「ちょっと待て！バックドロップを決めるために当ってきたのはそ
つちだし、だいたいお前は男だと……ぐぶあつ！」

「」たな公衆の面前で痴漢行為とは、『のゲス野郎が！』

もういや……誰か』の人達を追いで出して……

そして逃げ出すように教室から出でていく2人組、それを追つて出で
いく翔子さんの彼氏と女装した生徒……

「……お会計は、野口英世を1枚か、坂本雄一を1枚かのどちら
かでお願いします」

残ったFクラスの女子生徒が会計をしようとして、翔子さんがそんな
ことを言こます

翔子さん……それは横領じゃ……

それにもしても……迷惑料がほしいです……

「では3回戦にこいつを出す」

「あ、はい・・・」

木下さんと翔子さんが召喚大会のため、シフトを抜けるといつきました
やはりAクラスだけあって勝ち上がりますね・・・これに勝てば
準々決勝ですか・・・

「・・・どうしたの?」

「あ、いえ、いついらつしゃい・・・がんばってくださいね」

「・・・うん」

がんばって・・・負けてください

それから數十分後、2人は戻つてきましたが、表情に悔しさなどは
見られず・・・恐らく勝ったのでしょうか・・・

はあ・・・いくら私達の「モンストレーション」が成功しても、白金
の腕輪の「モンストレーション」が失敗したら結局資金援助には悪影
響が出てしまう・・・もしこの学園からお婆ちゃんがクビになつた
ら、私はどうなるのでしょうか・・・

「そこ」の君、注文いいかね

「はい」主人様、『』注文をどうぞ

ホールで接客をすると、メガネをかけた50代くらいの男性に呼び止められました

この年でメイド趣味？まさかね・・・この学園の先生で見回りついでに入ったのかな・・・でも周りの目を気にしないでメイド喫茶に入ってくるなんて・・・ちょっと危険な先生ですね・・・

「バーを一つ」

「バーを一つ、以上でよろしいですか？」

「ああ・・・それと、一ついいかね？」

ん・・・？

「はい、なんでしょう？」

「『』のクラスの代表の、藤堂華織といつ生徒はどの子かな？」

「一」

「の人・・・

「失礼ですがお客様、その質問にはお答えできません」

「なぜ？」

「それは生徒の個人情報に関わる問題です。一般来場客にお答えして後々問題になつた場合の責任が、私にはどんごとができませんので……」

「ふむ、確かにそうだな……」

「私の回答に男性は顎に手を当てて領を返してきました……でも、私の予想が正しければ……」

「しかし私にそれは当てはまらないな。私はこの学園の教師をやつているのだから、一般来場客ではないのだよ」

「そうくるよね……なら……」

「それは大変失礼いたしました。まさかこの学園の先生だとは……あまり見ないお顔でしたので……誠に申し訳ありません」

そう言つて私は頭を下げます

「いや、気にすることは無い。確かに私は教頭だから生徒の前に立つことが少なくてね。知らなくても不思議ではない」

やつぱり教頭か……そして、どうやつてこの場を切り抜けるか……

「それで、藤堂華織といつ生徒は誰なのかな?」

「……」
「いや、適当に答えるわけにはいかないし……でも朝の盗聴で私が今日学園に登校していることはわかつてははず……」

「あの、そのですね……」

「あ、いたいた……藤堂わん」

げつ・・・

タイミング悪く木下さんが私に声をかけてきました……

「少々失礼します……はい、なんですか。木下さん」

私は教頭から一旦離れて木下さんの用件を聞きます

「4回戦に行つてきます」

「……わかりました……こつへらつしゃい……」

「えりしたの?」

「いえ・・・」

ただ、私の身に危険が及ぶ可能性が格段に上がつただけです……
あと、Aクラスに迷惑が掛かる可能性も……

木下さんと翔子さんをその場で見送つて、私は教頭の席に戻る……

「失礼しました、それでは」注文の品をお持ちいたしますね

「いや、もう時間なんで……では」

教頭が席を立ち、教室から出していく……その顔は気のせいかもし

れないけど、目的は達成したと言いたげな表情で・・・

くつ・・・」これで私の面が割れてしましましたね・・・困りました・
・
教頭がどんな人かは知らなかつたけど、ある程度の歳の人だろうか
ら、メイド喫茶に入つてきたり、メイドに声をかけたりはし辛いだ
ろうと思つてたのに・・・

s i d e・教頭

あれが妖怪ババアの義娘か・・・根性が捻じ曲がつてるとこがよ
く似てる

なにやら変な視線を向けてきていたが・・・目的がなれば誰がこ
んなところ・・・

しかし質問をしたとたんに警戒しだして・・・私のことは知らなか
つたのだな・・・

敵の情報を教えないとはあの妖怪ババア、義娘すら所詮は駒という
ことか・・・

可哀想だな・・・同情してしまいそうだ・・・フフフッ・・・

だが、これからもつと可哀想になるんだがな・・・私の手で・・・

p.i p.i p.i • • t r r r r r t r r r r • •

『はい』

「私だ。依頼の対象に1人追加だ・・・名前は藤堂華織、外見はチビのメイド、詳しいことは追つて伝える」

あとは、胸ポケットに仕込んでおいた小型カメラで撮った画像を送れば・・・

ふつ・・・これで妖怪ババアに対する切り札ができるたな・・・

にしても妖怪ババアか・・・うちの生徒共もなかなかいいあだ名をつけるじゃないか・・・

side・華織

どうしよう・・・今から学園長室に籠つてしまいましょうか・・・
でもそれだとAクラスに迷惑が掛かりますし・・・

せめてお婆ちゃんに連絡をしたいけど・・・私は携帯を持ってないし・・・まあ持つてお婆ちゃんに連絡できたとしても、誰が私なんかを守ってくれるというのでしょうか・・・康太もFクラスの人も・・・自分や自分のクラスを守るだけで精一杯のはず・・・

結局私は・・・1人じゃ自分の身も守れないんですね・・・

1人で生きていこうなんて考えてたくせに・・・何もできない・・・

ならせめて・・・

「お密さんが減つてきましたね・・・木下さんと翔子さんが戻つて
きたら、入り口で私が少し呼び込みしますね」

「はい、お願ひします」

周りに迷惑はかけないようにしよう・・・何があつても、ね・・・

「ただいま戻りました」

「あ、はい、お帰りなさい、翔子さん、木下さん」

「・・・ただいま、華織」

4回戦に行つていた翔子さんと木下さんが戻つてきました・・・結果は、聞くまでも無いですね・・・表情を見ただけでわかります・・・

「ではこのままシフトに入つてください。私は入り口で呼び込みを
しますので・・・」

「わかつたわ」

私が軽く指示を出して入り口に向かおうとする

「・・・休まなくて大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと休みながら呼び込みをしますので・・・

「・・・そう」

翔子さんも納得したようなので私は教室から出て呼び込みを始めた

私の居場所がすぐわからないと、私を探し出すために別の人気が被害に遭うかもしれません・・・なら私は隠れたり逃げることはできない・・・何をされるかはわからないけど・・・私だけに被害が来るようにして、あとは只管耐えるしか方法は無い

そう、思っていた時期がありました・・・

「はっーこりゃ確かにチビのメイドだな

「おじょーちゃんよお、痛い目遭いたくなかったら俺りと来てもらおうか

え・・・なんでチンピラが出てくるの・・・?

ドンッ

「キヤツー！」

「痛つー！」

「あうーーー！」

「ぐつーーー！」

私がいる部屋に4人の女子・・・いや、1人は男子か・・・が連れてこられました

その人達はFクラスの女子生徒とその妹、そして木下さんの弟です
ここはとあるカラオケボックスの1室・・・私はチンピラにここに連れてこられて、人質として監禁されています。この4人も私と同じ、人質として連れてこられたのでしょうか・・・

「藤堂さん？！なんでここに・・・」

「・・・（ジー）」

姫路さんが私を見て驚きの声を上げるが私は何も言わず、声を出さないようにジェスチャーをして・・・

「私はいないと思って・・・」

そう小声でお願いします

理由は簡単、私が敵に捕まつてることがバレたらお婆ちゃんにも康太にも迷惑が掛かるから

教頭の目的は何かわからないけど、私を使ってお婆ちゃんに何かを要求するはず・・・学園長の座か、試験召喚システム関係か、それとも単純にお金か・・・可能性としては6：3・99：0・01くらいの割合かな？

姫路さん達が誘拐されたのなら、きっとFクラスの人達は助けに来るはず・・・学校外であるここをどうやって突き止めるかはわからぬけど・・・そしてその中には、康太もいると思う・・・なら、私は康太の邪魔にしかならないから・・・

しかしそれも・・・

「チャイナ4人にチビメイドが1人か・・・コスプレ会場かよ」

チンピラ達が言つてしまえば関係ないんですけどね・・・よく考えたらもう私を連れ去ることに成功したというのは教頭の耳に入つてるはず・・・

落ち着いていると思つてましたけど、私も結構パニッシュになつてゐるようです・・・

「さてどうする？坂本と土屋と・・・吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「待て。土屋や吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すと

ましい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらし
いからな」

チンピラの会話に聞き耳を立てると、これから行動についての話
の様子・・・

ましいですね・・・康太も呼び出すつもつとは・・・

「坂本つて、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが・・・」

坂本といつ名前を聞いてチンピラ達が表情を固くなる・・・

鳴らしてたつて喧嘩だよね・・・？中学時代・・・喧嘩・・・坂本・
・・

まさか中学のとき煙注意生徒として情報が回ってきてた他校の生徒・
・喧嘩ばかりしている坂本という生徒・・・確かに一つ名があつ
て・・・悪鬼羅刹とか・・・ええ？！翔子さんなんて人を彼氏にし
てるんですか？！

「気持ちはわかるがそつもいかないだろ？依頼は坂本と吉井を動け
なくすること、そして・・・」

チンピラ達の視線が私に集まり・・・

「・・・このチビと土屋つて奴を学祭中捕まえとくことなんだから
な・・・」

はあ・・・やっぱりそうなりますよね・・・私と康太の役目は明日

の「デモンストレーション」…それの邪魔なら学祭中の解放は無理ですね…・・・といふか解放する気あるのかな…?

「アンタいつたい何者なのよ・・・」

「ただ、学園長の親族つてだけですよ・・・」

「そういえば学園長の苗字も藤堂じゅうたの」

「道理で頭がいいわけね・・・」

それで納得されるのは、いっしの納得がいかないんですが…・
それに静かにしてないと・・・

「うせえぞ! 黙つてろ!」

ホラ怒つた・・・

「お、お姉ちゃん・・・」

チャイナ服を着た葉月ちゃんがチキンピックに囲まれてて、不安そうな
声を上げます

「アンタ達! いい加減葉月を離しなさいよ!」

ええ~あなた、妹を人質にされたの反対するの…?

「お姉ちゃん、だつてさーかつわい!」

『ギャはははは!』

ああ、よかつた・・・下手に怒つて暴力でも振るわれたらどうしようかと思つましたよ・・・

「あまり相手を刺激しないでくださいよ」

「だつて・・・」

「あなたじやなくて葉月ちゃんが怪我するかも知れないんですからねつ」

「や、やつね・・・」

私が小声で注意をします

つとそのとせ・・・

ガチャ

「・・・灰皿をお取り替え致します」

「おひ。で、このオネーチャン達ビーナス・ヤツがやつてここへ」

康太・・・え? なんで・・・まさか助けに? でももひよつと変装とかしよつよ・・・つていうか、なんでチンピラ達は気付かないわけ? まさか康太の顔を知らないから気付けないの?

にしても康太はもう鼻声・・・やつぱつ私のことすらもつ気付いてるね・・・

「だつたら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

「ズリーだつたら俺2番ねーーー！」

「あ、じゃあ俺はメイドにこの奉仕してもらおつかなーーー！」

「トランジ

「・・・失礼しました」

チンピラ達の話が下品な内容になり、私のことが出たとき、康太が空の灰皿を落としました

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてくださいーーー！」

「だつしてーべりすかー？」

「それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？」

「すよねーそれで帰してもうれるなら、最初から捕まえてないよねーーー」

だから変に刺激しないでつて言つてるのに・・・

「やつーーーあ、触らないで・・・」

「ちよつと、やめなさいよーーー！」

チンピラの一人が姫路さんの腕を掴み、姫路さんは嫌がつて抵抗し、

葉月ちやんのお姉さんが食つて掛かつて・・・

「あーもひ、うつせエ女だな!」

ドンッ

「わやあつー」

ガツシャーン・・・

チンピラに突き飛ばされ、テーブルを巻き込んで床に倒れました

ガチャ

「おじやましまーす!」

「よ、吉井君?」

「アキ・・・」

音が外まで聞こえたのか、吉井君が突入してきました・・・康太が
来てるからやつぱり近くにはいたんですね・・・

「ハア?お前誰よ?」

いや、だからなんで相手の顔を知らないで呼び出やうとして・・・
それじゃ本人がわからないじゃないですか・・・

「それでは、失礼して・・・死にくされやああつ!」

「ほ」ああああつ！」

吉井君が相手の股間を蹴り上げて1人を倒しました・・・
うわあ・・・男なのにそれやるんだ・・・

「てつ、てめえ！ヤスオに何しやがる！」

「イイシシャアアーーー！」

「！」ふああつー！」

吉井君は殴られながらも相手の頭を蹴りを入れました・・・これで
2人

「テメエら、よくも美波に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してや
るー！」

突き飛ばされた生徒は美波さんというのですか・・・随分と想われ
てますね

でもやつぱり1人じや・・・

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが？ー！」

「とにかく來てこらのなら丁度いい！ぶち殺せー！」

ああ・・・やつぱり囮まれてしましました・・・

「たった1人で調子くれてんじやんええぞ！」

「舐めてんのか！」

そして殴られて・・・姫路さん達はその音を聞いて震えています

「やれやれ・・・」のアホが、少しほのめをつけて行動したりつてーの
つー

「げ、ぶつー」

そこにやつと、翔子さんの彼氏登場・・・そついえばAクラスの人達はいなくなつた私のことを怒つてるでしょつね・・・どうしまし
ょう・・・?

「雄一つー！」

「貸ししイチだからな？」

「で、出たぞ！坂本だ！」

「坂本まで來ていたのかー！」

姿を見ただけで怯え始めるとほ・・・中学時代はいつたいどれだけ喧嘩をしてたのでしょうか・・・

しかしそのとわ・・・

「坂本よお。このお嬢ちゃんがどうなつてもこいのかア？」

チンピラの一人が葉月ちゃんを盾にして大人しくするように言いました

「大人しくしていろよ？ さもないと、ヒデエ傷を・・・」

「・・・負うのはお前」

ドゴッ

「あがあつ！」

康太が灰皿でその男の頭を殴り、葉月ちゃんを人質にしていた男が白目を剥いて倒れます・・・死んでないよね？

なんて私がボーッと見ていると・・・

「人質はまだいるんだよ！！」

チャキ・・・

「なつ？！」

今度は私を盾にして、しかも刃物まで出してきました・・・

今度は葉月ちゃんのように不意打ちで助けれない・・・
え・・・？ 私死ぬの・・・？

え・・・？私死ぬの・・・？

そう思つた瞬間・・・

ゴツ

「あがあ！」

私に刃物を向けてた男の頭に何か硬いものが当たつた音がし、そして男が吹き飛びました・・・

「ゴロン・・・

床に落ちた物を見ると・・・灰皿、しかももさつき葉用ちゃんを捕まえてた男を殴り倒したときに使った物と同じもので・・・つまり・・・

「康太・・・？」

「・・・怪我は？」

「え、あ、無いけど・・・」

物を投げた後の体勢の康太・・・

「おいおい・・・死んでないよな・・・あれ」

坂本君は吹き飛んだ男を見て思わずそう声を洩らします・・・意識は無いみたいだけど呼吸はあって、でも頭から血を流していく・・・今生きてても少ししたら死ぬとかないよね？

「ぐつ・・・テメヒよくもー！」

その光景に他のチンピラが敵を討とうと康太に向かいだし・・・「ハツーお前ら・・・そんなことしてる余裕があんのか！」

それを見てすぐ喧嘩モードに意識を戻す坂本君・・・

「お、お姉ちゃんーお姉ちゃんー！」

「葉月ーよかつた・・・怖かつたよね・・・？」

解放された瞬間に今までの光景を見せられ、呆然としていた葉月ちゃんが我に返つてお姉さんに駆け寄つて、お姉さんに抱きしめられました

ああ・・・よかつた・・・私のせいであんな小さな子に怪我を負わせないですんで・・・

「吉井君つー！」

それを見ていた姫路さんが腕を広げて駆け寄つていき・・・

「姫路さんつー！」

吉井君も腕を広げて受け入れ準備オーケー・・・あつー！

「吉井に！ヤスオをよくもー！」

「ぐふあつー」

受け入れたのはチンピラのパンチでした・・・

「・・・！」

「な、なんだ」「イツ？血の涙流してると？」

「やつにはいけないことをじてしまったからですよ・・・」

「姫路さん、ちよつと待つてて！」「イツをシバき倒した後でもう一度・・・」

「お前らー先に教室に戻つていろー！」

「雄二ー！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

「それにしても一度いいストレス発散の相手ができるたなー！生まってきたことを後悔させてやるぜえー！」

「うわあ・・・色々とキレちやつてる・・・何がここまで彼を追い詰めたんでしょう・・・」

「ギュッ・・・」

「・・・って

「康太は何をしてるのかな？ねえ？」

「……」はなつこいつ「空氣だろ」

いや、確かにそうだけね……抱きしめるだけならね……

サスサス……

「くえ……これが私の尻をさする空氣なんだ……」

「……つこ……ん？」

私の非難の言葉に康太が返^そりとして、何かに^{氣付}く^よう^ひ田^たをパチクリしています

「何？^どうしたの？まだ何か言^ついことがあるの？」

「……ちょっと待て」

そう言つて康太が鼻の詰め物を……つて

「今それ外したら鼻血が噴出……す？」

あれ？出でない？

「……治つた……？」

「え？でもなんで……」

「……知らん、でも治つたからには……」

ギュウ～～と抱きしめる力が強くなつて・・・

「・・・2度と放さない」

治つた理由がわからないと再発したときの「」とが・・・でも・・・

「うわああああああああん！！」

よかつた・・・もうこれで私といても、康太を苦しませないですむ・

にしてもこんな大泣きしたのっていつぶりだろ・・・やつぱりあの1件の時以来かな・・・

数時間後・・・学園祭1日目も終わり・・・

「なるほどな・・・どんな関係かと思つたら元恋人かよ・・・しかもあの鼻血の原因を作つたって・・・いつたい何をやつたらあんなのができるんだよ・・・」

坂本君が呆れた表情で聞いてきます・・・なについて・・・ねえ？

そして私がいるのはFクラスの教室

なぜここにいるか、理由は2つ、坂本君がちゃんと事情を聞くため

にお婆ちゃんを呼び出しましたから、私は関係者としてそれに同席する必要があつて……

もう一つは……

「康太……そろそろ……」

「イヤ」

康太が私を放してくれない……」にぐるまでずっと……

Aクラスに無事を知らせにいつた時もずっとついてきて……かなり変な視線を集めてしまった……Aクラスの人達は私がいなくなつても特に問題なく喫茶店を回していて、私はずっとシフトに入つてたから体調を崩したのかと思っていたらしい……皆特に怒つてしまませんでした

「ぐぬぬ……FFF団の血の盟約を……」

「ほつとけ明久。それよりそろそろ来る時間だぞ」

何かドス黒いオーラを滲み出している吉井君、それを喧嘩ですつきしたのか坂本君が押さえながら言います

「?来るつて、誰が?」

「ババアだ、俺が呼び出した。さつき廊下で会つた時に、話を聞かせろつてな」

「話ねえ……ダメだよ雄一。一応相手は目上の人なんだから、用

事があるなら」つかから行かないと

「それに人のお婆ちゃんをそんな呼び方しないでください」

全く・・・」の学校の人は・・・

「え？ 藤堂さんのお婆さん？ あのババアが？ ええええええっ！」

「つたく・・・相変わらずついでしょ？ さうかい？」

「はい、大丈夫です、怪我もありません」

「そりゃあ・・・つで？ あんたの後ろのはじつしちまつたんだい？」

「さあ・・・？」

鼻血が治つて嬉しいのはわかるんだけど、こんなに引っ付かれると・・・ねえ？ お尻の辺りに・・・当たつてる・・・

「それより、全部話してもうつぜ。本当の目的や、アンタが今打つてる手、敵の頭とかもな」

「やれやれ・・・仕方ないね・・・そつちの2人にはもう教えてるんだがね・・・」

お婆ちゃんが坂本君の質問に答えていきます・・・腕輪のこと、私達が披露する予定の別的新技術、教頭のこと・・・そして今朝の盗聴器のこと・・・

「なるほどな・・・。初めから向こうは俺らが学園長側の人間だとバレていたのか・・・」

「そういうことになるね・・・。」ればかりは伝えなかつたアタシの責任だ・・・すまなかつたね」

お婆ちゃんが2人に向かつて頭を下げます・・・

「あのや、コレって・・・かなりマズい話じゃない?」

「そうです・・・。」これは文月学園の存続がかかつた話なんですよ。私達はあくまでバックアップで、デモンストレーションをすることは一切公表されてません。だからスポンサーは白金の腕輪を見に来ます。そしてそれが失敗することは資金援助の大幅な減額に繋がります。その責任はお婆ちゃんといつことになつて・・・お婆ちゃんは最悪クビになつてしまつます」

「・・・」

私は吉井君にことの重大さを説明しました

吉井君はイマイチよくわからないという表情・・・

「お婆ちゃんが学園からいなくなるといつことは、この学園から試験召喚システムがなくなるといつこと、それはこの学園が試験校である意味もなくなるといつこと・・・つまりお婆ちゃんがいなくなれば、この学園は廃校になります」

あの2人組はそれを・・・わかつても関係ないですね・・・3年なら今年度卒業して学園とはおさらばですしどう困るのは廃校に

なつて来年度以降通つといふが無くなる私達1・2年の生徒・・・

「あ、でも。いざとなつたら優勝者に事情を話して回収したり・・・

「

廃校になるといふ言葉で重大さを理解したよつですね

「残念ながらそういうかない。決勝戦の相手を知つてゐるか?」

坂本君がポケットに入れていた紙切れを吉井君に投げて渡し、それを見て吉井君は・・・

「常夏コンビ」・・・

そつ啖きました・・・どうやらあの紙は召喚大会のトーナメント表が書かれてる紙のよつですね

「そうだ。やつらは教頭側の人間・・・喜んで観客の前で暴走を起こすだらうな」

「学園長、質問です」

「なんだい?」

「腕輪の暴走つて、総合科目で平均点にいかなれば起こらないんですか?」

「そつぞ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「やつですか。それはよかつた

それを聞くと吉井和と坂本君は帰つていきました

「つで？ アンタはこいつまでやつしてゐんかい？」

「・・・俺の『氣』がすむまで」

「やうかい・・・じゃ、アタシは学園長室に戻るよ」

康太の返答にお婆ちゃんは呆れながら教室から出て行きました

Q・なぜ康太の鼻血が治ったのか

A・愛の力が奇跡でも起こしたんじゃない? (笑)

また華織を失いたくないって強く思つたり治つたりやつた、とでもしておいてください

それからまた数時間・・・現在午後10時くらい

流石に康太も帰りましたが、私はまだ学園にいます・・・

お婆ちゃんが白金の腕輪と私達用の腕輪の最終調整をするために、今日は泊り込みで作業をするためです

ちなみに私達用の腕輪には前は無く、今回だけのもので今後使う予定は無いです

「お婆ちゃん。バーべー買つきました」

「ああ、すまないね」

私は売店の自販機で買つてきた缶バーべーをお婆ちゃんの近くに置きます・・・

ここは学園長室ではなく、お婆ちゃんが試験召喚システムに関する研究と開発をするために用意された部屋・・・泊り込んで作業ができるように仮眠室も用意されています・・・

私を引き取つてから、お婆ちゃんは遅くなつても必ず家に帰つてきました・・・ここで休めばもつとゆっくりできる時間が増えたかもしないの・・・

「あの・・・お婆ちゃん・・・」

「ん? どうかしたかい?」

「私は、お婆ちゃんの邪魔になつてないですか? 毎日どんなに遅くなつても家に帰つてきてくれて・・・」」」を使えば休める時間も多くの取れたのでは・・・」

「確かに去年はそつだつたね・・・遅くなつたときは家に帰りやが、」」」で寝てまた仕事に戻つたりもしたよ・・・」

やつぱり・・・じやあお婆ちゃんは私のために無理を・・・

「でもね、華織が夕食を作つて待つてくれるなり、多少無理して帰るのも悪くないと思つたよ・・・もう何年も、アタシには帰りを待つてくれる人なんていなかつたからね・・・アタシだつてただの人で、女さね・・・結婚に興味が無かつたわけじゃない。でもそれ以上に研究に向き合つていたくて・・・だから諦めた・・・でも誰もいない家に帰るところのは、この歳になつても多少来るものがあつてね」

お婆ちゃん・・・

「アタシも妖怪だ何だつて言われてるが、実際あと何年生きれるかもわからない・・・なら残りの人生を少し誰かのために使うのも、なんてね・・・結局華織を引き取つたのはアタシの自己満足とH'」だよ、邪魔になつてるなんて思つてないさね」

そう言つてお婆ちゃんはH'」」」を一口飲んでまた作業に戻りました

s.i.d.e.・学園長

「アタシは今日は徹夜で作業するから、華織は仮眠室で適当に休みな」

「はい・・・」

アタシの言葉を受けて、華織が仮眠室に入つて行く・・・今日は慣れないことをやつてたからか、疲労が随分と溜まつてゐようぜね・・・

あの子を引き取つてもうすぐ3ヶ月か・・・自分が随分と嫌な人間だと思い知らされたよ・・・親も子に育てられるとはよく言つたもんさね・・・

あの子を引き取ることにして、編入させて・・・あの子の制服はなかなかの進学校のものだつたし、ひょっとしたらうちの学園に入れられれば、進路次第ではいい宣伝材料にできるんじやないか、と初めは思つてたりもした・・・優秀な生徒を有名な大学に進学させること、そしてそれにより多くの優秀な新入生の獲得すること・・・私立の学校とは究極的に言えばそれの繰り返しだからね・・・

結局アタシはあの子・・・華織を利用してゐるのさ・・・今回がいい例さね

腕輪のことなんか初めから不具合を発表して賞品から外せばあの子に危険は及ばなかつた・・・
代わりの技術には不具合は無かつたんだ・・・そっちだけで充分スポンサーを納得させられる自信もあつたし・・・
白金の腕輪にこだわつたのは・・・アタシの技術者としての意地でしかない

やつぱり技術者のアタシが学園長は、向いてなかつたのかもしれない

でも今となつては向いていなくともやるしかないんだがね・・・華織の居場所を守るために・・・

担任の高橋から聞いたがあの子はクラスの生徒にだいぶ信頼されるらしい・・・ただ、時間があれば自習をしているという点で人付き合いに難ありのようだが・・・でもそれも、学力至上主義をとっているここじやなかつたら奇異の目で見られてるだろうね・・・あの子、前の学校で友達いなかつたようだし・・・だから今更他の学校に転校なんてさせれるわけが無い・・・

それに・・・土屋康太という生徒・・・昔の恋人とか言つてたが・・・あんなお互い想い合つてなんで別れたんだか・・・まあアタシは色恋については捨てた身だから何も言えんがね・・・

ずっとあの子の傍について、あの子を支えてくれる存在に、なつてくれやしないもんかね・・・

でも問題はあの子のほう、なんだよねえ・・・

side・康太

なぜ・・・いきなりこの体质は治つたのだろう・・・

あのとき、刃物を向けられた華織を見て・・・気付けば思いつきり灰皿を投げつけていた・・・

体が勝手に反応した、とでもいつか・・・今まで散々華織のことを拒絶していたこの体が・・・

まあいい・・・治つたからには俺の体も、精神同様に華織無しでは生きていけないようにしてやる・・・

そつすればもう一度とあの体质が戻ることはないだろう・・・

とつあえず明日の「モンストレーション」ときに、軽く行動を起すか・・・

29話（後書き）

読者様の中に、精神科医の方はいらっしゃいませんか？

康太が中二病を発症しました

至急、治療をお願いします

次の日、早朝・・・学園長室

「とりあえず華織達の使う腕輪の最終調整はできたさね、アタシはこれから少し仮眠をとるから十屋にこれを渡しといてくれ」

「はい、わかりました」

お婆ちゃんが私達用の腕輪を渡して、また作業部屋に戻つていきました

渡された腕輪は、白金の腕輪と違つて、装飾が全く無く、ダイヤルのようなものがあつて、〇 F F ・ 0 ・ 5 ・ 1 ・ 2 ・ 4 の数字が打つてあります・・・なんでしょう？

2・F 教室前

あれ？ そういえば昨日は大丈夫でしたけど、今日はもう元に戻つてました、なんてことはないですよね・・・？
どうしよう・・・もしそうなら、私が急に会いに行くのはまずいのでは・・・事前に連絡をつて私携帯持つてないし・・・康太の番号も知らないし・・・うーん、困りました・・・

なんて悩んでいると・・・

ギュッ・・・

「ヒヤツ?ー」

不意に背後から抱きしめられて、私はビックリして声を上げます・・・

「・・・珍しいな、華織から会いにくるなんて」

私の頭上から声が聞こえます・・・それはもちろん康太ので・・・しかもいつも鼻声じゃない・・・よかつた

「鼻血は出でないの?」

「・・・当たり前」

一応の問いかけに康太は答えながら・・・

ムニユ・・・

私の胸に自分の腕を当てるきます・・・さり気なくやればバレ無いとでも思つてんのかな・・・?

「腕、当たつてんだけど?」

「・・・ホントに大丈夫か確認・・・まあ小さいから関係ないか・・・

・

言わないからね・・・あの時と同じことなんて・・・

「……で、用事は？」

「人の胸触つといてその反応って……まあここよ。ほここれ、お婆ちゃんから、今日のアレで使ひやつ」

私は抱きつかれたまま康太の分の腕輪を渡します

「……ああ……」のダイヤルは？

「わからない、デモのときに説明が入ると思つし、無くならそのときには聞けばいいよ」

やつぱり康太もダイヤルが気になるようですね……

「……そうだな……じゃあ……」

「うん、じゃあね……私もそろそろクラスに行かないと……」

「……わかった」

康太も役目があるので、今回はすんなり放してくれました……が、残念だなんて思つてないですよ？ホントだよ？

「決勝戦のときに、いつにいく？設備使つて中継を流すから、一緒に……」

これもデモンストレーションの前の待ち合わせのつでですからね

午後1時・・・Aクラス教室

『さてみなさま。長らくお待たせ致しましたーこれより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います!』

プラズマディスプレイに映る召喚大会の決勝戦の中継映像、ちょうどこれから始まるようだ

何か一騒動くらいあるかと警戒していましたけど、昨日の色々な騒動で警備が強化されたようで、特に何も起こりませんでした

「あ、康太きたね。ゴメン今席空いてないんだ・・・立ち見でもいい?」

「・・・ああ、じつするから問題ない」

そう言つてまた私を後ろから抱きしめる康太・・・

「店員へのお触りは禁止なんですけど・・・」

「・・・誰も見てないから問題なし」

はあ・・・確かに皆決勝戦の中継に目が行つてゐるからじつちに意識は向いてないし、ディスプレイが見易いように教室内を少し暗めにしてるから見えないだろ?けど・・・

『それでは出場選手の入場です!まずAブロックより勝ち上がり

きました・・・』

アナウンスの人が入場口のほうを指し・・・

『2年Fクラス所属、坂本雄一君と、同じくFクラス所属、吉井明久君です！みなさま拍手でお迎え下さい！』

Fクラスの2人が紹介され、それに合わせて入場してきました

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

翔子さんと木下さんの組はこの2人に負けたらしいけど・・・どうやって勝ったのかな？ガチンコで勝てるとは思えないんですけど・・・

「ねえ康太、あの2人はどうやって、準決勝を勝ったの？」

「・・・雄一を生贊に霧島を戦意喪失させた。あとは明久の代わりにバレないように俺が召喚して一瞬で勝負を決めた」

「なにそれ？卑怯すぎるでしょ・・・」

「・・・勝てば官軍」

準決勝つて一般公開されてたよね・・・よくそんなのできるね・・・

『そして対する選手は3年Aクラス所属・夏川俊平君と同じくAクラスの常村勇作君です』

も「1組のペアが紹介され、あのガラの悪い2人組が出てきました

『出場選手が少ない3年生ですが、それでもきつちり決勝戦に食い込んできました。Aクラスといふことでの勝負、面白い対決になりましたね』

2組が向かい合つて・・・音声は拾えてないけど口が動いてて・・・何か話してますね

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは・・・』

ルールの説明に入り、お客様の目が一旦ディスプレイから離れます。ここにいるお客様は学園の生徒が多いです。一般来場客は会場で見ていで、自分のクラスの出し物のシフトの関係などで会場まで行けなかつたり、会場が収容人数に達してしまって入れなかつたり・・・それでも決勝が見たい人がうちのクラスに見に来ています。3・Aも設備的には見れないわけではないのですが、3・Aはお化け屋敷で中継を流すつもりは無いのでしょうか・・・

さてそろそろ説明も終りますね・・・

ハム・・・

「んつ・・・」

耳に凄い違和感を感じ、私は思わず声が出てしまう・・・

「康太何を・・・」

「・・・なんか退屈になつたから、声出すとバレる」

「ちよ・・・耳なんて舐めないでよ・・・」

『それでは試合に入りましょー! 選手の畠さん、どうぞ!』

「ホラ、始まつたから・・・」

「・・・そうだな・・・」

そして何事も無かつたように『ディスプレイを見だす康太・・・私は心臓が凄いドキドキしてて・・・

『サモンー!』

「・・・いいやもつ・・・あいつらは勝つだろつし・・・今は・・・」

「

「え? ちよつと・・・」

ハム・・・

康太が決勝そつちのけで私の耳を弄りだし・・・

「・・・じつちのほうが興味ある」

・ 結局決勝はFクラスの2人が勝つたくらいにしか覚えていません・・

30話（後書き）

読者様の中に警察官はいらっしゃいませんか？

康太の変態度がレッドラインを越えた気がします

至急、逮捕をお願いします

召喚大会の表彰式も終わり、いよいよモンストレーション・・・
『それでは、召喚大会優勝者のお2人に、新技術の披露をしてもら
いましょう』

アナウンスの進行で優勝者の2・Fの2人・・・坂本君と吉井君が
スタンバイします

『まず代理召喚型と呼ばれる、本来教員にしかできない召喚フイ
ルドの形成を生徒にもできるようにする腕輪から行いましょう。そ
れではお願いします』

私と康太はそれを入場口に待機した状態で見ていました

お婆ちゃんが代理召喚型を使う坂本君に使用方法などを説明して、
お婆ちゃんが離れ、坂本君が腕を上げて起動ワードを言うと、召喚
フィールドが形成された・・・起動ワードは距離が離れてたし、会
場も少しザワザワとしていたので聞き取れませんでしたけど、そこ
まで長い単語じゃないのはわかりました

『次に、同時召喚型と呼ばれる2体の召喚獣を同時に操作できるよ
うになる腕輪を・・・』

そして坂本君が展開した召喚フィールドで、吉井君が召喚獣を呼び、
腕輪を起動させました

すると点数が半分になつてもう1体の召喚獣が出てきました。2体
同時操作は流石に難しいようで、少し拙い操作になつてしまつてしま

すが、普通なら同時に操作なんてできるものじゃないですし、吉井君にそれができるのも、観察処分者で召喚獣の扱いに慣れてるからということがあるからで・・・たぶん不具合が無くともあれを使いこなせるのは吉井君だけだと思いますね・・・

『さらに今回、もう一つ新技術を披露いたします』

あ、もう私達の出番のようですね・・・

『それではデモンスト레이ターに登場してもらいましょう。どうぞ！』

私と康太が入場してステージ中央に向かって歩く・・・うわあ・・・やつぱり世界でここにしかない試験召喚システム、そしてその新技術の披露ってだけあってプレスが凄い・・・日本はもちろん海外のプレスまでいます・・・日本語でしかやってないけど大丈夫なのかな・・・？

『2学年主席である2年Aクラス代表の藤堂華織さんと、保健体育の2学年最高成績保持者の土屋康太君です』

アナウンスの人が私達の紹介をします・・・「うえは私と康太がデモンスト레이ターに選ばれた理由の説明もつきますからね・・・康太が保健体育学年1位でよかったですよ・・・

『では披露する新技術について、開発者の藤堂カヲル学園長に説明をしていただきましょう』

そう言ってアナウンスの人がお婆ちゃんにマイクを渡しました

『これから披露する技術は、召喚獣の可能性を広げるものです。現在、召喚獣は全て2足歩行で人の形を取っています。その型を壊すことに私は成功しました』

お婆ちゃんがいつもの話しかじやない・・・」これはプレス向けなのでしょうか・・・

『これにより、召喚獣は人型以外にも、犬や猫などの陸上生物の形をとることができます。例えば・・・』

そしてお婆ちゃんが私と康太に合図を出します・・・私と康太は坂本君が展開し続けていたフィールドに入り・・・

『おおーっ!』
召喚獣を呼んだ。ちなみにダイヤルは0・5に合わせてあります

現れた狼型の召喚獣に会場が驚きの声を上げて、プレスが一斉に写真を撮り始めました

『このように狼の姿をとることができます。さらに特殊なもので言えば象などの大型動物もできます』

象なんて出せたとしても動かせるのかな・・・?特に鼻とか・・・

『それではテモンストレーションとして対戦を行いたいと思います』

そう言うとお婆ちゃんはマイクをアナウンスの人へ返し・・・

「坂本、召喚フィールドを消しな。アタシがフィールドを展開し直すから」

「ババアが？ ああ、わかつた……停止」

お婆ちゃんが坂本君に指示を出し、坂本君が首を傾げながらも召喚フィールドを消しました

「華織に土屋、ダイヤルを4に合わせとくな」

「はい」

「・・・（ヒクン）」

私達に一言指示を出し・・・そして・・・

「学園長権限により科目保健体育でフィールド展開」

お婆ちゃんがそう言つて召喚フィールドを形成しました

・・・って、え？

「何だこの大きさ？！通常の10倍くらいあるじゃねえか？！」

お婆ちゃんが展開した召喚フィールドは通常の召喚フィールドの10メートル四方をかなり上回り、ステージのほぼ全域を囲つています・・・

「ぞうと30メートル四方つてとこさね。学園長権限でのフィール

ド形成は最大で50メートル四方まで展開可能だよ。どうだい、
いたかい？これからは気安くババアなんて呼ぶんじやないよ」

驚

「でかいフィールドは展開できても心はちつせえな・・・」

「なんか言つたかい？」

「いや何も・・・」

31話（後書き）

アニメつてさ・・・

召喚フィールドが大体10メートル四方だつていうのが綺麗にスル
ーされてるよね？

「じゃあ頼むよ」

「はい」

「・・・(ノクン)」

「サモン」

| | | | |
|------|------|------|-----|
| Aクラス | 藤堂華織 | 保健体育 | 403 |
| VS | | | |
| Fクラス | 土屋康太 | 保健体育 | 578 |

私と康太が召喚獣を呼び出して、会場内にあるディスプレイに点数が表示されます

そして・・・

『おおーっ!』

出てきた召喚獣を見て再び歓声が上りました

私と康太が呼び出した狼の召喚獣が、さつきまでの召喚獣より遥かに大きい・・・

目測ですが体長が4~5メートルくらい、体高は2メートルを超えてるんじゃないでしょうか・・・

『これは先ほどの状態よりはるかに大きな召喚獣ですが、これも新技術なのでしょうか?』

アナウンスの人があ婆ちゃんにそう尋ね、マイクを向けています

『『いえ、この召喚獣の大きさを変化させる技術自体は開発当初から出来上がっていました。今までは学園の校舎内での使用に用途が限定されていましたので使用しませんでしたが、今回場所が確保できましたので、動物型召喚獣と合わせて披露をと思つた次第です』』

このダイヤルは召喚獣の大きさを変えるためのものですか・・・確かに開発当初から召喚獣がこの大きさだと研究し辛いでしょうね・・・それにここまで大きいと学園長権限を使ってフィールドを形成しないと10メートル四方だと狭くて対戦は難しいですよね・・・

「ちょっと大きすぎて怖いような・・・」

「・・・華織」

「ん、何?」

私が召喚獣に目を奪われていると、康太が声をかけてきました

「・・・また、あの時と同じ賭けをやる」

「あの時?」

「・・・試召戦争のときのあれ」

勝つた人が負けた人に命令できる権利の賭けですか・・・

「やだ・・・だつて康太のほうが点数上だし、1回負けてるし・・・

「

「・・・なら華織が勝つたら3、4個くらいでもいい」

操作技術はほぼ同じくらいだと思うから、絶対勝てるとは言えないのに・・・そこまでなにか私にやつてほしいことがあるのかな・・・ものによるけど、素直に言つたらやつてあげてもいいのに・・・

「わかつた、いいよ」

「話はまとまつたようだね。ならそろそろ始めてくれ

康太との話しが終わり、お婆ちゃんが声をかけてきました
観客やプレスの人はまだ召喚獣に釘付けのようです

「はい」

「・・・（ハクン）」

私達はフィールドの端と端に陣取つて、大型の召喚獣がよく見える
ようにある・・・そして召喚獣を向かい合わせるように位置取らせ・
・

『それでは、新技術公開のエキシビジョンマッチ・・・試合開始!』

アナウンスの開始の合図で2体の召喚獣が一気に距離を詰めます

この動物型は、長所としては人型を遥かに上回る機動力がある点、
短所は装備が設定できない点、となると戦う方法はその動物の本来
の武器での攻撃で・・・お互いがお互いの首に噛み付こうとしてい

ます

その光景は、人型の戦争とは違つ自然界の生存競争そのもので、まさに壮絶の一言

小技のように前足で叩いてバランスを崩したり、点数を削つて焦らせるために前爪で引っかいたり・・・そして隙ができたら飛び掛つて首を狙う・・・そんな戦い方、もちろん・・・

「腕輪起動！」

召喚獣の腕輪も使います

私の召喚獣が消え、距離をとつてから康太の召喚獣に横から体当たりをし、吹き飛んだ康太の召喚獣に乗りかかり、首を狙う・・・

もちろん康太の腕輪を使ってそれに対抗します・・・この会場だと声が聞こえなくて起動したのがわからないのが嫌だね・・・康太の召喚獣が乗りかかった私の召喚獣を腕輪で加速した後ろ足で蹴り飛ばし・・・

地面に落ちる前に飛び掛られて、首に喰らい付かれました

Aクラス 藤堂華織 保健体育 157

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 516

「くつ・・・でもまだ外せれば・・・

ここから牙を深く喰い込まされて致命傷になる前に抜け出せれば・・・

しかし・・・

「え、ちょ・・・」

康太の召喚獣は腕輪の能力を止めないで、私の召喚獣を噛んで持ち上げたまま走り出します・・・腕輪でさらに機動力を上げてるからこそできることだよね・・・

当然そんな状態では抜け出せるわけも無く・・・

| | | | | | |
|------|------|------|-----|-----|-----|
| Aクラス | 藤堂華織 | 保健体育 | 157 | 127 | 97 |
| VS | | | | | |
| Fクラス | 土屋康太 | 保健体育 | 516 | 515 | 514 |

私の召喚獣の点数がドンドン減つていきます・・・ああ、どうじょうう・・・

その後、私も腕輪で、後ろ足を高速で蹴り出したりしましたが抜け出すことができず・・・

《勝者、土屋康太君》

私は負けました・・・

「・・・じゃあ今日の一般公開時間が終わって、片付けが終わったあたり・・・4時くらいか、またここで・・・」

「うん・・・わかった」

さて何を命令されたのやら・・・色々と覚悟したことなど・・・

約1時間後・・・午後3時

『ただ今の時刻をもつて、清涼祭の一般公開は終了します。各生徒は速やかに撤収作業を行つてください』

学園内にそつ放送が掛かり、一般来場客が帰り始めます

「はあ～疲れたわ・・・でも結構楽しかったわね」

「だね・・・昨日の吉井君の女装とか結構凄かつたよね」

「そうね、あれはもうずっとあの格好でいいんじゃないかなっていうくらい・・・といつかずつとあの格好でいてほしい・・・いや、なんでもないわ」

木下さん・・・本音がだだ洩れていますよ・・・

「えつと、分担は以前決めた通りで、男子の皆さんが椅子やテーブル等の片付け、女子はゴミの分別と掃除、そして衣装の片付けをお願いします」

『はい』

クラスメイトの皆がテキパキと作業をこなしていきます・・・うん、これなら30分くらいで終わりそうですね・・・

午後3時50分・・・召喚大会会場

Aクラスの撤収作業も終わり、私は一足先に約束の場所に来て、康太が来るのを待っています

さつきまで、この広い会場に満員のお客がいて、召喚大会の決勝戦や私と康太がエキシビジョンマッチをしていたとは思えないくらいです・・・

なんて会場を見渡していると・・・

「・・・悪い遅くなつた」

後ろからギュッと抱きしめられる感覚とともに康太の声が・・・

「ううん、まだ4時にはなつてないよ・・・ホラ、まだ53分」

そう言つて私は腕時計を見せる・・・携帯を持っていない私は時間がわかるようにほほいつも腕時計を身に着けている。1000円くらいで買って、ストップウォッチとアラーム、あと5気圧防水が付いたデジタルのスポーツウォッチ・・・メイド服のときは流石に合わないから外していましたが・・・

「・・・遅れてきたことには変わりない」

「まあいいよ、気にしないで・・・それで、私への命令はなに?」

あれから少し考えたけど、康太が『いつ』とつて一つしかないよね・・・

「・・・・華織の人生を、俺にください・・・」

・・・あれ?

「え? そこは『写真を』とかじゃないの?」

「・・・・そんな回りくどい言ひ回しちゃ止めた」

ええへ・・・

「・・・・今度は拒否権は無いからな。体质も治つたし・・・」

「・・・・あのや、一つ聞いていい?」

「・・・・?・・・・ああ・・・・」

「どうして、私なの? 私つてそんないい女じゃないよ・・・自分勝手で、1回は康太の前から逃げ出したんだよ?」

普通ならもう関わりたくないって思われても仕方ないのに・・・

「・・・・好き、いや愛してるから・・・それで理由は充分だろ・・・自分勝手? 逃げ出した?だからなんだ、そんなので諦められるならとつこの世に諦めがついてる・・・」

この3年・・・離れたことで寂しかったのは私だけじゃなかつた・・・といつことですか・・・

再会してから積極的になつて私に色々してきたのは、また私が離れていつてそんな寂しい思いをしたくないから……？

「ん……わかった。でももう一つ質問ができたな……」

そう言つて私は康太の腕から抜け出し、康太と向き合つ

「ねえ、康太にとつて愛つて何？」

「……は？」

私の質問にポカンとする康太……

「私はね、愛つて家族に対して抱く感情だと思つんだ……ほら家族愛つていうじゃない？」

「……ああ……」

「だから、康太には愛されて無いつて思つてた……前に家族じゃないつて言つてたし……」

「……あれは……スマン……」

私が冗談ぽく言つと、康太が本氣で氣まずそうな顔をして謝つきました

「いいよ、あくまでこれは私の考え方の上の話だから……それで？康太にとつての愛つて？」

「……大切で、その人が幸せになつてほしいつて思つこと、かな……」

・・・

「そ、う・・・よかつた・・・」

「・・・よかつた？」

「うん・・・だつてその考え方でも、私は康太を愛してるって言えるから・・・あの時から、今もずっとね・・・」

そう言って、今度は私のほうから康太に抱きつく・・・こんな感じに私から康太に引っ付くのもあの時以来・・・

「ねえ康太、ホントに私の人生、もらつてくれるの？」

「・・・男に一言は無い」

「なら、私には拒否権が無い・・・なんてね。不幸にした分、しつかり幸せにしてあげるね」

「・・・俺は不幸になつたつもりは無いんだが・・・」

康太が苦笑しながら言います

「・・・あと、俺が幸せになるにはお前が幸せになつてもらわないとな」

康太が続けてそう言って、抱き付いてる私を腕を取つて自分から引き剥がします

そして、私を少し持ち上げるように抱きしめて・・・

「・・・でも今日のところはこれで充分だな」

そう言つてキスをしてきました。康太からばつかりで自分からキスができないのが少し悔しい・・・やっぱり最低150センチは身長が無いとな・・・

仕方ないので、康太がしてくる1回1回を大事に・・・記憶に刻み付けるように・・・

数時間後・・・

陽も落ちてそろそろ花火が上がる時間・・・学園祭で打ち上げ花火つて凄いですよね

私と康太は新校舎の屋上でそれ待っています・・・ここには私と康太の2人だけ・・・なぜなら今、屋上には放送機材が置いてあって、放送部以外の生徒は立ち入り禁止・・・それをお婆ちゃんが特別に許可してくれたので、私達はここにいます

まあ2人きりで誰にも見られる心配が無いということは・・・

チユ・・・クチユ・・・

軽いキスのつもりが段々と激しくなって・・・

「そ、そろそろ……これ以上は止まらなくなつそう……」

「……その割には名残惜しそうな表情してゐる」

「もう……意地悪……」

結局やめることができず、私達は花火を見ながらも、花火のよつて
熱く激しくキスをしてました

5円の最終土曜日・・・

今日は確か如月グランドパークのプレオープン日だったはず・・・
さて坂本君が翔子さんと行つたのか・・・それとも吉井君が誰かと
行つたのか・・・

私? 私は行けませんよ・・・

いくら康太が行こうと誘つたって私にはもう予定が入つてますから・
・

今日は・・・

「はあ、なんだこう、死んだ人間を何回も弔わにゃならんのかね・
・

「仕方ないですよ。そういうものなんですから・・・

お父さんの百ヶ日の法要を行つ日でした。今は法要も終わつてお婆
ちゃんと軽くお昼を食べています

百ヶ日も平日だったのですが都合が合わないから土曜に繰り上がつ
て行いました

なで私は4円のとおり回りつつ金曜日の午後から早退して、
ちに来てこます

「さて、そんじゃ墓に花でも供えたら帰りつかね」

やつぱりお婆ちゃんが立り上がります

「おおと・・・ちよつと携帯を忘れてきたよひやな・・・先に行つ
とこいくれ、報告したいこととかあるだひ」

墓地の駐車場に着いたとき、お婆ちゃんが胸ポケットを探りながら
私にそり言いました

「はい、わかりました・・・」

墓前に報告つて科学者が言つて変ですね

「ん?・どうかしたかい?」

「え?・どう?」

「何か可笑しそうな顔をしてたよ」

表情に圧しきましたか・・・

「え?と、お婆ちゃんは科学者だから墓前に報告とか意味ない、み

たいな感じかと・・・

「そんなことかい・・・やうやうね・・・確かに靈とか死者の魂が、とか言うのはバカらしく思つてゐるといふもあるが・・・」

あるが?

「科学的に存在すると証明されて無いだけで、それらは否定されるわけじゃないさね。それにアタシが開発した試験召喚システムは多少なりと妖怪やお化けなんかのオカルトが混ざつてんだ、あつたつて不思議じやないさね」

「あつたらあつたで怖いんですけどね・・・」

「まああつてもなくとも、いつのまはする側の気持ちが大事なんだよ。墓前に報告して華織が父親に聞いてもらえたつて感じのことがね・・・や、行つといで」

えへ・・・そんなこと言つたあとで1人で墓地に送り出すんですか・・・まあ昼間だし明るいから怖くは無いんですけど・・・

そんなこんなでお父さんのお墓に手を合わせて、色々と報告を・・・

前に来たのは、七七日の法要のあと・・・あれから色々ありました・

四十九日

試召戦争で康太と再会して……風邪引いたときに康太がお見舞い?
?に来てくれて……学園祭で新技術の披露のために康太と一緒に
練習して……って

「全部康太関係じゃん!」

墓地であることを忘れて自分に突っ込みを入れてしまいました……

「うーん……もつと何か無いの?私……」

……無いね。いい事もわるい事も……全部康太が関係します。
・・何があるたびに康太は私の近くにいて……私を支えてくれた
り守ってくれたり……

ホント、私にはもつたいたいないくらいの人……

「今度来るときは、もうちょっと他のことでも報告できぬよ!にしな
いと……」

仕方なく報告を終えて立ち上がります……そろそろお婆ちゃんも
戻つてきましたでしょうか……
花とかはまだお婆ちゃんの車に載せたままで、お供えてしてないか
らね

お婆ちゃんを迎えて駐車場に行こうとする

「え?」

「……よつ」

いやいや……よつ、じゃないでしょ……康太……

「なんで……」

「……学園長に頼んで乗せてきてもうつた。夜通し運転し続けて……あの人すいすぎだろ……」

うん、私もそれは思ったよ……たぶん朝早くいっしに着いて康太を降りして私と合流、さつきの携帯を取りに行くと言つて康太を拾つてこじままで連れてきた、のかな……

つてそりじやなくて……

「どひじてこに来たの……？」

「……華織の親に挨拶をするため」

そつ言つて康太はお婆ちゃんから預かつてきたお供え用の花を挿し始めました

「お婆ちゃんは？」

「……車で仮眠取つてゐる」

「そり……」

金曜日の仕事を終わらせてから、徹夜でこじままで車で来て……少し戻るのを遅くしようかな……

「……こんな感じか？」

「うん、いいと思う」

花を挿し終え、康太がお墓に向かって手を合わせて・・・

そして短く一言・・・

「・・・華織のこと、必ず幸せにします」

結構恥ずかしいもんだね・・・本人に直接言つてたらもっと恥ずかしかったのかな・・・

「・・・?どうかしたか?」

康太が私の顔を見て首を傾げています・・・

「うん、ちょっとね・・・もしお父さんが生きてて、テレビであるような、娘さんをくださいっていうあれを康太に言われたら、どうにつけ反応をしたかなって・・・」

「・・・さあな・・・俺は会つたことがないからな・・・」

そうだよね・・・

「もしあお父さんが反対したら・・・康太はどうする?」

「・・・やうだな・・・」

まさか、お父さん達のように反対を押し切つて籍を入れたりとかするのかな・・・

「・・・認めてもうえるまでお願いする、かな・・・何年かかるかも・・・」

「反対を押し切つたりはしないの?」

「・・・それで親との仲が悪くなれば結局華織は幸せになれないだろ・・・だからがんばって認めてもらつ」

よかつた・・・もしかしたら、私もお父さん達のような夫婦になって、いつか離婚とかしてしまつのかなって思ったけど・・・ひとまず安心かな・・・

「ありがと、康太」

「?・・・何か言つたか?」

私の言葉に再度首を傾げる康太・・・

「ううん、なにも・・・」

大丈夫、康太となら絶対不幸にはならない・・・だつてもう不幸は乗り越えたからね

これからは幸せ一直戦・・・だといいな

にしても、切り口としても絶対に切れない絆つて、あるんだね・・・

これが男女なら俗に言ひ、運命の赤い糸つてもになるのかな・・・?
?

この度は、『その少女、行つとき』をお読みいただき、誠にありがとうございました

正直まだまだ続けたかったんですけど・・・PCがいつ逝くかわからない状況なので泣く泣く完結に・・・

なんか偶数作目は納得できない終わり方をしてしまつジンクスができつりますね・・・

今回のテーマは『復縁』で、おまけで原作ストーリーを大きく壊してはいけないという制限を入れました

あとは、康太の鼻血体质はなぜできたのかとか、2・Aはなぜメイド喫茶をすることになったのか等、小さいことに対する理由付けですね。康太の鼻血体质については9・5巻で出てきた設定で余計混乱することになりましたが・・・

もし、続きを書けるようになつたら、第2章として新しいテーマで書こうと思っています

そのテーマは・・・『原作に沿いながらどれだけ康太と華織をイチヤつかせられるか』です

自分としてはもうシリアルスは「ココ」です（笑）

だからシリアルス無しのイチャイチャオンラインでいきます

でもこのテーマだと終わりが見えないんですよね・・・ビijoで完結にすればいいかわからない

それに他にも色々書きたいものが出てきて・・・PCに不安が出てきた途端に案が沸いて出てくるって・・・

とりあえず・・・バカテスは今作の続きと今まで上げた4作のIFもの5本（優紀子一本、奏一本、心2本、華織一本）と新作2本の合わせて8本、ロウきゅーぶ！で2本、リリカルなのはstttsで2本浮かんでいます。あと小説ではないですが、バカテスのキャラの家族構成について考えてみる作品とかも・・・

でも今は長いものを書く気は起きないんですよね・・・PCも不安だし、いつ消されるかわからないから

歌詞の転載についての自分の見解は活動報告に上げたるおりです。簡単に言うなら・・・

権利者に文句言われたらどんな文章でもアウト

こんな納得できるわけがない。ガイドラインの内容だつて大まか過ぎて引っかかる方法が無いし。おまけに後から書き変えることもあるから信用もできない・・・なので従う気はありません・・・あれに従うということはもう文章書かないって言つてゐるようなものだし・・・

でもPCがダメだから今後作品上げるかわからないけど・・・書きたい設定で書きたいシーンだけを書くような短編集ならやるかも・・・書きたいシーンだけを書くって卑怯な気もするけど・・・

では、次作はあるかないか、あつたとしてもいつになるかわかりませんが・・・あつたなら、そこで会いましょう

あとがき（後書き）

最近バカテスでエッチな展開になる作品が増えてないか?と思つ・
もしかしてこの作品の影響が・・え?一日のニークアクセスが
400いくかいかないかのこの作品にそんな影響力は無い?そうで
すね、自惚れました・・・

でも一応今浮かんでいるものはそういう展開はできるだけ無い方向
で考えています・・・できるだけ、ね・・・完全に無しにはできな
いね。特に心のH.F.ものや華織の続編とH.F.ものは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7114u/>

その少女、 につき

2011年8月21日03時50分発行